
生体兵器の少女 Z

鳥山and矢吹and尾田先生が神！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生体兵器の少女 Z

【Nコード】

N5461U

【作者名】

鳥山 and 矢吹 and 尾田先生が神！

【あらすじ】

同一の作者における小説、「生体兵器の少女」のストーリーから数年たったイヴのお話。

突然イヴを「パリカ」と呼ぶ男が現れる。それからが恐ろしい地獄の日々の幕開け。サイヤ人との防衛戦。宇宙の帝王との戦闘。みたことのあるやつらが次々とイヴを襲う。

さらに、イヴはナメック星の爆発によってまた違う世界に飛ばされてしまう。そこはなんとポケモンで・・・

悟空にそっくりな戦士？

サイヤ人ラディッツ現る（前書き）

前作を見てくれた人。見てない人。それぞれいらつしやると存じます。前作を見ていただいたら分かりますが、主人公がブラックキャットのイヴなのに、ドラゴンボール色が濃かったと思います。（かめはめ波とか使ったしね）だから、いつそのこと全部ドラゴンボールにしちゃおうと。そういうわけです。でも、このイヴは、黒髪で尻尾も生えてるんで、想像はしにくいでしょうが、なんとかしてください。ちなみに、題名は「Z」となっていますが、原作はドラゴンボール改なんです。

悟空にそっくりな戦士？

サイヤ人ラディッツ現る

早くも、数年の時間が流れた。

どうもあたしが思っていたのと、時代が違っていたらしく、すでにピッコロ大魔王との戦いや、マジュニアとの戦いも終わり、平和な時代を生きていた。

ちなみにあたしは高校生だ。

「亀仙人さ〜ん！」

「おう。ブルマとイヴ。来たか。お主らも冷たいのう。遊びに来说わんと来んのじゃから」

「へへへ〜。はい。これおみやげよ」

「おうおう。気を使ってもらってすまぬの〜。そーいや、ヤムチャはどうかしたのか？」

「ヤムチャあ！？」

「あの〜。実はブルマさん、ヤムチャさんと喧嘩したみたいなんですよね〜」

「なるほど。お前らよう喧嘩するのぉ」

ズビューーーーーンッ

「おっすー!!」

聞き覚えのある声。

世界をレッドリボンと大魔王の二人から守りきった男。
孫悟空の声。

「孫く~~~~ん!?」

最後の「!?!」は悟空の足元にいる、小さな男の子に対するものだ。
何やら悟空とそっくりな顔をしている。

「悟空さ〜ん。足元にいる子は誰ですか?」

あたしは正体を漫画で読んだことがあるが、尋ねてみた。
あたしだけこの子を知ってるって言うのはおかしいもんね。

「ああ。こいつはオラの子だ」

「は、はじめまして。孫悟飯です」

「へえ。孫くんの息子にしてはなかなか礼儀正しいじゃない」

「チチがうるせえんだよ。おまけに、今は武道の時代じゃない。頭の時代だって言うもんだから修行もしてねえしな」

「はあ。もったいないな。せっかく悟空の子供なのに」

「だろ？クリリンもそう思うだろ？」

亭主が奥さんの愚痴を漏らす。

全く普通の家族だ。

だがしかし、この星にとってもない力をもつものが、やってくるのだった。

ところ変わって、とある農家。

ある牧師さんが枯れ草を集めていた。

仕事も一段落がつき、タバコに火をつけ、なんとなく空を見上げた。すると・・・。

ヒュウウウウウウウウウウウ

隕石にも見える、青白い尾を引く物体が、空に見えたのだ。

「隕石か・・・？」

それは、少し離れた場所に、大きな音をたてておちた。

牧師は好奇心に負けて、その場所に出かけた。

しかし、それはよくみると、隕石などではなかった。

それは言わば、隕石のような形をした、まるっこい機械のようだ。人工衛星かなにかだろうかと、ぼくっと思っていると、

プシュウウウウ

中が開いた。

牧師は驚き、目を見張っている。

中から出てきたのは人間。

「この星の人間はまだ生きていやがったか。カカロットとパリカのやつ。いったいなにしていやがったんだ？」

「な、なんだお前？ 撃つぞ。こらっ！」

「戦闘力たったの5か。弱い民族だ」

ズキユン

打たれた弾を彼は受け止め、そのまま打ち返したのだ。その弾丸は、牧師に直撃した。

「待っている！ カカロット！ パリカ！」

最初に、その異変に気がついたのは悟空だった。

「ん！？何かくるっ！！すげえパワーのやつが！」

「ほんと。なんか感じますっ！！」

今まで感じた気の中で、一番すごい気だ。

ラディッツで間違いはないだろう。

背筋に恐怖が帯びる。

こんな恐怖を感じたのは初めてだ。

やがて一分も経たずに、一人の男が降りた。

長髪に筋肉質な体。

鋭い目付き。

まさしくラディッツ。

「カカロット。お前、カカロットか？すぐにわかった。父親にそっくりだ」

急にそんなことを言い出したやつ。

誰からどう見たってそんなおかしい人に見えないわけがない。

「おいっ！俺はその・・・カカ・・・ってやつじゃねえぞ！さっさと帰れ！！」

「何言っているんだ？お前は間違いなくカカロットだろ？あんな強い戦闘力。地球人じゃありえんからな」

「だいたい。お前は何者なんだよ？急に俺のことをわけわかんねえ名前で呼びやがって！」

「俺か？どうして今さらそんなことを聞くんだ？ま、まさかお前。記憶を無くしたんじゃあるまいな？頭を強く打ったとか？」

「その通りだ……。俺は昔。自分でも覚えてねえが、頭を強く打ったらしい。今でもその傷跡が残ってる」

「な、なんだと……。！？」

彼はものすごくうるたえた表情をしていた。

あたしは間近で聞いていたが、周囲の人が、話に全く入っていつてないのがわかる。

この二人が、辺りから浮いている。

「そういえば。お前もお前だぞ！パリカ！！」

そういうと、パツとあたしを見た。

あたしの名前が、パリカというのは驚いたが、それ以外の話は、あたしは知っている、はずだ。

「パリカ！お前はカカロットに混じって何をやってるんだ！！」

「あたし……。？あたしは……」

「お前はちゃんとわかってるはずだろう？カカロットにちゃんと言ったのか？」

「・・・・・・・・」

「ま、まさか……。お前まで記憶を……。？」

「あたしは覚えてる。あたしたちの民族のこと。でもね。あたしの記憶は消去されたの。地球人に」

これは嘘ではない。

確かにドクターゲロに記憶は消されたのは事実。

あたしの記憶は、地球人の生体兵器としてね実験される少し前からだ。

そのとき、すでに金髪で尻尾も取られていたのだろうか。

尻尾のこの妙は感覚は、あするときにはなかった。

つまり、今のときがはじめてなのだろう。

「悟空さん。今、あなたには説明しておかないといけません。あなたが生まれた秘密。そして、あの人との関係を」

あたしは悟空に念入りに説明を始めた。

悟空とあたしは、宇宙にあつた惑星ベジータで生まれた、サイヤ人だつてこと。

その惑星ベジータはあたしたちが子供のときにすでに滅び、ほとんどの仲間が絶滅したこと。

あたしと悟空は生まれたときの戦闘力が、あまりに低かったので、地球というレベルの低い惑星に送り込まれたこと。

「その通りだ。そこで残つたサイヤ人は、住みやすそうな星を地上げし、売り飛ばして生計を立てていた。今度新しい星を売り飛ばそうとしていたが、たったの三人じゃ骨が折れそうなんだ。だから、

お前たち二人を、我ら仲間に加えようと思ったわけだ」

「ふざけんじゃねえっ！！そんなことに俺たちは絶対に手を貸すもんか！！」

「あたしも、地球を守りたい。あなたたちのやってることは間違ってるわ！！」

「ふん。そんなことは到底無理だ。お前らは俺には勝てない。それよりだな。その後ろにいる子供は、お前の子供じゃないのか？」

彼が言っているのは、孫悟飯のことだ。

悟空は必死に息子を守るために否定をしたが、全くそれは意味をなさなかった。

「父親のお前が話を聞かないんだ。息子を利用するしかないだろ？」

「俺の子に何する気だ！？」

「息子を預かる。お前たち二人で、今日中に百人の地球人を殺し、ここに死体を積み上げておけ！！それを拒否するようなことがあれば・・・わかるな？」

息子を殺す。

そう言いたいのだろう。

「やめろおゝっ！！」

悟空はラディッツに向かってパンチを繰り出そうとした。しかし、ラディッツはその手をがっしりと受け止めた。

「ふん。貴様のような、まだ完成していない戦闘力の者など、まだこの俺には及ばんっ！」

そう言うと、悟空の腹を蹴っ飛ばした。

悟空は上空を舞い、地面に叩きつけられた。

（やばいっ！）

そのとき、あたしは何を思ったのだろうか？

悟飯の前に立ち、

「この子に触らないで！」

と言ってしまった。

あたしは、その瞬間、ふと我に帰った。

あたしはどうしてこんなことをしたのか。

悟空であんなに容易くやられたのに、あたしが守れるはずないよ。

「ふんっ！！戦闘力105のやつがこの俺に勝てるかっ！！」

あたしには、彼の気攻波がプレゼントされた。

あたしは吹っ飛ばされ、海にまっ逆さまに落ちていった。

その後、悟空には何か話していき、別方向に消え去った。

共通の敵 ピッコロと悟空の同盟

「ぐ．．．くはっ．．．」

「あ．．．っ。ぐう．．．うつ」

あたしと悟空は、ダメージを受けた場所を押さえながら、何とか立ち上がった。

急なラディッツの横暴に、未だにわけのわからずにいた。

「イ．．．イヴ。すまねえ」

「いいですよ．．．。とられちゃったわけですし．．．」

「そ、それよりイヴちゃん。あなたが言ってたこと。全部本当なの？」

「は、はい。悟空さんには悪いですけど。本当なんです。すみません。もっと早くに言っておけば．．．」

「いや。そのときはきつと信じてなかったさ」

悟空はあたしにそうひきつった笑いを見せた。それがとても痛々しい。

「おい。悟空」

現れたのは、ナメック星人。いや。

ピッコロ大魔王。

「ぎゃ~~~~っ!!」

みんなは驚きまくる。

元々は完全な悪役。

当たり前でしょ。

「ピ、ピッコロ・・・？」

「お前。さっきのやつにやられたんだな・・・!？」

「お前も会ったんか？」

「ああ。戦ってわかっただろ？今のままでは俺でも貴様でも勝つことはできんっ!!」

「だったら・・・どうすれば・・・？」

「方法はひとつしかない。俺としてはあまりやりたくはないんだが、貴様と共同線をはるしかないっ!」

「ほ、本当か？」

かつての敵と共同で敵を倒す。

バトル漫画の王道ストーリーだろう。

「確かにそれしかなさそうだな」

「我慢するんだな。俺だってお前と一緒にいるなんか嫌なんだから

な」

わかったと言わんばかりの表情を見せる。
すぐに悟空は、舞空術を使って飛び立った。

「イヴちゃん。本当に大丈夫だったの？」

「はい……。何とか……」

「大変じゃったのお。お主らにそんな過去があったとは」

「いえ。そんな大したことでは……」

「それより早くあいつらを追いかけましょう」

「そうね。イヴちゃんも乗ってく？」

「いえ。別にいいです。あたしは自分でいきます」

「どうやってだ？舞空術か？」

「いえ。今気がついたんですけど。あの悟空の兄さんは、目のところに、スカウターっていう機械をつけてました。あれは、サイヤ人の持つ科学の道具で、あいての強さと距離がすぐにわかるんです。あたしたちの位置がすぐにわかったのもそのせいでしょう」

「だったら。どうやって?」

トランス
「変身を使って行きます」

トランス
「変身つて、あなたの体を武器に変えられるものでしょ?」

「そう。実は全部破壊されてたと思ってたんですが、まだ少し残ってたんですよ。ナノマシンは一日で一個ずつ増えていくようにできているので、すでに元の量くらいに戻ってるんですよ」

「でもさ。それで普通にあのラディッツを倒せるんじゃないの?」

「うーん。そうなんでしょうけど……。やっぱりあたしもサイヤ人の血が流れてるんでしょうね。なんか、それは卑怯だと思っちゃうんですよ」

「ま……。やっかいな性格だな」

「そうですか?」

でも、くだらない談笑をしてる場合じゃない。
早く追いかけないと。

トランス
変身
ウイング
翼

トランス
変身で飛べば気を使うこともなく、気配を消したままでいられる。

「俺があいつを引き付けて、尻尾をつかむ。そのあとお前がその技で」

「ああ。わかったぜ」

ついに戦いは始まっていた。

少し飛ばして来たら、まだ戦いが始まって少ししか経っていないらしく、まだこの程度であった。

頑張ればあたしも倒せるかも知れない。

「うがあっ！おいどうした？さっきの技をやってみるよお！！おいつ！こらっ！」

現在の状態では、悟空が危険な状態にあるということだ。

少しでも悟空から目を背けば、ピッコロの魔貫光殺砲で倒せるはずだ。

フェザーブレット
羽根の弾丸

あたしの羽根の弾丸は、下に向かって思いっきり突き進めた。すると、

「な、なに！？」

ラディッツは急な上からの攻撃にたじろぎ、少し離れたその瞬間。

「今だ。ピッコロッ。魔貫光殺砲を撃てっ！」

「いいのか？自分を犠牲にしちまって」

「こうするしかしかたねえっ！」

「うるせえっ！離せよっ！」

まだ元気が残ってるのか、ラディッツが悟空を飛ばそうとしたとき、

「やめろおっ！お父さんをいじめるなあっ！」

なんと悟飯が現れ、ラディッツに頭突きを食らわしたのだ。
ラディッツは致命的なダメージを受け、半分気絶状態。

「いくぞっ！魔貫光殺砲！」

ズキアアアアアア・・・

貫かれたのは、ラディッツと悟空。

結局、悟空は貫かれてしまった。

二人とも同時に倒れてしまった。

悟空にもラディッツにも大きな傷跡が出来て、明らかに致命傷だった。

「悟空さん！？どうして・・・どうして尻尾を握らなかつたんですか？」

「あ・・・ああ・・・イヴ・・・来てたんか・・・。尻尾は・・・その

気になれば・・・自分で切ることも出来るんだ・・・」

「そ・・・そういえば・・・」

「イヴ・・・わりいな。悟飯を頼む・・・」

「悟空さん！？悟空さ～～んっ！！！！」

偉大なる勇者。

孫悟空死す・・・。

後に悟飯は、ピッコロに預けられ、ピッコロの修行を受けることになった。

みんな、絶対死んでしまうと saying だったが、あたしはそうは思わない。

むしろ、悟飯にはあれくらいのしごきが向いているのだろう。

あたしはどうしようかと考えたが、神様との修行を選択した。

しかし、あたしもやっぱりサイヤ人だ。

すぐさま強くなってしまい、練習することはないと言われてしまった。

「ん～。さすがにこのままじゃ、すぐにやられちゃいそうな気がする。うーん・・・どうしよう？・・・悟飯さんのところにも行くのかな？」

あたしが気確かめ、悟飯の場所に移動を開始した。

ピッコロがどういう修行をしているのが、あたしには全く関係ないのだから。

あたしは舞空術で飛ぶことにした。

悟飯は現在、ピッコロと組手を行っていた。

しかし、実際は、ピッコロの一方的な攻撃だったのだが・・・。

「さっさと立てっ！俺はお前をさっさと殺したくてうずうずしてるんだぞっ！！」

「は、はいっ！！」

悟空と同じく、馬鹿正直が役に立っているのか、必死に努力し、戦闘力1のとき以上の力は間違いない。
はつきり言って入り込みにくい。

「おい！そのイヴ、だったか？隠れてないで出てきたらどうなんだ？」

ギクッ！！

というのが、このときに一番似合う効果音だろう。

「ば、ばれちゃった？」

「ふん。貴様程度なら簡単に見つけられるさ」

「あっそ・・・で？あたしを呼んだんだから、なにかあたしを必要としてるんでしょ？」

「ああ。当たり前だ。さっしだけはいいな」

「そりゃどうも」

「では悟飯。やつを倒せ！」

ん？どういうこと？

「え？僕があの人を？」

「そうだ。お前が倒すんだ」

「へ？あたし、強制参加！？」

「当たり前さ！」

現在の事態を整理しよう。

簡単にいうと、隠れて見てたのにピッコロに見つかって、悟飯と・・・戦えって言われた？

悟飯と戦うことになった。

マジで！？

本気で！？

次回に続く。

共通の敵 ピッコロと悟空の同盟（後書き）

次回は始めての全部オリジナルストーリーになると思います。

初対決 悟飯対イヴ

「いいか？イヴも悟飯も本気で戦えよ。つまらん戦いをしたら、俺が貴様らをぶっ殺しちまうからな！！」

軽くピッコロからの脅しがあったあと、ついにあたしと悟飯の戦いがスタートした。

「いきますっ！！」

はじめの先制は悟飯から、悟飯は一瞬にしてその場から、後ろに回った。

あたしは背中に思いつき蹴りを受け、前に吹っ飛ぶ。

あたしも何とか耐えて、悟飯がいた場所をぱっとみるが、すでにその場所に悟飯はいない。

「魔閃光っ！！」

後ろの岩に隠れていた悟飯が、いきなり繰り出した技。

あたしはそれをかわして、悟飯に向かってパンチを繰り出す。

かわされたパンチが空回りして、隙が出来る。その瞬間に、悟飯のけりが、あたしのみぞおちに食い込んだ。

空に飛んだあたしはそこで変身して、翼を出す。

あたしは必殺技を使う決心をした。

フェザーブレット
羽根の弾丸！！

悟飯に一発一発が命中していく。

悟飯の気が少しずつ減っていた。

40発程度打ちつけて、技を出すのをやめた。

「はあっ・・・はあ・・・。はあ・・・。」

肩で息をしているあたしが見たのは、あたしの技をまともに受けていたのに、普通に立ち続けている悟飯だった。

腕をクロスさせ、防御体制でいたが、まだ立ち続けていた。

「さて、次は僕の番ですね？」

悟飯が防御をとき、腕をかまえ、ポーズをとった。

その見覚えありまくりのポーズで、悟飯は技のためを行っていた。

「かゝめゝはゝめゝゝゝゝゝゝ」

あたしもそれに対抗すべく、腕を変形させた。

トランス
変身
ビームガン
光線砲

バツィカ砲のような腕に、光が溜まっていく。

あたしの気を球状に集中させる。

「波あああああっ！」

悟飯がかめはめ波を撃つ。

青白い光のそれはビームのようにあたしに襲いかかってくる。

あたしは出来るだけそれをこちらに引き付けた。

そして、

ビームショット
光線銃っ！！

かめはめ波に近いビームが悟飯に向かう。が、すぐ近くにある、悟飯のかめはめ波と合わさり、お互いが押し合っていた。

はじめはあたしの光線銃が勢いよかったのだが、そのうち、またかめはめ波が勢いを取り戻し、お互いが力を譲り合わない。

しかし、数分間たつと、だんだんとかめはめ波の勢力が強まってきたのだ。

「きやああっ！！」

あたしはかめはめ波に負けて、押し飛ばされて岩に激突した。
あたしは何とか立ち上がり、さらに別の技を繰り出そうとしたところで……。

意識を失った……。

しばらくして、気がついたときは、悟飯がいなかった。

「あっ！！よかった……。目が覚めたんだね！！」悟飯はどこからとってきたのか、肉を焼いている。
たぶん、この肉は恐竜か何かだろう。

「そうだ。食べる？このお肉？あなたもよくお腹空くんでしょう？僕のお父さんみたいに」

「ううっ……。ま、まあね……」

「大丈夫でした？頭おもいつきり打ってましたけど・・・？」

「え・・・？う、うん・・・」

そういうと、悟飯はピッコロからもらったと言う剣を使い、あたしと自分の二人分に肉をわけてくれた。

あたしに渡された肉は程よく焼け、サイヤ人の本性から言って、めちゃくちゃお腹は膨れる。

でも、女の子としては、こんな食べ物あまり食べたくは・・・。
いや、お腹は空いてるんだけどね？

食べたいんだけどね？

う~~~~ん？

「どうしたの？食べないんなら、僕が食べちゃうよ？」

悟飯はかぶりつきながらあたしに向かって言う。

間違いなく、あたしのも狙ってるだろう。

数分のわずかにペロツと平らげた悟飯が、あたしに勝負の感想を話していた。

「すごかったですね。^{トランス}変身能力。あの力のこと、お父さんが言っていました。すごいです！」

悟空、よけいなことぺらぺらと喋りすぎ。

「僕も実際に戦ってみてビックリしました。^{フェザーブレード}羽根の弾丸でしたっけ？あの技がびっくりしました。あと、^{ビームショット}光線銃も！！」

「ううん。あなたのかめはめ波もすごかったわよ。悟空さんに負けないタフさも！」

「ふふ。ありがとうございます」

悟飯はうれしそうに笑った。

まさか。

彼は悟空を超えるかも知れない。

漫画で見ても、同じ時期の悟空はないが、明らかに強い。

しかし、実際に体験してみると、こうも違うかと驚かされる。

悟空の遺伝子が戦いのセンスを生んで、魔族流の修行で、さらに戦いに似合ったパワーを持っている。

あとは、精神力を鍛えるだけだろう。

あたしなんかじゃ、まだまだ力不足なのだ。

さて、ピッコロに修行させてもらうのも一つの手ではある。

だけど、悟飯の邪魔をしたら悪い。

あたしは悟飯には礼を言つて、神様の宮殿に戻っていった。

あたしは、あたしの修行方で戦いに勝ちたい。

ナッパやベジータに勝ちたい。

突然。

悪夢はやって来た。

それは、ついにサイヤ人たちが地球にやって来た証だ。

とんでもない、今までに感じたことのないような大きな気が、あたしにも、みんなにも感じられていた。

サイヤ人はこうもすごいのか。

地球人であるみんなは、確かに驚いていた。

しかし、今日の日のために修行をしたのだ。
気合いは十分。

あたしは、変身^{トランス}で、ナツパやベジータが向かう、悟飯とピッコロの場所まで行った。

恐るべき科学！ 栽培マンと戦士たち

すでに、ピッコロと悟飯のところに、ベジータもナツパもいた。

「ほお……。パリカもやって来たか。てっきり逃げ出したかと思っただぜ」

ナツパがあたしのことをからかう。

しかし、あたしは気にも止めなかった。

あたしは、知っている。

この二人の恐ろしさを。

きつと悟空でも、たった一人で二人を片付けるのは無理だ。

唯一、原作と違う可能性を持つ、あたしが、運命を変えなくてはいけない。

ヤムチャ、天津飯、餃子、ピッコロが死んでしまうという、最悪な運命を。

あとあとに、仲間が次々とやって来た。

唯一、悟空を除いて。

ベジータもカカロットが来ていないとわかったようで、

「まだカカロットは来ないみたいだなあ？」

「ふん。このまま全員を殺してしまうのも惜しい。そうだなツパ。栽培マンの種がまだ残っていただろう？」

「ああ。あと七粒だ。そういや、こいつらも七匹だ。ちょうどいいな」

ナツパはそういうと、緑色の種を植え、緑色の液体をかけた。

「おいイヴ。サイヤ人たちが今かけた、あれはなんだ？」

「あれは・・・栽培マンといって、サイヤ人の持つ科学の一つです。戦闘ができるように作られた、植物のような生き物で、かなり手強いものです。普通の栽培マンだったら、だいたい、悟空さんのお兄さん、ラディッツさん程はあるはずです・・・」

「ラ、ラディッツって・・・、確か、悟空とピッコロの二人でかかってようやく倒したやつだろ？あ、あいつと同じパワーってことか・・・」

クリリンが冷や汗を流した。

確かに、悟空が手こずってた相手。

そんなやつと同格のパワーと戦うのだ。

それは嫌だろう。

でも、あれから、かなりの修行をしたのだ。

きっと勝てる。

あたしはそう信じている。

「どうした？あの弱虫ラディッツにも勝てないから、逃げる相談でもしてるのか？」

ベジータが、そう冷やかす。

余裕、自信、風格、それら全てが入り交じり、強いベジータを誇っている。

サイヤ人の王子で、星の名前までもらうほどの実力、恐らく、彼を倒すまでの力はないだろう。

でも、せめてナツパを追い詰めるまではしたいものだ。

「よしっ。栽培マンができたな。一人ずつ相手にしてやれ。栽培マン。ちゃんと本気を出して全力で戦えよ？」

ベジータは念を押して言う。

地球にも、戦闘力が高い人間がいることを知ったからだろう。

「よし。俺が行こう」

始めに戦おうと決意したのは、天津飯だ。

あたしは一応、念を押した方がよいだろうと、天津飯に声をかけた。

「栽培マンは何でも溶かす液体を、頭部から放出することがあります。まずはそれを気をつけてください。次に、あいつらは、自爆することもできます。倒せたと思って、油断しないでください。最後のとどめまでさしてください」

本当はヤムチャに言った方がよいのだろうか。

天津飯は覚悟を決め、栽培マンと戦うことにした。

はじめは栽培マンからのパンチ。

天津飯はそれをかわし、逆に一撃を食らわす。

また、蹴りを一発食らわして上空に吹き飛ばし、また上から下に蹴り飛ばしたのだ。

これは、天津飯の圧倒的な力だ。

栽培マンは、肩で息をしていた。

「ギギギ……」

天津飯をぎろつと睨む。

そして、栽培マンの大技を使おうとした、そのとき、

ズアアアッ

何かおぞましいパワーに、栽培マンはバラバラになり、地面に落ちた。

そのおぞましいパワーは、誰かの攻撃だ。
その方向には、ベジータが手を突き出して、不気味な笑顔をしていた。

「ベジータ。何もそこまで」

「あいつは勝つことはできなかっただろう。それにあいつは、舐めてかかっていた。俺はいったはずだ。『全力でやれ』とな」

栽培マンも恐怖の顔をしている。
明らかにこいつはやばいと気がついたのだ。

「おいっ！次は全力でやれよ！」

ナッパが促す。

「ギッ！」

次の栽培マンは、さっきの思い知ったのか、本氣の目をしている。

「じゃあ、次は俺が・・・」

「俺がいく！」

ヤムチャが名乗りをあげた。

クリリンは一度、ドラゴンボールで生き返っている。

もしも、今、もしものがあつたら、大変なことになる。

だから、ヤムチャは、栽培マンのところに向かった。

あたしは願った。

運命が変わってることを。

ヤムチャが勝って、栽培マンが負けてくれることを。

ヤムチャが攻撃をしかける。

栽培マンも返し、しばらく高速戦が続いた。

ひたすら拳を打ち合う戦い。

だが、徐々にヤムチャが力を押していき、ついにヤムチャは、地面に栽培マンを叩きつけた。

その場には大きな穴があき、栽培マンがその場で仰向けに倒れた。

「どうやら、地球人をなめすぎたようだな・・・」

「ふん。今度はなめていたのは貴様の方なようだぞ・・・？」

栽培マンの手がピクピクつと動き、ヤムチャに抱きついた。

「ギギイイイツ！」

「ヤムチャさんっ！」

「くそっ！くそおっ！」

栽培マンが白い光を帯び始める。

そして、一瞬光が二人を包み、大きな爆発音が響いた。

ドオガアアアン！！

その場にいたのは、すでに倒れたヤムチャ。

しかし、栽培マンは、バラバラに砕け散っていた。

自爆して相打ちになってしまったらしい。

「お、遅かった・・・」

「ヤ、ヤムチャさんは予感してたのかも。俺が行こうとしたとき、それを拒んだんだ。俺は二度と生き返れないから！くそっ！」

クリリンが、栽培マンをギッと睨み付ける。

「みんなっ！はなれろっ！」

クリリンは手を前に構え、気攻波を出した。

それはとてつもない大きな気で、かなりのパワーだ。しかし、スピードがない。

「す、すごい気だが、スピードがない！まるでよけると言っているようなものだ！」

ピッコロの言う通りだった。

栽培マンはそれを難なくかわしてしまった。

作戦失敗かと思われた、そのときだ。

気弾は少し上空に上がり、いくつにも分裂をした。

「いつけえええっ！」

クリリンははじめからこれ wait していたのだ。

狙った通り、五ひきの栽培マン、そして、ベジータとナッパを狙い、全員に攻撃が命中した。

栽培マンは分裂したり、粉々になったりしていたが、ナッパやベジータはなんともない。

栽培マンこそいなくなったものの、ナツパとベジータが強力なのは、周知のこと。

全員がわかっていた。

「さうて。いよいよお遊びはこれまでだ。覚悟はいいか？地球人共、そして、カカロットの息子に、パリカー！」

これがサイヤ人のパワー！？ ナッパとの戦い

ついにナッパとの戦いが始まる。

名門からの超エリート戦士。

残念なことに、あたしも悟空も、下級戦士だ。
相当な努力をしないと、彼らは越えられない。

「さうつてと、ナメック星人はドラゴンボールについて話してもらわないといけねえからなあ。そして、サイヤ人の裏切り者をあとでじっくりと料理してやるぜ。なあ、パリ力。そして、カカロットの息子よあ！」

あたしと悟飯は最後の楽しみらしい。

となると、始めにやられるのは、天津飯や餃子や、クリリンだ。

「まずは、その三つ目からやってやる！」

そういつて、ナッパは猛スピードで天津飯に向かう。

ナッパが一撃は天津飯を確実に痛めつけ、天津飯をぶっ飛ばした。

後方の大きな岩にあたり、それとともに破壊された。

天津飯の気が小さくなる。

肩で息をしている天津飯もどうにもならないことを悟った。

「天さ~~~~んっ！」

餃子が天津飯に駆け寄った。

血を流しながらも、天津飯は、

「だっ、大丈夫だ・・・ぐう・・・っ・・・」

ギツとナツパを睨む。

しかし、天津飯はナツパの威圧感におされ、何もできない。

「まずは一匹目だぁ!!」

大技を決めようと、ナツパは手にパワーをためる。

電気のような、ビリビリした光が、腕に集まってくる。

「くらえっ!!」

ナツパは、その、光を天津飯に投げつける。

「ちっ……!!」

しかし、天津飯はぎりぎりにかわした。

なんとか相手の技をみきり、直前で動いた。

あの技の正体がわからないから、近くまで見切る作戦だった。

それは見事に成功して、無事、天津飯は命を食い止めることができた。

自分の右腕を犠牲に……。

「ぐ……ぐはっ!」

「て、天さんっ!」

「くそ……。ござかしいやつらめ」

ナツパは非常にいらだっていた。

地球人、戦闘力が弱いくせにいつまでもしぶとい。
と思っっているに違いない。

（今なら、ナツパを倒すチャンス！）

トランス
変身
ビームガン
光線砲

悟飯との対決のときに、使った技。

かめはめ波や魔閃光にも相当する大技、ビームショット光線銃を放ったものだ。
あたしは気を集中し、気弾を銃口に集めていく。

最初は小さな玉の塊だったが、少しずつ、パワーが上がっていくように、大きな形に変化してきた。
それをナツパも気づいたのか、

「どうした？パリカ……。それを俺に当てる気なのか？」

あと少し……。

あと少し……。

来た。

あたしのパワーでも、最とも強いくらいのエネルギー玉が

「いっけえええっ！！スーパービームガン超光線砲ッ」

ズギアアアアオオオオオオツ!!!

あたしの超光線砲^{スーパービームガン}が、ナツパに向かっていった。

「ナツパ！かわせ！戦闘力が8000以上ある！」

「な、なに！？」

ナツパはベジータの言葉に驚いた。
まさかあんなやつに・・・。

「ち、ちくしょおっ!!」

しかし、ナツパは少し遅れてしまった。
腕に怪我をおい、岩に叩きつけられた。

「ち、ちくしょおっ!!パリカああっ!!」

ナツパはかなり怒りが高まっている。
誰かの命を消さなくては気がすまない。

「チビ！てめえをはじめに消し飛ばしてやる！」

はじめに当たたのは、餃子だ。

ここまでくると、サイヤ人の誇りもくそもなくなってしまうている。

「や、やめなさいっ！」

「うおりゃああっ!!」

天津飯の右腕を切り取った技が、今、餃子に襲いかかっている。餃子は一度、ドラゴンボールで生き返っている。

今、彼が亡くなってしまうと、天津飯の心に、深い傷が起きる。

「ま、間に合わないっ！！」

餃子を守りたい。

あたしはそれを思い、
トランス
変身で追いかける。

（あれを使えば！）

一つの方法を考えた。

もう、残った技はこれしかない。

「かめはめ波!!」

ドキヤアアアアアン！

かめはめ波の反作用を用い、勢いを増したあたしは、すぐに餃子に近づけた。

[illegible]

「……っあぐう……っ！」

直にあたしはその攻撃を受けた。

天津飯が片手を無くしたその技。

あたしが受けたらどうなるのだろう。

ろくな計算もせず、にすぐ行動をおこしてしまう。

あたしも悟空と同じ民族なのだ。

あたしもはつきりとそれを思った。

「お、お腹がぁ……………」

あたしは、みごとにお腹をさかれていた。

そのまま、あたしは仰向けに倒れた。

痛みのせいで、立ち上がることができない。

「お、おい…………パ、パリカ…………!？」

なぜか、ナツパが動揺を見せた。

みんなも、その動揺を不振に思った。

「どうした！ナツパ！やはり妹には手は出せんのか？」

ベジータはナツパにからかうような言い方で、ナツパを促した。

「い…………妹…………?ど…………どういう意味…………?」

あたしも、辛うじて喋ることが出来た。

ナツパは冷や汗をかいている。

「な、なんでもねえ！さきにサイヤ人を殺したら意味がねえだろっ
！！余計な早死にはするなっ！パリカ!!」

無理に話題を戻すナツパ。

あたしや仲間の不審な気持ちは深まるばかりだった。

もしかしたら、あたしは、ナツパと血縁関係があるのかも知れない。

しかし、あたしだってサイヤ人だ。
そうあったっておかしくはない。

あたしは、何とか、立ち上がった・・・。
さっきの技が、腹を裂き、血が流れている。

「うぐ・・・つ。はあ・・・はあ・・・ううっ・・・」

必死の思いで立ち上がる。

あたしはもはや、貧血を越えた体の状態。
立ち上がっただけでも大したものだ。

「だ、大丈夫・・・？イヴさん？」

「し、心配しないで・・・餃子さん・・・あたしは・・・ただ、
攻撃を受けただけ・・・。うっ・・・そ、それに、ナツパには聞きた
いことがあつ・・・」

まだ血が大量に流れ出る。

あたしはついに、倒れざるをえなくなった。

貧血やダメージ。

全てがあたしを蝕んだのだ。

はじめは、真つ茶色な地面が見えて、そのまま、体をつつ衝撃を受
けると、そのまま視界がブラックアウトした・・・。

ナツパの脅威！ 仲間たちが大ピンチ！

あたしの体に感覚が蘇った。

倒れてどれほどの時間が経ったのか、あたしの視界がシャットダウンした、直前のことを思い出した。

確かに、あれは体の限界だった。

血が流れて、出血多量というのもあったし、体に対してのダメージが大きかったのだ。

どちらにしても、もう長くは持たないことを悟っていた。

ということは、あたしは死んでしまったのだろうか？

いや、きっとそれはないだろう。

今のあたしはすごく全身が痛い。

本当に死んだ人間が、痛みを感じるわけがないだろう。

おそらく・・・。

だったら、あたしはいいたい、どうなってしまったのだろうか？

あたしは、ふらふらする体を何とか立ち上がらせて、辺りの景色を見守る。

「ぎゃああああっ！！！」

叫ばずにはいられない事態だ。

目の前少し先、右手を無くした、天津飯が倒れてしまっている。
気がない。

死んじやっているのだろうか。

また、餃子の姿が見当たらない。

まさか・・・、

「よ、よかった・・・イヴ。無事だったか」

声をかけてくれたのは、クリリンだった。

「あ、あたしが倒れてる間に・・・？」

「ああ・・・。天津飯も、餃子も・・・、ナツパにやられっちまった・・・。くそっ！俺たちでは、あんなやつ、どうしようもないっ
！」

ナツパは現在、悟飯に対して、猛攻撃を加えていたときだった。

「へへっ。パリカ。まだ生きていやがったかあ。だが残念だったなあ？お前がかばったやつら。みんな死んじまったぞ？」

あたしは、何か、嫌な気分が込み上げてきた。

それは、もちろん、ナツパに対する憎悪からだろう。

しかし、もう一つ、なぜだか違う感情が、あたしに流れている。

なんだろう・・・？

この感情・・・？

あたしの中を渦巻く。

心臓に湧き出る、この悪意に満ちた気分。
あたしの体に渦巻く、醜い感情が、あたしを揺さぶり、動かそうと
している。

「てめえ……。さつきから誰に攻撃してやがる？二人もぶつ殺し
たくせにまだ足りねえのか？ん？」

「へへっ。俺たちの目的は地球を売りさばくことと、不老不死にな
ることだからなあ。まだまだ足らねえよ！はははっ！！」

「イ・・イヴさ・・・に・・・・・げて・・・！」

悟飯は苦しい声を漏らしながら、あたしに投げ掛ける。

しかし、あたしはそれを全く耳に入れようとはしなかった。

あたしが今、真っ直ぐ見ているのは、ナツパただ一人だ。

トランス
変身

スーパーフェザーブレード

羽根の超弾丸！

シュシュシュシュシュシュシュシュシュ

超高速で弾丸を打ち出す。

いくらサイヤ人の強靱な肉体とはいえ、そんなものが当たれば、た
だで済むわけがない。

「どおらああっ！」

ナツパは全身に気合いを入れ、その弾丸を吹き飛ばした。

「な．．．！？」

「へっへっへっ。今のが攻撃のつもりか？攻撃するのはよお！こうやってやんねえとなあ！」

しまった！油断した！

ナツパは悟飯に最高の一撃を放とうと、口を開けた。

「があああああつ！」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！

「ぐあ．．．っ！」

しかし、当たったのは悟飯じゃなく、なんとピッコロ。

「ピ、ピッコロさんっ！？」

「ご、悟飯。早く、逃げろっ．．．。くそ．．．ピッコロ大魔王がすることじゃないぜ．．．。ちっ．．．でも、まあいい。悟飯．．．お前といた、数カ月間は．．．悪くなかった．．．ぜ．．．。ありがとう。悟飯。死ぬなよ．．．。」

偉大なる魔王ピッコロ死す．．．。

「ピッコロさん！-！」

あたしもまさかこんな事態になるとは思わなかった。
最悪だ……！

悟飯の恩師を奪うなんて……！
あたしは、なんてことを……！

しかし、あたしより、強い怒りを見せたのは、悟飯だった。

「うわあああああああつ……！！魔閃光……！！」

涙を流しながら、師匠にならった、敵討ちの一撃を放った。
その気は、あたしの超光線砲スーパーステームガンくらいのパワーがあった。
しかし、その程度じゃ弾かれてしまう。

トランス
変身
ビームショット
光線銃……！！

魔閃光と合わさったそれが、ナツパに衝撃を食らわした。
しかし、

「うおりゃああつ……！！」

それを拳で打ち返し、近くの岩に当たった。

「ピッコロさん……。ごめんなさい……。イヴさんと一緒に力を
込めてやったのに……。仇。とれなかった……。逃げる力も。
ない……。」

悟飯は、地面に膝から落ちた。
全部の気を使い果たしてしまい、もう一片も残っちゃいない。

「はあっ・・・はあ・・・これは・・・ダメかも・・・」

あたしも体力が限界に近い。

「さて・・・、カカロットが来てから、息子はじっくりといたぶり殺す。だからまずは、パリカから行くか！」

あたしに向かってやってくる。
もう少し動きたくない。

「ただ倒してもおもしろくないからなあ！！じっくりといたぶってやるっ！！」

「はう・・・っ！」

ナツパが何をしたのか、あたしも始めはわからなかった。
力がどんどん抜けていく・・・。

尻尾を捕まれている・・・。

「い・・・っ！」

ちよ、ちよっとヤバい感じになってるっ！！

ナノスライ・・・

クニッ

「うぁっ・・・！」

力が吸いとられるっ！

それに文字だけだから下手したら変な感じにとらえられちゃうっ！

ただ尻尾を握られてるだけだからね？

わかってるよね？

「はっ・・・！」

プチッ

よし。

尻尾を千切った。

とかげのように尻尾も千切られる。

あつぶない・・・。

ふざけんじゃないよ！

全く！！

あたしはぱつと遠退き、ナツパに向かい合った。

「あれ？この気は・・・？悟空さん？」

「お、お父さんの気？」

「なに言ってるやがる？」

「ほう・・・カカロットかどうかはわからんが、確かに強いパワーの持ち主がこっちにやってきている」

悟空がやっと来てくれた。

その悟空は、あっという間にあたしたちのところへやって来た。

「クリリン！悟飯！イヴ！お前たちは無事だったか！」

「悟空っ！」

「悟空さ〜ん」

「お父さん！」

「待たせたな！みんな！」

ついに主人公であり、希望の光。

孫悟空が現れた。

やっときてくれた。

「これなら、なんとかあいつらを倒せるかもしれないぞ！」

「ああ。だけど、ここからはもう一人で戦うよ。お前たちもよく頑張ってくれたからな！」

「それはむちゃだ！いくら悟空でも！」

しかし、悟空の表情を見た途端。

あたしとクリリンは明らかな殺気を帯びた目に、恐怖を覚えた。

「あたしもやっぱり戦う！あたし、どうしてもあの人に聞きたいことがあるんです！」

「でもお前・・・」

「大丈夫です。あたしをなめないでください」

あたしは本気だ。

ナツパはあたしが倒す。

さあ。次回。本当の地獄がはじまる。

一騎討ち ナツパ対イヴ（前書き）

すみません。

間違えて、前作にこれを投稿してしまいました！！

ごめんなさい！！

間違いです！

削除しておきましたが、読んでしまった方は申し訳ありませんでした。

一騎討ち ナツパ対イヴ

場所を変えて、岩場が多数あるこの場所。

あたしとナツパは戦うことになった。

ナツパは相変わらず余裕の笑いを見せている。

子供だからという笑いだろうか、それとも、女だからだろうか。

はたまた、戦闘力が低いからだろうか。

どっちにしても失礼極まりない話だ。

「へへへ。まさかお前がこの俺を倒しにきてくれるとはなあ！？ベジータなら力カロット程度のザコならどうせ瞬殺だ。よかったなあ？すぐにあの世で会わせてやるぜ」

ナツパは体を構えた。

あたしもそれに応じて構えをとる。

「どりやああああ！」

ナツパが拳をつく。

あたしはそれをかわし、逆に攻撃を繰り出す。

しかし、その攻撃はナツパには簡単に受け止められてしまった。

「へへへっ。これが攻撃のつもりかよ！楽勝過ぎて屁がでちまつぜ」

彼は攻撃したあたしの手をむんずとつかみ取った。

「じゃあな！」

ぶんっ

あたしが投げ飛ばした。

「あり~~~~っ！」

投げ飛ばされたあたしは、何とか^{トランス}変身して、耐えた。

「ふうっ。あつぶない。あつぶない……。全く。あんな雑な攻撃。やられたの始めてだわ」

とは言ってみたものを、はてどうしよう。

あたしの現パワー全てを注ぐ技は、^{ビームガン}光線砲しかない。

これでもおおよそ戦闘力8000くらいしかないだろう。

ナツパを倒せる決定打になるためには、相当力を溜めなくてはいけない。

「はあああああああああああああああああああ〜」

あたしは右手に気を溜めていった。

ナツパはあたしの様子を伺っている。

つまり、今がチャンスなのだ。

「はあああああああああああああああああああ〜」

右の目映く輝いていく光が大きく、大きくなっていく。

^{トランス}
^{ビームガン}
変身
光線砲

銃砲に形を変えて、エネルギーを溜める。
あたしの全神経から力を吸収させていく。

「はあ．．．はあ．．．も、もうそろそろ．．．かな．．．よし．．．いくよ．．．！」

スーパービームガン
超光線銃ッ！！

ズアアアアアオオオオオオオツ！！

「な、な．．．は、早ええ！！」

ナツパも驚いていた。

さすがにこのパワーに及ぶわけがない。

あたしは勝った。この戦いに。

「くっそおおおおおっ！！」

ナツパは腕を十字に交差させ、胸元につける。

ガード体制であたしの光線砲^{ビームガン}に対抗する。

「ぐ．．．おおおお．．．お．．．っ」

ナツパが徐々に押されだした。

「く．．．っ。パ、パリカ^ごときにこの技を使うはめになるとはな．．．」

ナツパは口をあんぐりと開ける。

「ぐあああっ！！」

ズギユウウンッ！

口から出された、ナツパの攻撃により、あたしの光線砲が少しずつ、消されていった。

ドコオオオオン・・・

ついに二つのパワーが合わさり、爆発を起こした。

力は互角！

あたしはそれに気がついた。

あたしは地面に降り立ち、

「全く・・・。あんたのタフさには心底呆れるわ・・・」

「違うな。タフがこれを成し遂げてるんじゃない。力の差がこれを成し遂げてるんだ」

「つまり、あんたの方があたしより力が上と・・・？」

ただ頷く。

イラッ！

「へえ・・・。ならさ。そろそろあたしの力を使うぞ。地球人の科学力をね・・・！」

気持ち落ち着かせる・・・。

あたしの力も、そろそろ落ちてきた。

でも、ナツパの気も減ってきている。

これは、あたしも何とかなるのかもしれないという、光としてあた

しを導く。

今、あたしが頼れるのは、ナノマシンの力だけ。

トランス
変身

髪の毛パンチ

「へへっ！変わった能力を持ったんだなあ？パリカあ！だが！その程度では俺は倒れさせんぞ！」

ズガアアアアン

あたしが髪の毛でひっぱたこうとした瞬間、ナツパが間合いをつめ、鳩尾に一撃を放った。

あたしは見事に吹っ飛び、岩を二、三個破壊した。

「ぐはあっ！はあゝっ！こわっ！いたっ！」

あたしもびつくりしていたが、ナツパも驚いていた。

「ほう。まだ息があるか……。こいつはしぶといやつだな」

「ふうゝ。まあね……。でもそろそろ、限界もくる時間だろうか
らね……。あたしの全パワーを使ってやる！」

トランス
変身！

いつもにくらべ、ものすごい集中力を使った。

ナノマシン一つ一つに力を呼び覚まさせるように集中する。

指先のナノマシンから、空気中にある分子の配列を入れ換えさせる。それは強力な金属、オリハルコンに変化し、徐々に形を作っていく。

自分の体より大きな、大きな金属製の剣を作っていく。
紋様を自分で作り上げていく。

「完成……名前は……」

らいめいごうごうとう
雷鳴豪豪刀！！

なんか・・・武人みたいなものになったけど・・・
どうして、「雷鳴」なんてごつい名前をつけたのか。

ビリッ・・・ビリッ・・・ビリッ

細胞の動きを活性化させ、静電気程度の電気を起こす。
かのナノマシン、LUCIFER^{レイルガン}の力を応用させたものだ。
某黒猫さんが電磁銃を使えるようになったもの。

「これにかかれば、あんたなんかいちころよ!」

「へへへっ！んなこと出来るかよお！この俺様からよ！」

「やっ
てや
る。や
っ
てや
るよ
っ
！」

必殺
・
・
・

「弾けて混ざれええええええええええ！！」

突然、遠くで叫び声が聞こえた。

この声はベジータ。

恐らく、悟空に追い詰められたベジータが、パワーボールを出したものに違いない。

ドクンドクンドクンドクン……

ナツパの様子がおかしい……。

ま、まさか……！

「グオオオオアアアアアアアア！」

ナツパが大きく、大きく、獣のように変化する。

ま、マジっすか！？

「よし。大猿になったぜ……。戦闘力がいつきに十倍だ。これは勝てねえよなあ！？」

ベジータの馬鹿！！

秘密解明！？

ナツパとイヴの秘密

現状の説明。

自分の体の1、5倍の剣を片手に、驚き戸惑ってるあたし。

その先にいる大猿化している、ナツパ。

大猿化したのに、喋れる原因は、ナツパがエリートサイヤ人だからだ。

悟空さん。おじいさんを倒してしまったのは、自分なんですよ。黙っててすみません。

いつか謝りに行ってあげてください。

「ええ〜つと・・・どうしようか・・・」

現状の整理が出来たところで、あたしはナツパを押さえてはならない。

通常の状態でも、ナツパには押されていた。

いきなり十倍に上がっている。

こんなもの、うまくやっていかないと、すぐにやられてしまう。

「や、やばい！」

ナツパが連続的な攻撃をしかける。

動きはスローになるが、パワーが上がっている。

「このデカブツ！」

尻尾に回り、尻尾をちぎろうと、剣を構える。
しかし、

ブンッ！！

尻尾があたしを叩き落とす。

翼を生やしたまま、あたしは地面に押し付けられ、あたしの跡がついた。

「ど、どうしよ……。このままだと……」

執拗にパンチを繰り返すナツパ。

何とか三次元の動きでかわしていくが、いつ当たるか、気が気じゃない。

「はっ！！」

あたしはナツパが構えてきた拳を横にかわし、思いっきり切り落としてやった。

「がはあああつ！！」

腕から血が流れる。

ナツパは身をよだえていく。
今だ！

「おりやあああつ！」

ナツパの後ろに回り、尻尾をぶちきった。

「ぎやあああああああつ！！」

ナツパが元の大きさに戻っていく。

元のサイズに戻ると、ナツパは右腕を押さえている。

「天津飯さんの痛み。わかりますか？」

天津飯もナツパに右腕をちぎられた。

これはその仕返しだ。

「では、最後の一撃。いづくぞおおっ！」

らいめいしんげきは
雷鳴進撃波！！

「ま・・・まで・・・っ！・・・。この俺を切れるのか・・・？
兄である・・・この俺を！」

な、何！？

ズズズズズズ

「い、今・・・なんて言った・・・？」

「へっ・・・へへへ・・・。兄貴である・・・この俺を・・・殺す
なんて・・・できねえだろ？・・・くっ・・・くくくく・・・。」

思考回路をフルで回転させる。

あたしが・・・？

こ、こんな・・・こんなやつと・・・兄弟・・・？
そんなこと・・・そんなこと・・・。

「でたらめ！言うなあゝっ！」

バシッ！

あたしは一発、ナツパの顔に拳を押し当てる。

「へっ・・・へへへ・・・。兄貴ってわかったら、急にパンチも出来なくなっただか？」

「違う！違う違う違う！あんたなんかあたしの兄弟な訳がない！違う！違うんだ！」

「違うわけねえぜ・・・。お前は俺のお袋にそっくりだ。サイヤ人の誇りを無くした。俺の親どもになー！」

「ど・・・どういう・・・こと・・・？」

「あれは・・・今から二十年以上昔のことだ・・・。」

当時。サイヤ人たちは、惑星ベジータという星で生活をしていた。しかし、元々は漂流民族であったサイヤ人は、元々からさまざまな星で地上げ屋を行っていた。

しかし、そんなある日。サイヤ人は突然、殆どが滅んだ。理由は、惑星ベジータの滅亡。

小惑星の大量衝突によるものだった。

助かったのは、別の星を攻めていた、ベジータとラディッツ。

そして、別の星で侵略をしていたナツパとカカロット。

さらに、「逃げていった」サイヤ人、名を、「ホレン」「ピーマ」と言った。

ホレンとピーマは夫婦で、すでにナツパを生んでいた。

ナツパはあまり戦闘力が高くなかったので、他の星に送られた。

それを、二人とも恨んでいた。

「どうしてエリートであるナツパが、戦いの名門道場を出てから、別の星に売られたんだ！」と。

サイヤ人滅亡より前、ナツパを探してさまざまな星を転々と探し回っていた二人は、他のサイヤ人にこう言われた。

「戦いの本能を失った恥さらし」と。

彼らは逃げるために、一人のサイヤ人がいる、地球にやって来た。

しかし、そのサイヤ人はカカロット。

戦闘力があまりにも低いために、戦闘力が同じく低い地球に送られたような、サイヤ人のなかで最も弱いやつだ。それならいいだろうと、隠れて過ごしてきた。

その後、一人のサイヤ人を生んだ。

名前は、「パリカ」。

やがて二人は亡くなってしまい、パリカはまた、惑星ベジータに送り返そうとした。

しかし、宇宙カプセルは、惑星ベジータという星を探し出すことができず、その場所にたどりつかなかった。

やがて再び地球に帰ってきたが、場所は、レッドリボン軍の基地。

宇宙カプセルに入っていた赤ん坊を連れ出され、ナノマシンを注入

される。

はじめての人工の生体兵器、イヴの完成。

半分ほどの内容しか聞いていないのに、あたしは全て、わかった。
何でだろう？

これが、記憶だろうか？

「あ・・・あなたが・・・あたしの・・・兄貴だって・・・？でも・・・でも・・・！」

「でも・・・なんだ？ふごおっ！」

あたしの髪の毛パンチが炸裂した。

「こんな・・・妹の仲間を、すぐに殺しちゃうようなやつ・・・いくら肉親だろうと・・・許すわけがないよ・・・！」

「・・・！？」

「さて、これでもういいな？ぜんぶ話してくれたなあ？それでいい。あんたのようは終わった。あとは、あんたの親に、妹のすごさを伝えるだけでいい。あとは、あたしの仲間に、きつちりと謝っておきな！ま、あたしの仲間は天国行き。お前はたぶん地獄行きだろうから、会えないかも知れないけどね！」

雷鳴豪刀らいめいこうとうを作り、電気を起こす。

だんだん、その電気が貯蔵され、力が上がっていく。

「さようなら。お・に・い・さ・ま!」

「べ、ベジー……」

雷鳴進撃波らいめいしんげきは!!!

「ぐあああああああああつ!」

ズギウウウウウウウウウウウウウウ……

新技炸裂 修行するイヴ

ナツパは地球の塵になってしまった。

あたしとしても、兄を本当は殺すなんて、したいことじゃなかった。

あたしだって、唯一の肉親を・・・。

こんな・・・こんな・・・。

あたしはふと、悟空のことを思った。

ラディッツを殺されたこと。

唯一の肉親。

血が繋がった人間が、あんな感じな人。

嫌だよ・・・悲しい。

「なんか・・・悟空さんがかわいそうになってきた・・・」

あたしと悟空は似た者同士なのか？

あたしが立っている場所の少し西側。

ベジータの気と、悟空の気。

なぜだか、悟飯の気と、クリリンの気。

あと・・・アルマジロ・・・じゃなくって、ヤジロベエ？の気。

「行ってみようー!!」

「ま・・・！待てー！クリリン。オラ・・・またこいつと戦いてえ！
殺さないでくれ！」

「き、貴様ら！覚えてるよ！次に奇跡はない！」

すでにベジータの宇宙船は空高くに上っていた……。

「ご、悟空さん……？」

「あ……ああ……わりいな……イヴ……サイヤ人……ベジータ……だったっけか？に、逃がしちまった」

「いいえ……。追い返しただけでも大したものですよ……」

「それよりイヴ。もう一人は！？」

「ああ。大丈夫ですよ。クリリンさん。きちんと倒しました」

「す、すごいな！イヴ！！」

「いえ……。あたしだってサイヤ人のエリートですし。まあ……大丈夫ですよ」

「そういえば……オラと悟飯のことは……いろいろと言ったな」

「ま……まあ、あの人は王族ですから」

「おい！みんなあ！」

へりでブルマや亀仙人がやって来た。

よかった・・・。

サイヤ人編完結！！

病院の中

「ナメック星に行くまで、あと何日かかります？」

「うーん。エンジンやメンテナンスやナメック語の入力やなんだか
んで、三ヶ月かな？」

「三ヶ月ですか・・・」

「そっぴゃイヴ・・・。怪我しなかったのか？」

そっぴゃえばと、みんなが問う。

「あたしは、体内にナノマシンが入ってるんですよ？ナノマシンは
元々、不治の病を完治させたり、病気を治したりするための医療器
具です。三日も寝ていれば、あの程度の怪我ぐらい治ります」

「それはすごいなあ！俺も体内にナノマシンを入れようかな？」

クリリンもバカな話で盛り上がる。

悟空をふと見る。

あの怪我は、とんでもないもので、医者は全治四ヶ月。それも、もしかしたら、治らないとも言われた。でも仙豆がある。

三ヶ月もすれば仙豆ができる。

「あたし……。悟空さんの代わりになるよう。ナメツク星で頑張ります！」

クリリンや悟飯もあたしに賛成してくれた。

「あと少し。あたしは修行します。早く治してくださいね？みなさん」

トランス
変身！

翼を生やし、空に飛び立った。
窓から……。

さて……。

修行をしましょう。

やってきたのは、ジャングル。

「はあああああああああつ！！」

気をいつきに高める。

そのまま光線砲ビームガンを作り、構える。

イメージをする。

ビーム状になって、発射される気。
それは超硬質で、跳ね返ってくる。

新技

「リフレクビームガン
反射光線砲！！」

ドウウンッ！！

一発放たれたそれは、ジャングルに生えまくっている木に当たる。
ビームガン
普通の光線砲なら、ここで木が砕け散る。
しかし、この技は違う。

カンッ

木から変わった音が発されると、ビームガン
光線砲が反射する。

これも、かの黒猫さんが使ってた技。
リフレク
反射ショットのアレンジ技。

跳ね返ったそれが、あたしに向かってくる。

あたしはそれを拳で打ち返す。

それが再び、反射し、今度は違う方向から、あたしに向かってくる。
何度拳で打ち返しても、あたしに向かってくるその技。

「よし！完成！」

これはもう、完成したも同然だ。
あとは強度だろう。

すでに丸みを帯びて、本当の弾丸になったその光線砲を狙いにさだめ、

「かゝめゝはゝめゝゝゝ波!!！」

次は亀仙流の修行だ。

かめはめ波を打って見た。

気を少し上げた状態で打ったそれは、悟空と同じくらいのパワーがある。

ドカアアアアアン！

二つは完全に爆発して互いを消しあつた。

「あら。あの程度でやられちゃうの？面白くない！」

次はかわす修行。

いくぞ！

リフレクビームガン
反射光線砲！

再び何回も跳ね返ってくる弾。

今。始めてやる技。

出来るか出来ないかもわからないような技。

出来たら成功。出来なかったら、あの技の餌食。

「いくぞ！残像拳！」

シュンッ

残像拳。

残像を作るほど高速で動いていくことで、相手を惑わせることが出来る。

あたしはそれを応用し、何度も何度もかわす。

そして、

ナノスライサー！

シャキン

みごと真っ二つにかち割った。

ナノレベルすごい。

雷鳴豪豪刀らいめいごうごうも同じくナノにしてみまおうか・・・。

こんな修行を三ヶ月地道に続けていました。

旅立つイヴ いざ！ナメツク星へ！！

ついに宇宙船が作られた。

それは神様が、ナメツク星からやってきたときのものだ。

ブルマが、ナメツク語を覚え、それを機械で入力し、日本語でも使えるようにしたもの。

「クリリン君もイヴちゃんもずいぶん軽装ね。私なんか、髪まで切ったって言うのに」

なぜだがブルマは少し不機嫌そうだ。

少し軽装過ぎたのか？

やがて、エアカーにのって、悟飯とチチ、牛魔王がやってきた。

「なんだよ、悟飯！その頭！」

「おとうさんにも笑われました・・・」

悟飯は顔を赤らめている。

それもそのはず。

前髪をぴっちりと揃えられ、短くカットされたその髪型は、誰がどうみても七五三だ。

おまけに、悟飯の服装。

子供用のスーツに蝶ネクタイ。

「ほんと。七五三みたい」

「イヴさん・・・そんな笑わないでください・・・」

「じゃ、そろそろいくわよ」

ブルマがそういうと、ナメック語で、「**違う世界**」を意味する単語。

「ピッコロ」

と唱えた。

中の扉。

というより、入るための入り口が開いた。
あたしたち四人は、その中に乗り込んだ。

「発車五秒前、目的地ナメック星」

コックピットにのったブルマはすうい、シートベルトを閉める。
あたしと悟飯、クリリンは座り損ねる。

「ちょ・・・ちょっと待って!」

5

4

3

2

1

0 発射！

それはとてつもなく早かった。

あたしたち、シートベルトをつけ損なった三人は、急激な圧力がかかり、床にへばりついてしまう。

しかし、ほんの三十秒もたたないうちに、体は軽くなる。

「もう大丈夫よ。あとはだいぶ静かですむから」

それだけいうと、別の部屋に入ろうとする。

「どうしたんすか？ブルマさん？もう寝るんすか？」

「ふん！着替えてくるだけよ！ちよって気合いを入れて宇宙服まで作った私がバカみたいだわ！」

ドアを思いっきり強く叩き閉めた。

「なあ悟飯。俺たち、何か悪いことしたか？」
「ううん……。どうでしょうね？」

宇宙に旅立ち、二日目。

ブルマを除く、あたしたち三人は、精神トレーニングの真っ最中だった。

頭の中を共有し合い、そこで戦いあう。

これなら動かなくてもすむし、別に体が傷つく必要もない。

まあ、あたしはナノマシンで体が復活するから、別に何でもないんだけど……。

クリリンが連続で技を繰り出す。

それをかわして、光線砲^{ビームガン}を打ち出す。

悟飯はそれを魔閃光で対抗する。

そして、悟飯とクリリンで、

「うおりゃあああああああゝっ！！！」

「はあっ！……はあ……はあ……ずるいゝっ！二人で来るんですか……ずるいですよお」

「だって。イヴ……お前めちゃめちゃすごいぜ。こりゃあ、

サイヤ人の一人二人、楽勝だよなあ」

「ま、まあ……。あれでも怪我はしましたよ。そういえば、忘れてました。サイヤ人はですね。戦いで、傷ついたあと、体力が回復して復活すると、パワーがどんどん上がるんですよ。悟空さんもそれに見覚えはないですか？クリリンさん？」

「ああ。そーいや、天下一武道会が終わったあとに会ったと、必ず強くなってたなあ」

「ってことは……。あのサイヤ人を倒して、大きな怪我まで負ったから、悟空さんも、僕も、パワーアップしてるんですか？」

「まあ。そういうことですな」

「やっぱり悟飯はすごいよなあ……。悟空の息子で、さらにピッコロに修行してもらったんだもんなあ……」

「そうですね。魔族最強のピッコロさんに修行してもらったから、魔族の技も多く覚えてるし、悟空さんの息子なんだから、かめはめ波くらい使えるんですよ？」

「そうですね」

「はああ……。暇ねえ。あと一ヶ月もあるわ……。長期安眠機をつくっておけばよかったわ。っていうか、あんたたちは暇じゃなくて良いわよね」

ブルマはあたしたちに喧嘩でも売っているのだろうか？

「あたしたちだってすることがないから、これをずっとやってるんですよ？別に他にすることがあるんだったらやりますよ。毎日毎日修行ばかりでしたら、さすがに飽きますからね」

「そりやそうだな」

みんながあたしの意見に納得するなか、ブルマは少し、いや、かなりの不満を残した。

そんなに自分の意見が否定されることが嫌なのか・・・？

プライドの高い、金持ちクイーンじゃ、そうなるのも当たり前なのだろうか。

「ねえねえ。そろそろ部屋。片付けてくれないかしか？レディがいるのよ？」

確かに、ブルマが立っているその場所は、お菓子の袋や、雑誌や漫画で溢れ返っていた。

「片付けろって言ったって、そこを散らかしたのはブルマさんでしょう？俺たちは自分の場所片付けましたよ」

「うるさいわねえ。レディをもっといたわる気持ちがほしいわ」

「だったらあたしもいたわって下さいよあ」

あたしも漏らした。

あたしだって、レディだ。

「あなたはまだまだ子供でしょうが」

「ガビイインッ!」

思わず声も出ちゃった。

「はははははは」

クリリンも悟飯も笑っている。

「全く!」

あたしは怒り、頬を膨らまし、そっぱを向いた。

「女の子って色々面倒だな・・・」

「聞こえちゃいますよ・・・?イヴさんに」

「聞こえてますよ!」

トランス
変身

ハンマー

ごいん!!--!

クリリンの頭にめり込んだのは言うまでもない。

旅立つイヴ いざ！ナメツク星へ！！（後書き）

ブルマってわがまま（笑）

ついに到着！ ナメツク星に悪の気配

なんやかんやで一ヶ月たった。

「見えてきたわよ。あれがナメツク星ね！」

「うわーっ！きれいだーっ！」

ナメツク星は、全面が鮮やかな緑色をしている星だ。

「さーっ！みんな座って、大気圏に入るわよ」

ブルマの機嫌もなんとか直り、あたしたちにもちゃんと警告を与えてくれた。

前みたいになるのは、もうごめんだからね。
あたしたちの宇宙船は、ついに大気圏を突入した。

激しい重力のパワーに押しやられはしたが、なんとか、地面に到着することができた。

「いてて・・・」

「待つて。酸素があるか調べるから。ちゃんと程よい酸素がある
といいんだけど・・・」

そんなブルマの話は誰も聞いていない。
すでにあたしたちは外に飛び出していた。

「悟飯さん・・・ここ・・・」

「うん。僕が修行したところとよく似てる・・・」

その場所は、悟飯がピッコロと修行した場所によく似ていた。地球ではあまり見かけないような、大きく連なった岩や、変わった形の木がたくさん生えている。

ピッコロは、本能的に、自分の故郷に近い場所が、気に入っていたのだろう。

「ちょっとあんたたち！なんでホイホイと出てきちゃうのよ！」

ブルマはまたキレている。

「おっかね〜な〜」

クリリンも、ブルマの怒りには逆らえないらしい。

しかし、そんな笑いはすぐに消えた。

ナメツク星特有の、緑の空に、ある一つの宇宙船が飛んでくる。

しかも、それは、みたことのある形。

もちろん、それはあたしだけでなく、クリリンも悟飯も、ブルマも感じていた。

「も、もしかして・・・あ、ああ、あれって・・・、サ、サイヤ人の服装じゃない・・・？」

「も、もしかなくてもですよ！」

その宇宙船の気確かめる。

「間違いないですね。あの気は、ベジータさんのものです！」

「どうするんだよ！くそっ！」

クリリンはすでに絶望をみた様子だった。

「そ、そういえば、あっちから、何か感じますよ。クリリンさん？
イヴさん？」

「ほ、本当ですね……。それも、ちょっと邪悪な感じがします」

「も、もしかして、べ、ベジータの仲間かも知れないってこと！？」

「わかりません。でも、あれは少しやばい感じの気です。誰かが調べに行った方が……。あ、あと、もしも、ベジータの仲間だった場合、スカウターを持っている危険性が高いので、出来たら、気を消せる人が行った方がいいと思います」

「そうか。だったら、俺と悟飯で行くよ。イヴはもしものために、ブルマさんと一緒にあの洞窟に隠れてるよ」

クリリンが指差したのは、確かに、穴の開いた洞窟。
奥が広ければ、簡易式の家を作っておけばいい。

「わかりました。ブルマさん。隠れましょう」

悟飯たちが出発すると、あたしは、ブルマと共に、洞窟に入っていた。
った。

中は思ったよりも深く、カプセルの家が十分入る大きさだ。

「じゃ、私はしばらく隠れてるわ。イヴちゃん。誰も来ないよう見張ってて！」

結局あたしは番人をさせられることになった。

さあ、その間どうしよう……。？

しかし、そんな暇な時間も、すぐに消えた。

「誰かここにいるようだぜ？ただの観光客か？」

「まあ、フリーザさまは全員を殺せとの命令だ。さっさとやっちまおうぜ！」

あたしは急いで外に出た。

「何だ？女が一人か。つまんねえの」

「とりあえず、逃げられるとまずい。あの宇宙船を破壊してしまおう」

ズギユウウウン

「あっ！あたしの宇宙船が！！」

「へっへっへ……。逃げられたらかなわねえからな。さて、お嬢ちゃん。残念だったなあ？おとなしく泣き声を見せてくれよお！」

惑星フリーザの科学で作られた、弱い部族でもかなりのパワーの攻撃ができる装備。

しかし、戦闘力的には、1000程度しかないだろう。

サイヤ人の下級戦士である、ラディッツもつけてなかったのだから。

（この程度のザコなら、一瞬でやれる）

「くたばれ！」

ドキュウウウウン

「ハッ！」

あたしは、自らの気を、右手に纏い、それをそのままカウンターで打ち返した。

「なぬっ!？」

「や、やばいつ!！」

ドガアアアン

彼ら二人組は、どこかに吹き飛ばされた。

その後、クリリンたちが、何か、強いパワーを持った人間に、追い回されているのがわかった。

彼らは恐らくドドリアだろう。

フリーザの戦闘力を見て、二人とも、金縛りにでもあったに違いない。

あたしも、こんなところにいるのに、フリーザの気を見る度に、少し背筋が寒くなる感覚に襲われる。

恐るべき事態 ナメツク星人とイヴ

緊急事態発生！！

最悪の事態が起きていました。

実を言うと、あたしが思っていたより、この物語が動いていたことに問題がありました・・・。

「わたくしは、あなたたちに、どのようにしたら龍が出てきて、願いを叶えてくれるのかを聞きたいだけですから。素直に教えていただけませんか？」

「お前らみたいに、ナメツクの平和を、すぐに乱すようなやつに、教えることはなにもない！」

ドドリアから助け出した、デンテの案内により、まずはじめに、ドラゴンボールを作った、最長老に会いに行くことにした。

しかし、そこにはすでに、フリーザや、ネイルの姿があったのだ。

「やれやれ。ナメツク星人も色々と頑固で困りますよ」

「・・・・・・・・」

「とりあえず、ここではなんですから、別の場所へ行きましょう」

フリーザたちは、二人とも飛び立っていつてしまった。

これから、ネイルとの戦いになる。

デンテとしても、なんとかネイルに勝ってもらいたいだろう。

あたしたちは、フリーザに見つからないよう身を隠して、こそこそと、話の内容を聞いていた。

「こつちです」

二人がいなくなったので、あたしたちは、最長老が住む部屋にやってきたのだ。

「最長老様〜！」

「おお・・・デンテ・・・生きておったか」

「はい。あそこにいる、地球人さんたちに助けてもらいました。あの方たちも、ドラゴンボールで願いを叶えたいらしいのです」

「ほう・・・。して、願い事とは・・・？」

「あたしたち、地球にある、ドラゴンボールを蘇らせ、サイヤ人との戦いで、殺された、あたしたちの仲間を、生き返らせたいのです」

「地球にある、ドラゴンボールとな・・・？どういうことだ？くわしく聞きたい。頭を貸していただけるか？」

「ん？え、ええ。いいですけど・・・」

クリリンの頭に、最長老は手をおいた。

最長老の能力である、過去を覗く能力だ。

「なるほど・・・。地球にいたナメック星人が、善と悪に別れたとは・・・。それで、善の方の、地球で神となったナメック星人が、ドラゴンボールを作った。なるほど、彼は、ナメック星人でもエリート、龍族らしいな」

ナメツク星人の詳しい話。

大昔に、地球に流れ着いた、孤独なナメツク星人のお話だ。

「あたしは・・・ピッコロさんは単なる悪ではないと、あたしは感じています。生き返らせるのは、今の地球には、なくてはならない人物だからです」

「イヴ・・・」

「イヴさん・・・」

「ああ・・・。それは私にもよくわかった。デンテよ、協力してやり」

「はいっ！」

デンテは力強く答えてくれた。

仙豆がない、このナメツク星で戦っていくにおいて、デンテの力は、とても重要なポジションに位置する。

「そうそう。そこの三人さんを未開の力を、解放させてあげましょう」

力を解放する。

簡単に言えば、パワーアップだ。

しかし、最長老のご年齢も近い。

これはもしかしたら、寿命を縮める行為かも知れない。

「あ・・・っ、ああ・・・。ああ・・・っ」

体の中から、沸き溢れる感覚に襲われる。

「はぁ・・・っ・・・はぁ・・・」

彼も限界に近いのかも知れない。

どうにか、早く探さないと、間に合わなくなってしまうかも知れない。

急ごう！

「では、あっちにある、六つの反応。全部いただきましょう！」

「おうっ！」

あたしたちは舞空術で全力を飛ばし、その場所まで向かった。

ついに争奪戦！？ ドラゴンボールは誰の手に？

あたしは現在のフリーザの宇宙船にいる。

ベジータが攻め込んだのか、ぽっかりと穴があき、誰一人としていないようだ。

「ここに反応があるみたいですよ」

そこは地面。

恐らく、フリーザが埋めて隠したに違いない。

「よしっ。掘るぞ！」

トランス
変身

シャベル

シャベルを作り、一気に掘っていった。

そこには確かに、地球のドラゴンボールと同じ光であったが、

「お、おっきい」

二人は、フリーザの偵察時に見ているが、あたしは初めて見た。

いや、漫画で見たことはあるんだけど・・・。

まさか本当にこんな大きさがあるなんて、

「ドッチボールみたい」

そこには、ボールが六つある。

恐らく、フリーザは、あとひとつのボールを、ザーボンに探させる

うちに、自分は最長老に向かって行っただろう。
はつきりいつて、今がチャンス。

「とりあえず、一人一個持つて行きましょう。一個でもなかったら、
願いは叶えられないんですから・・・」

そういい、あたしは、地球で言う、一イシンチュウ星球を手にした。
悟飯は四スーシンチュウ星球。

クリリンは七リユウシンチュウ星球。

あとはひたすら逃げれば良いんだ。

「行きましょう。面倒に巻き込まれるのは嫌ですからね!」

再び、舞空術であたしたちは飛ばして進む。

だが、あたしは、面倒に巻き込まれた。

「べ、ベジータ!？」

「おい貴様ら!よくボールを探してきてくれたな!さっさとこの俺
に渡せ!そうすれば、命だけは助けてやる!」

「はい?何言っちゃって・・・」

「イヴ・・・。渡そうぜ。こいつには敵いつこない。それにさ、フ
リーザのそこには、六つしかなかった。あとひとつは、まだどこか
に置かれているはずだ。それに、俺らが持っているのも、三つだけ
だ」

クリリンが言っていることに、あたしは理解できていない。

「いや、それは無理です。ベジータさんの言うこと、信じるんです

か？あの人は、渡したらすぐに、用なしと言って、すぐに消してしまいます」

「そ、そっぴや、そんな気も・・・」

「どうした？渡すのか？渡さんのか？」

んなもの、答えは決まっている。

「誰に渡すもんか！あたしたちは、あんたに殺された仲間を、生き返らせるんだ！」

「ほう。貴様も、サイヤ人の王子であるこの俺に逆らうか。俺は、前に戦ったときは全然違っぞ？俺も戦闘力のコントロールを覚えただんだ！」

「な、なに！？」

「はああああああ」

ベジータの体から、青白い気が放出される。

確かに、前にはできない、気のコントロールが出来はじめている。

「はあっ！！」

ベジータの気は、気弾となり、あたしたちに向かう。

トランス
変身
シールド
盾

「くうつ・・・！」

しかし、あたしの力が徐々に負けていく。

ビームガン
光線砲！！！！

ドガアアアアッ！

なんとか光線砲^{ビームガン}で力を建て直した。

「確かに。前より強くなってる。やっぱりサイヤ人の王子。ってか、ベジータ王は亡くなってるから、すでに王なんだろうけど・・・」

「ふん。まだまだ甘いな。パリカ。俺の力はまだこんなものじゃないっ！はあああああああっ！！！！」

「負けるかあっ！あああああああっ！」

あたしも気を高める。

しかし、ベジータの気は、あたしより遥かに大きい。

「ち、ちくしょっ！！！」

「くらえっ！ギャリック砲っ！！！」

ベジータの現必殺技。
やばいつ。やばいつ。

バコオオオオオオオオオオオオオオオ

トランス
変身
ビッグシールド
巨大盾

腕を巨大な盾に変えて、あたしを含め、仲間たちを守る。

「くそつ。しぶといやつめ」

「はあ……。はあ……。あなたには、負けないっ！」

しかし、あたしとベジータの争いは、ここで止めざるを得なくなる。

「な、なに？こ、この気は……。？」

「お、大きなパワーが五つ。ま、まさか……。ギニュー特選隊か？」

「えっ！？ほ、本当だ……。五つの気が近づいてくる」

「それも、一人一人がとても強いですよ……」

まさか、ギニュー特選隊とは、ついに来たのか。

「おい。お前は、戦うのは一旦中止だ。面倒なのが来やがったぜ」

「……ベジータまでが恐れる、謎の敵。ギニュー特選隊とは、いったい何者なのだろうか？……」

か、界王さま……。勝手に締め括らないで……。

ついに参上！！ ギニュー特選隊 対 イヴたち

「ギニュー特選隊は、フリーザが宇宙の戦士の中から選んだ、最強の五人組だ。はつきりいって、俺たちでも、勝てるかどうか、不安だ！」

「べ、ベジータでも不安なのか？あ、あいつらは・・・！」

「また面倒なのが来た！！」

彼らの宇宙船が、ゆっくり、ゆっくりと降り立った。

「よおお、お前ら。俺たちは、フリーザ様のお選びになった、最強の戦士たち」

「ギニュー特選隊の赤いマグマ、ジース！」

「ギニュー特選隊の青い稲妻、バータ！」

「同じく、リクーム」

「グルト！」

「隊長、ギニュー！俺たち、」

「「「「「ギニュー特選隊！！」」」」」

シャキーンッ！

あたしたちは、彼らの決めるポーズを見て、思わず、笑ってしまった。

「ぷっ……」

「こんなやつが本当に強いのか？」

クリリンも軽く笑っている。

「まず、とりあえず聞いておいてやろう。ドラゴンボールを渡す気はないか？」

真ん中の紫色の宇宙人、ギニューが言った。

ドラゴンボールを渡せば、命は助けてもらえるのだろう。しかし、あたしはそんなばかなことには屈しない。

「ふん。あたしたちがそんなこと、するわけないでしょう？そんな下等種族の言うことなんかまともに聞いてたら、サイヤ人の名が腐るってもんよ！」

こんなことで、サイヤ人がへこたれるわけではないですね？
悟飯さん？ベジータさん？

「……」

つておい！

サイヤ人は無敵の戦闘民族じゃないのか？！？

「ははは。俺たちのすごさがまだわかっていないようだなあ？」

始めに対戦準備を整えたのは、一番背が低い、グルト。

「こ、こいつくらいなら、俺でも倒せるはずだ」

クリリンは、なんとかそう言つて、グルトと戦うことにした。

確かに、「気」の概念に基づいたら、彼は弱いのかも知れない。

でも、彼の能力は、「気」や「戦闘力」では加算されないところにある。

彼は、息を止めている間、自分以外の時間を止めたり、金縛りを起こしたりなどの、超能力がある。

「てやあああ!!」

悟飯が蹴りを食らわそうとする。

しかし、さっきまでそこにいたはずのグルトは、すでに遠くにいる。

「あれ？」

悟飯は頭にはてなマークだけ残した。

「今度はこつちだ!」

クリリンも拳を食らわそうと、パンチを出す。

しかし、彼はそれを、瞬間的に姿を消して逃れた。

それに、ものスゴく早い。

すでに結構距離はある。

悟飯もクリリンも、舞空術で追いかける。

しかし、気がつくと、グルトはまた遙か遠くに移動している。

「さっきからちょこまかちょこまかと〜!」

トランス
変身
ソード
剣

「くられっ!!」

イヴィヴ斬!!

技名適当(････)

だが、気がつくと、グルトの気配は、遙か遠くに飛んでいる。

「どうした？グルト？えらくてこづってるじゃないか？」

「早く倒さんともう一緒に遊ばないぞ」

「おやつも、もう一緒に食べてあげない」

しかし、グルトは、仲間のなかでは一番、レベルが下らしく、他のメンバーにからかわれている。

「こ、こうなったら、ぼくの超能力で!!」

スカッ!!

今、どうなったのか。

グルトは、顔だけ切り取られてしまっている。

「こいつは、この特選隊のなかでも落ちこぼれた。だが、つぎのやつはこうはいかん」

明らかに、ベジータも逃げ腰体勢。

あたしも、はつきりいつて怖いくらいの気だ。
特に、あのリクームと、ギニュー。

「全く……。グルトはやっぱり弱いなあ……。ギニュー特選隊の恥さらしだぜ」

次に勝負をもちかけて来たのは、リクーム。

パワー自慢のやつで、力だけなら、チームのなかでも、ナンバー2くらいだ。

さすがにギニューには遠く及ばない……。

「さあて、ベジータちゃん。ちょっとは楽しませてくれよ?」

やはり、このメンバーでは、一番、強いであろう、ベジータに向かっていく。

「仕方がない。やるしかないか」

あまりやりたくないベジータだが、さすがに覚悟を決めたらしい。
いよいよ、ギニュー特選隊の恐怖の幕開けだ。

ついに参上!! ギニュー特選隊 対 イヴたち（後書き）

ギニュー特選隊ファイティングポーズに意見があるかたは、どうぞ、
ご感想を！

リクームのパワーを見よ！ 可愛がつてやるよベジータちゃん

さーて、いよいよリクームとの戦闘に突入しましたさ。

「可愛がつてやれ！リクーム。でも、可愛がるは可愛がるでも、動物のように可愛がるのでは・・・」

「説明せんでいいっ！」

あ、ジースがギニューに怒られてる。

アニメで見てたら、笑ってたのに、現実を間の辺りにすると、こうも怖いものなのか。

「はあああああっ！」

ベジータが片手を突きだし、気を溜めている。

これは、ギャリック砲だ！

「くらえっ！！！」

ズガアアアアアン

確かにこの技は、とてつもないパワーを誇る。

あたしが想像した以上の力が働いていて、ずって大きな力になっている。

でも、これがリクームのダメージに繋がっているのだろうか。

砂煙がごうごうとたち、リクームの姿が見えない。

しかし、気を感じればわかる。

「ま、全く。全くダメージを受けていない！」
「そ、そんなバカな」

全く気が減っていない。

ベジータの技が、全く弱いわけではない。
なぜなら、ギャリック砲のせいで、リクームの服は、ビリビリに破れているんだ。

「はい。ベジータちゃん」

セクシーな決めポーズを取り、ベジータに余裕な表情を浮かべた。
はっきり言って、ベジータには勝ち目はない。

「く・・・くそおっ!!」

気のような、自分のパワーを凝縮して放つようなものは、はっきり
言って、強さや弱さがモロにでる技だ。

これがもし、強い弱いの関係性はなく、ただ、当たった瞬間にその
人を確実に倒せるもの。

それなら、あたしでも、倒すことができるはずだ。

トランス
変身

らいめい「うんうん」
雷鳴豪豪刀！

そうだ。

剣のような武器ならば、弱い、強いは、全く関係しない。
ただ、当たったら、ゲームオーバー！。

いくぞ必殺!!

らいめいしんげきは
雷鳴進撃波！！

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「へっへっへ・・・！！むんっ！！」

しかし、リクームはびくともしない。

それどころか、自ら、拳を使って、跳ね返そうとしているではないか。

自分の拳に、全ての気を集中させ、剣の波動をうちかえそうと目論んでいるようだ。

「こ、このままだと、押し返される！」

トランス
変身
ビームガン
光線砲

「これもおまけよっ！」

リフレクビームガン
反射光線砲！

ズドオン！

ビームガン
光線砲のパワーもつけ、いっきに二つもの技を混合させた。

「かゝめゝはゝめゝ波ゝ!!!」

悟飯やクリリンも、それに加えて、かめはめ波を付け加える。これぞ、みんなで一つの力だ。

だが、

ズギヤアオオオオオオオオオオオオオオオ...

「へっへっへ...」

リクームは笑っていた。

「...!？」

「あ...ああ...」

「う...うそ...!？」

そこには、三人の技を打ち返したリクームの姿があった。しかし、さっきの技。

周囲をいっきに、爆発させるような様子のその技。

今まで、ドラゴンボールに出てきただろうか？

もしかすると、今の技は...。

「へへ。感謝しろよ。貴様らごときに、俺の最強の技、リクームスペシャルアタックを使ってやったんだからよ」

リクームスペシャルアタック。

たしか、原作では、悟空に対して使おうとして、その瞬間にやられた技だった。

確かに、原作でも見られなかったスペシャル技を、今、あたしが見

れたのは奇跡だろう。

でも、あたしは、こんなことには、なってほしくなかった。
本当に、このままだと、まずい。

あたしたちは、きつとやられてしまう。

今だに悟空の気が感じられないと言っことは、まだ、ナメック星についていないのだろう。

「さて、てめえら、もう準備はいいだろ？ぶっ殺してやるからよ！」

リクームは高らかに笑う。

リクームアッパー！

ズキャア

リクームエルボー！

ドガアッ

リクームキック！

グギッ

あたしたちは、一瞬にして、リクームの一撃を食らった。

「ん・・・ぐう・・・み、みんなあ・・・だ、大丈夫・・・？・・・
・、ああー！」

悟飯が緊急事態に陥った。

瀕死状態だ。

やばい！悟空さん！

そのときだった。

救世主があらわれたのは。

「大丈夫か？悟飯！」

眠ってる間に・・・ フリーザとの戦い

現れたのは、孫悟空。

悟空の気は、小さめにコントロールされていたため、あたしたちにも気がつかなかった。

さて、悟空が現れたと言うことは、もしかしたら・・・。

「なんだ？新しい加勢か？よし、戦闘力を計ってやる・・・たったの2000だと？笑わせやがって、そんなザコが今さら加勢したって意味はねえぜ。一瞬で倒してやる！」

「おい。おめえらか？オラの仲間を倒しやがったのは？」

「へへへ。ちゃんとドラゴンボールを渡してくれねえからよ。ちよつとばかり苛めてやったからな・・・。だがよ、お前も例外じゃねえぜ、たったの2000でこの俺に挑もうとする気が知れねえぜ！」

悟空はちらつとあたしを見る。

あたしたちに、早く逃げろという、目配せだろう。

「み、みなさん。早く、早く逃げましょう！この場は悟空さんにまかせて！」

「逃げるって、どこへ？」

クリリンもそう言った。

確かに無理がある。

逃げる場所など、もうどこにもないんだから。

だが、フリーザの宇宙船には、誰の気配もない。

「よしっ！フリーザの宇宙船に行きましょう！それしかない。何かしらの回復する方法だってあるはずよ！」

「わ、わかった・・・！」

クリリン、悟飯、ベジータも、どうしようもないことを悟ったらしく、逃げる決意をした。

「悟空さん！頼みますっ！」

「おう。まかせておけ！」

悟空の背中とは、とても頼もしく、すべてを託すに相応しい、とても頑丈で、逞しかった。

フリーザの宇宙船・・・。

あたし以外は、みんな大した怪我ではないようだった。

クリリンも、ベジータも、あまり、強い攻撃では当たらなかったようだ。

「はぁ・・・あ、あたし・・・少し、寝ます・・・。あとは・・・よ、よろしく・・・。」

。ナノマシンによる自己再生のために、あたしは、睡眠に落ちた・・・。

ありり？

あたしはしばらくして、みんなが中にいないことに気がついた。どうやら、ストーリー的にも、原作通りにことが運んだらしい。辺りを見ると、悟空が回復用のカプセルに入っている。

もしや、

「フ、フリーザの気が……。悟飯さん達と一緒にの場所に！」

あたしが寝てる間に、大事なことが起こるのは、どうしてなんだろう？

「いかなくちや！」

トランス
変身
ウィング
翼

あたしは翼を羽ばたかせ、彼らの気のある、その方向に飛んだ。

「あなたたちが初めてですよ。私をここまでバカにしたのは！」

悟飯も、クリリンも、腰を抜かしている。

そのなかで、ベジータだけが、まだ、余裕のなかにあった。

「フリーザ。俺たちは、ギニュー特選隊と戦い、以前より、パワーアップしている。早いこと、強い姿を見せた方が得だぜ？」

ベジータも何を思ったのか、挑発しまくっている。そんなに挑発すると・・・。

フリーザは、気弾をぶちまける。

ベジータはそれらをかかわして、

「うおりやああああ」

ベジータは渾身のギャリック砲を放った。

「ほう……。なかなかのものですね……」

しかし、フリーザは余裕ぶった表情をしている。

「た、戦ってる……！」

「危ない……。っ！」

「私の力を思い知りなさいっ！」

フリーザから、真つ赤な閃光が飛んだ。

ベジータは弾き飛ばされる。

「そうよね……。これはあたしも加わった方が良いのかも……」
あたしは、地面に降り立った。

「ほお……。また新しい助っ人ですか……。あなたも命知らずですね」

「……。っさい！」

実は言うところ、あたしは、フリーザの戦闘力と言うか、気を見たときに思った。

（あ、あたしのパワーを上回ってる。明らかに強すぎるよ……）
強すぎる。あたしにも、このみんなにも、敵いつこない敵だ……。

「邪魔をするな。パリカ！フリーザのパワーはこんな程度じゃない。本気の力で、この俺にかかってこい！フリーザ！」

「はあ。全く。サイヤ人はどうしてこうも無謀な戦いに挑もうとするのでしょうか……。理解に苦しみますよ」

フリーザはもう余裕で満ち溢れている。
サイヤ人がこの場に三人もいるはずなのに、怖くて怖くて、仕方がない。

「これでもくらえっ！」

また、大きな気を使って、ベジータは攻撃を連ねる。
あたしも、何か食らわせないと。

「^{ビームガン}光線砲っ！！」

ドガアアッ！！

近頃は、溜め無しで打てるようになった。
それは、ベジータの気と合わせり、フリーザに向かう。
フリーザのいる場所で、爆発してしまった。

「ほう。確かに強いですねえ……。戦闘力が50万程ありましたね……。この私と、戦闘力が一緒でした。あなた方も相当力をつけたようですね……。仕方ないですねえ。始めにベジータさんが言ったように、私でも力の加減が難しい、第一回目の変身をさせていただきましょうか……」

フリーザは、力を溜め、変身しようとしている。
足や腕が大きく、太くなる。

頭の角が牛のように曲がりくねって、大きな力をつける。
気も、さっきの状態から、二倍以上に跳ね上がっている。

「あわわわわ……」

「あ……。っあ……。ああ……。っ……」

「な、なぬうっ！？」

全員が驚きを隠せない。

パワーアップしすぎなのだ。

彼は・・・。

――はたして、イヴたちに勝利はあるのか！？――

眠ってる間に・・・ フリーザとの戦い（後書き）

毎度毎度、イヴが寝るのは、その間のストーリーを進めたいって言う、作者の面倒くさがりが原因です。

イヴがあまり、仙豆を用いないのも、そのせいです。

だって・・・。仙豆ってすぐに回復しちゃうじゃん。あまり使いたくはないです。

せっかく回復能力があるんですし。

第二形態フリーザ ついにピッコロ見参す！

「どうした・・・ベジータ？俺のパワーの変わりように驚いているのか？」

「・・・ぐ！」

ベジータは戦意を喪失した。

あまりの力の差が、明るみに出たからだ。

フリーザはこの形態でも、まだ、本当の姿ではない。
やばすぎる状況だ。

「くっそおおっ！！！」

「ク、クリリンさん！？」

クリリンは何を思ったのか、フリーザに向かっていった。

「む、無茶ですっ！クリリンさん！」

「んなこたあわかってらあ！」

クリリンは拳に渾身の一撃のための気を、たくさん纏った。

力は少し、あがったものの、まだまだ、フリーザに届くほどのものじゃない。

「ふんっ！」

グサッ

ポイツ

クリリンの腹に、フリーザの角が刺さる。
そして、それを、海のなかに投げ捨てる始末なのだ。

「ご、悟飯さん。クリリンさんを助けにいつて下さい！」

悟飯は言つや否や、海に飛び込み、クリリンの微かな気を頼りに探した。

「仕方ない。次はあたしのようね・・・」

トランス
変身
ランス
銃

腕を、円錐型の銃に変身させる。
あたしの気を、銃に込め、突く。

ヒュッ

しかし、それは空を切り、フリーザ自体にあたることはない。

「そんなものがあたるかつ！」

フリーザは蹴りを一発、あたしに向かって振るった。

「うわぁっ！」

あたしは、空高くに舞っていく。
フリーザも飛び、あたしの上になると、

「うおりゃっ！」

「じふうっ・・・！」

あたしの体に、パンチを叩き出した。
今度は、下にあたしは落とされた。

地面に叩かれたあたしは、背中が痛んで立ち上がれないところを、
「さて・・・。まずは一匹。かな・・・。」

フリーザの足が、あたしを踏み潰そうと、上げられたときだった。

「気円斬っ！！！」

ザシュッ！！

フリーザの尻尾が、空を舞った。

さっきまで、死にかけだった、クリリンは、傷一つない様子で、気
円斬を食らわした。

「さっきからちょこまかちょこまかと・・・。」

クリリンは、逃げるしかないと思ったようだ。

「太陽拳！！！」

クリリンの頭から、強烈な光が発せられた。

いや、はげてるからじゃないよ！？

思わぬ事態に、あたしたちは、目を瞑ることができず、眩んだ。

「ぎゃああああ！！！」

フリーザの目も、あたし同様に眩んだらしく、小さな悲鳴をあげた。

「今だっ！みんな逃げる！！」

みんなへの合図。

なのだが、全員、目がチカチカして、逃げるできない。

「なにやってんだ。お前ら」

聞き覚えのある声。

でも、気が少し違う。

「ピ、ピッコロさん……ですか!？」

「ああ……」

ようやく、太陽拳のチカチカがとれはじめる。

じっと、フリーザを見るピッコロ……。

「てめえがフリーザか。化け物だな。まさしく」

「まだまだナメック星人が残ってたんだ……。わざわざ俺に殺されに来るとは……」

しかし、ピッコロの気は、まだ全力を出していないのに、かなり強い。

きつと、ネイルと一体化を果たしたからだ。

「俺が殺されにきたのか、お前が殺されるのか。それが今、すぐにわかるさ」

ピッコロは戦う気だ。

戦いは、確かに、両者互角だった・・・。

いや、わずかにピッコロが勢力を上回っていた。

「この俺は、このような変身を、あと二つ持っている。これの意味がわかるか？」

それと、こうも言っていた。

「さあ。変身してやる！これなら、貴様を宇宙の塵にするのもわけではない。そして、この変身は、宇宙初公開だ！」

ついに来る第三形態。

手が劣っていく。

足も短くなり、顔が伸びていった。

「さて、私に殺されたいのは、あなたでいいですね？」

第二形態フリーザ ついにピッコロ見参す！（後書き）

あまり、ピッコロとの戦いは描けませんでした。大変だったのです。

最終形態！フリーザの真のパワー

第三形態のフリーザは、ピッコロでも歯が立たなかった。連続して打たれる気弾は、とてつもない早さで、光が何度も見えるだけだ。

「や、やばいですよ……。こ、これは……」

「ああ。でも、まだあれは最後の变身じゃない。もっとすごい変身が、もう一つあるんだ」

「ぐあ……。っ」

ピッコロのパワーでも及ばない。

ピッコロの体は、ボロボロに痛み付けられた。

「やめろおっ！」

悟飯は、仲間を傷つけられるのが見ていられない。

父親と全く一緒のタイプだ。

「魔閃光！」

悟飯の魔閃光が、恩師を傷つける、宇宙の帝王に向かっていく。しかし、

「はっ！！」

消されてしまう。
さらに、

「はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！」

気弾を打ちだされる。

「あぁっ！ぐう！がはっ！」

足、腹、肩、胸。

全身に気弾の痛みが回る。

「はぁっ！」

今までのなかでも、強めの気が打ち出されると、悟飯は力尽き、倒れる。

ベジータはそれまでをじっと見ていた。

すると、デンテが、なんと、回復をしているのを見つけた。

たしかに、ナメック星人のなかには、魔法使いのようなことをする人もいる。

これさえあれば、サイヤ人の特性と合わせて、超サイヤ人に覚醒も可能かも知れない。

「おい！クリリン。今すぐ俺を半殺しにしろ！」

誰もが、耳を疑う発言だ。

「ま、まさか。サイヤ人の能力で、命からがらのあとの回復で、力をあげるんですか？」

「ああ。それしか方法がない！」

「そ、それもそう・・・ね・・・。あたしも、やろつかな・・・」

できれば、一番やりたくなかった。

自分を傷つけ、力をつけるなど、反則に近い。

でも、それが、我が民族のスキルでもある。

トランス
変身
ソード
剣

あたしは、脇腹を、剣で貫いた。

「ぐ・・・ぐう・・・」

地面に倒れざるを得ない。

「デ、デンテくん・・・。ごめん。回復・・・させてもらえる・・・？」

あたしが自分の力以外の体力回復だ。

あまり、他のものには、頼りたくなかったが、今のあたしのナノマ
シンじゃ、瞬時の回復は出来ない。

デンテにはそれができる。

今は頼るしかない。

「す、すごい。力があふれでるみたい・・・」

「そんなに変わるものか？」

「はい。びっくりします。自分でも！」

「おお！俺こそが。超サイヤ人だ！」

ベジータは、フリーザに気弾を打った。

たしかに、ベジータのパワーは、めちやくちや上がったようだ。

「ほうほう。たしかにすごいですね。でも、超サイヤ人なんてただの伝説です」

「ほざくなあ！これでくたばれ！」

「今のパワーで本気を出せば、恐らく、あなた方を宇宙の塵にすることくらいいけないでしょう。でも、あなたのような、思い上がりの人には、お仕置が必要ですね。地獄より恐ろしいものを見せてあげます！」

「いよいよ、最終形態のお出ました。」

第三形態である、彼の体に、ヒビが加えられていき、光につつまれて変身した。

しばらくは、砂煙で見えず、あたしたちは、わからなかった。しかし、その瞬間。

「バン」

フリーザから発せられた言葉。

指を人差し指だけ突きだし、鉄砲のように言う。
すると、いつのまにか。

ドオオオオウウウン

いつのまにか、デ^グンテが丸焦げになっている。

「これでもう、回復はできないよね」

「――いよいよ出た最強の形態。彼のパワーはいかに!?!?――」

悟空復活　フリーザを倒せ！

あたしは戸惑いを隠せない。

目の前には、真っ黒になって、倒れているデンテ。

そして、尻尾で首を閉められ、玩具のように弄ばれているベジータ。最終形態のフリーザはあまりにも強かった。

あたしたちの力では、どうしようもないことを悟っている。

ついさっきも、悟飯が溜まりかねてフリーザに向かおうとするも、ピッコロに止められたのだ。

あたしたちに何とかできるものじゃない。

「ぐはぁ………っ………」

「つまらん。ちょっと早いけど、とどめをさしちゃうかな?」

フリーザはベジータをつかんでいる、自分の尻尾を振り、岩に激突させる。

そして、ついに、現れる。

孫悟空が。

「大丈夫か!? みんな!」

悟空は全員を見渡す。

「よし。みんな無事だな。よかった」

「いや。一人。悟飯さんの友達が………」

「ああ。そうだった………」

悟空は、フリーザを見ている。

「お前。ほんとに悟空か？お前とは少し気が違う気が・・・」

「悟空さんは、きつと、怒ってるんですよ・・・それにしても、強い氣！」

今までには信じられないくらいの怒り。

ベジータと戦うときも、こんな怒りを見せたっけ・・・。

「おめえがフリーザか・・・。ずいぶんとガキっぽいな」

「まだゴミが残っていたのか・・・」

悟空を罵るフリーザ。

しかし、それに言い返したのは、ベジータ。

「カ、カカロット・・・」

「ベジータ・・・！」

「カカロット！？その名はもしや、サイヤ人か！？」

フリーザは思い出す。

惑星ベジータを滅ぼしたときに、最後まで戦いを挑んできたサイヤ人が、倒されようとしたとき、確かに言っていた。

「カカロット~~~~っ!!」

「フ、フリーザ・・・へっ・・・へへ・・・あ、あいつはよお・・・
お、お前が・・・恐れていた・・・超サイヤ人だ・・・」

「・・・何・・・!？」

「は、はは・・・お前は超サイヤ人が生まれるのを恐れたからだろ!？・・・へへ・・・」

「ベジータ？僕が、くだらない冗談が嫌いだってしってるよね？」

ズピュウウウン

それは、デンテを倒したときと、同じ、超高速の光線。
それが、ベジータの心臓部に貫いた。

「ぐはっ・・・!」

ベジータも、ついにとどめを刺される。

「お、俺たちの・・・わ、惑星ベジータは・・・、じ、実は・・・あいつに・・・あいつに滅ぼされたんだ・・・。それを知らない・・・俺たちは・・・、フリーザの手となり、足となり・・・必死に・・・働いたのに・・・こんな有り様だ・・・頼む・・・カカロット・・・フリーザを・・・倒して・・・くれ・・・」

ベジータが動かなくなってしまった。

「おめえもいろいろ大変だったんだ・・・」

悟空は、ベジータを埋葬した。

悟空がフリーザに向かって一撃食らわしたところから、対決が始ま

つ
た。

あたしが戦ってるわけじゃないので、略します・・・。

悟空復活 フリーザを倒せ！（後書き）

あの戦いを全部かくとあまりに大変なのでやめまゝす

まさかの復活！？ 大混乱のギニュー

「ブ、ブルマさん！？」

あたしが驚いているのは、ブルマが目の前にいたことだ。
今は、戦いの最前線。

宇宙の帝王と戦闘民族という、あり得ない戦いだ。
他の漫画とは比べ物にならない。

そんなところに、どうして彼女がいるんだ！？

「へっへっへ」

笑い方も男みたいだ。
全く。

どうしてこんな様子で笑っていられるんだ。

「おお！フリーザ様が戦っておられる！」

ん！？

フリーザ様？

様子がおかしい。

あたし以外にも、ピッコロも状況の異常さに気がついたのだ。

「待てっ！ーおい！てめえはいったい誰だ！？」

「そうですっ。何者ですか？」

ブルマはバレたことには何も反応しない。

「さすがにこの体のまま、フリーザ様のところに行っても仕方がないからなあ……。このなかで一番強そうな体をもらう」

狙いはピッコロ。

指をピッコロに指している。

「チェーーーーーーーーンジー!!」

もちろん、アウトを三つとったわけではない。
あの技は。

「ギ、ギニュー!?!」

わかったのは、全員。

少し前に、蛙になってどこかに消えたのに……。

「やめてえっ!!」

ヒュウウウウン

あたしは、気がつくとも目の前にいた。

間違っつてついさっき、その技を自ら受け止めたのだ。
つまりは、体の入れ換え。

あたしの体は、ブルマになってしまっていた。

「ほう。こっちの体もなかなか使えそうだな……」

「あ、あたしが……。ブ、ブルマさんに」

「ギ、ギニューが入れ変わったのか!?!」

あたし、いや、ギニューは、そのまま、その姿で、フリーザのころへ向かおうとしている。

「ピ、ピッコロさん……。お願いです。あの体は、痛め付けられなくても、全然構いませんから、何とかして、倒してもらえませんか？」

「イ、イヴ!? いいのか？」

「はい。彼では、ナノマシンを操ることはできません。それに、慣れない体では、戦うことはできないでしょう」

「そうか。だったら、遠慮なくやらせてもらうぜ……」

ピッコロは、残り少なくなった、自分の気を、溜めている。指先に、全てを集中させている。

そこに、あたしの残った気も、少し分けていった。そうすれば、早く蹴りがつくはずだ。

「いくぞっ!!」

魔貫光殺砲!!」

この技が、イヴの体に向かっていき、体に当たる。

「ぐあっ……。!」

そして、そのまま落ちていった。

「追いかけるぞっ!!」

ピッコロ、悟飯、クリリンは飛び立っていった。

あたしは何とか使いにくい体を飛ばして、ノロノロと追いかけた。

「く、くそお……。よくも俺様に攻撃しやがったなあ〜！」

「へっ。今の貴様程度なら、簡単にとどめをさせるさ……」

両者ともに、気が残り少ないため、肩で息をしていた。

あたしの能力を使えない彼は、何とか攻撃に乗じるが……。

「てやあー!!」

なんと、あたしの蹴りでも、ダメージを受けた。

「ぢ、ぢぐじよう……。あんなやろくに……」

地球人の底力は偉大だと言っただろうか……。

いや、関係ない。

俺は現に強いんだ。

グルトを倒そうとしたときも、妙な能力を使っていた。

確か、「変身^{トランス}」とか言っただけ……。

「く……。どうやってやるんだ？」

腕を武器に変換することが出来る、あの物凄い能力。

力の使い方が違うのかも知れない。

何となく、イメージを試してみる。

鋭く、固い、刃物を想像し、それを腕に集中させる。

トランス
変身？
ソード
剣？

あいつほどまでではないが、何とか剣が出来ていた。

「と、^{トランス}変身が、完成しちゃってる・・・」

「へへへ・・・これまで力のコントロールが出来たなら、もうこちらのものさ！」

俺は笑ってやった。

ナメック星人と、地球人。サイヤ人二人が俺の場所にやってくるが、もう笑いしかでない。

ナノマシンまで使い始めたあいつ。
もうどうしよう・・・。

「うそっ・・・。今のあたしじゃ、気弾を打つのがやっとなのに・・・」

「ああ・・・。こりゃ、体になれてるんだな」

「まずいですよ・・・。あの体はイヴさんのものなのに・・・」

あたしはもう、どうしようもなくなっていることに、気がついた・・・。

それは、ピッコロですら、匙を投げてしまった。

「も、もうどうしようもない・・・」

「そうだ。やっとわかったか？あとは、貴様らを倒してしまえば、もういいわけだ・・・。へっへっへっ」

あたしの体はいつたいていどうなってしまうのだろうか？
そんな問いは、すぐにあるものが答えを生み出した。

「ぐ・・・うごお・・・っ・・・ぐっ・・・」

突然苦しみだしたギニュー。

「な・・・い、いったいどうしたんだ？」

「さあ、わからん」

なんだろう？あたしも、謎だった。

苦しむギニュー。

手を見ると、さっきまで作られていた、剣のような武器が、消えてしまっている。

変身^{トランス}を拒否するような、膨大なちから。

これを左右できるのは、もしかして・・・。

「わかりました。あれはたぶん、ナノマシンの暴走です・・・」

「え？ナノマシンって暴走することがあるんですか？」

「はい。あまりに、想像が鈍いものだから、ナノマシンが上手く作

動せずに、バグが発生したんですよ」

ナノマシンのバグ。

思わぬ障害が、ギニューに生まれた。

「ぐあ・・・っ・・・ああ・・・く・・・くう・・・っ・・・うう・・・」

ギニューは体の、痛みというか、なんだかわからない衝動に駆られている。

「ど・・・うした・・・んだあ・・・ぐはあ・・・」

ギニューは突然、口を開く。

「ぐああああ!!」

ズキユウウウウン

気がつくど、あたしの体は、もとの体に戻っている。

「あれ？あれ？私、どうしたのかしら？」

なんと、ブルマまで元に戻っているではないか・・・。

「こ、これも・・・ナノマシンの能力・・・？」

ナノマシンは、まだまだ奥が深いようだ。

まさかの復活！？

大混乱のギニョー（後書き）

すみません。なんか、理由がこじつけで・・・。

弾ける元気玉 オラに元気を分けてくれ！

現在。

悟空は、元気玉を作っている最中だった。

それに、そのことをフリーザはわかってなかったため、こっそりとエネルギーを溜めることが出来ている。

「どうした？その構え。何かしてくるんだろ？早く当てて見ろよ！それとも、降参の合図か？」

フリーザは悟空の不可解な行動に、苛々しているらしく、さっきから、仕切りに攻撃をしかけている。

何とか立っている悟空だが、あれはいつまで持つか分からない。

（も・・・もつとだ・・・この程度じゃ、フリーザには勝てねえ）

「全く。サイヤ人のやることは、理解に苦しむよ・・・」

フリーザは遙か上空に、かなり強めの、エネルギーの球体が出来ているのに気がつかず、悟空を痛めつける。

これが、元気玉の弱点だ。

攻撃を溜めるまで、とても無防備。

チャージは、少しずつの元気のため、ゆっくりだ。

大きなパワーを作るには、そこそこの時間がかかる。

今は、チャージを終えるか、悟空の体力が尽きるかの勝負と言える。

「もしものためだ。俺に少し気を分ける。自分の分も残しておいてな」

ピッコロの提案により、あたしたちは、気をピッコロに渡す。
ピッコロの気は、少し充実して、溜まった。

しかし、これでは、力の籠った、一発しか技を繰り出すことは出来ない……。

「さて……。そろそろ、この星に止めをさしてしまおうか。そうすれば、あの小僧たちも宇宙の塵だ。これで、この星からサイヤ人が消えてなくなる……。」

フリーザは指先に、真つ赤なエネルギー弾を作った。
それは、指先に乗るくらいの小さな大きさではあるが、気の大さが示す通り、相当な力だろう……。

「ち、ちくしょお……。」

悟空は、元気玉の気確かめる。
今の気では、いくら打ったとしても、避けられるか、打ち返されるに違いない。

「ん……。！？何だ？あの光は？」

フリーザは、悟空を一発蹴り飛ばして、海に落とした。
そのとき、海に見えた、見たこともない光が放たれていた。

「き、気付かれたか……。」

「俺の知らない間に……。あんなものを作っていたのかっ！！許さん！許さんぞお！！お前たちを一瞬にして消し飛ばして……ぐ」

「おほおっ!!」

ピッコロは、全速力で走り、フリーザの顔に一撃を食らわした。フリーザは地平線に吹っ飛んでいった。

「ちきしょお!まだうるちよろしていやがったのか。あのナメック星人め!」

フリーザは苛々が募っていた。

「ちくしょう!ちくしょう!」

フリーザはナメック星人に向かって猛突進し、吹き飛ばす。何発も何発も殴り飛ばして、ピッコロは倒れ込んだ。

「ご・・・悟空・・・元気玉は・・・まだ完成しないのか・・・」

「も、もう少しだ・・・」

そこにフリーザが降り立つ。

「貴様から先に死にたいらしいな・・・。わかった。君から先に、宇宙の塵にしてやるよ!」

フリーザはさっきと同じようなエネルギー弾を作る。

「消えてなくなれっ!!」

トランス
変身っ!

ビームショット
光線銃っ！！

ピッコロがピンチ。

悟飯の魔閃光、クリリンのかめはめ波、あたしの光線銃が混ざって、
フリーザに一撃食らわした。

「ぐ……この俺が、防御姿勢をしてしまった。もう生かしておけ
んぞ！」

フリーザは、空に飛び、エネルギー弾を作る。

真っ黒なエネルギー弾にスパークが纏っている。
絶対に死を意味する、狂暴なボールが作られた。

やばいやばい……。

デスボールだよ……。

あれ……。

「今だっ！」

元気玉投下！！

悟空は上に挙げている腕を、振り下ろした。

巨大な玉がフリーザに向かっていく。

デスボールは消え、フリーザに直撃する。

「こ……、こんなものお……！ぢ、ぢぐじよお……！！」

フリーザはそれを持ち、押し返そうともがく。

地上は、その大きな塊により、海は荒れ狂い、突風が巻き起こる。

さらに大きな岩が周りを飛び交っている。

「みんな！ふせろお！！」

ピッコロが叫ぶ。

みんなが伏せた。

突然、爆発音と共に、視界が真っ白になった・・・。

弾ける元気玉 オラに元気を分けてくれ！（後書き）

しばらく休みたいです・・・。
案が浮かばない（・・・；）

ついに終わった！？ 復活したフリーザ

光が収まったとき、あたしがいたのは、海にある小さな岩のうえ。小島とも言つ、この小さな場所は、あたしのいる場所以外にも、十、二十とあった。

たぶん、元氣玉の影響で全部弾けとんだのだろう。

あたしの周囲にいる、気を察知しようとした。

少し遠くに、弱い二人の気を察知した。

たぶん、クリリンと悟飯だろう。

トランス
変身
ウィング
翼

気を使わずに、空を飛ぶ方法として、翼を作って飛んでみた。

「悟飯さ〜ん！クリリンさ〜ん！どこですか〜！？」

反応なし・・・。

それどころか、人影事態見当たらない。

もしかしたら、気を消してしまっているのかも知れない。

だから、別の、悟空とピッコロの気は・・・。

「あれ・・・？」

これもまた感じられない。

どうしてだろうか・・・。

「し、死んじゃってなんか・・・いないよね。た、たぶん、いや、絶対大丈夫よ。悟空さんとピッコロさんなら・・・う、うん・・・」

不安を残しながらも、あたしは地面に降りる。

もう少し、遠くに飛ばされたのかも知れないと思ったからだ。

しばらくすると、感じたことのある気が、あたしにも感じられた。

「こ、この気……。もしかして、悟飯さんかも……。！」

悟飯は、元々いた場所に埋もれていた。

一度飛ばされかけていたところに、ピッコロが掴みとって何とか止めた。

そのまましばらく、土に埋まってしまっていたのだ。

「ああ……。イヴさんも無事だったんですね……。！」

「はい。悟飯さん。そういえば、クリリンさんや悟空さんたちは？」

「そ、そういえば……。！」

しかし、その心配は全くの無用だった。

「かはっ……。！」

クリリンは顔が地面に埋もれてしまっていたようで、辺りの地面に、クリリンの跡が出来ていたのだ。

「フ、フリーザは！？」

クリリンは辺りを見渡す。

しかし、どこにもフリーザらしき体は見えない。

「そうそう。悟空さんたちはその辺りにいません？」

「さあ？ 知らん。でも、悟空がそう簡単にくたばったりするもんかよ。しばらく様子でも見てろ。あっちの方からぼっこりと顔を出すさ」

クリリンは親友である、彼に絶大な信頼をおいている。
あたしもそう信じたい。

「あ！ あれ見ろ！」

クリリンが指差したのは、少し遠目の島。

確かにその方向には、何やら動いているものがある。
よく見えない。

トランス
変身

望遠鏡

髪の毛を望遠鏡に変えて見た。
すると、そこに見えたのは、

「ピッコロさんだ！それに、悟空さんも！」
「本当か！？」

海から何とか出ようとともがき、陸に上がったようだった。

トランス
変身
ウイング
翼

翼を作り、羽ばたく。
後に悟飯とクリリンも続いているようだが、気が少ないせいで、うまく舞空術が使えずに飛んでいる。

「悟空！っ！！無事だったか！っ！！」

「お・・・おう」

悟空は痛い体を抑えて、手を振った。

「ありがとな。クリリン」
「よく頑張ったなあ。悟飯」
「悪かったなあ。イヴ」

一人一人に悟空はお礼を言った。

あたしはそれより先に、悟空の回復をしようと、髪で腕を掴み、ナノマシンを送り込んだ。

近頃開発した、味方を回復させる方法だ。

「にしても。よかったあゝ！ やつとフリーザを倒せて！ あの元気玉でかかったからなゝ」

「ああ。他の星の元気も集めたからなゝ。 相当な力のはずだ」

「それにしても。 やつと帰れるんですね。 地球。 そっぴや、あたしたちの宇宙船、 壊れちゃったから、 悟空さんの宇宙船に乗らないとね」

「ああっ！ ！ そっぴや！ ブルマさん。 探さないと．．．」

「ああそっぴや。 忘れてたゝ」

「絶対どやされるよなあゝ。 ブルマさんに関しては、 ある意味フリーザより怖いからなゝ」

ただ冗談で言っただけだったのに、 まさか．．．。 まさか．．．。

「あ．．．っ あゝ！ あああ．．．」

全員が、クリリンの視界に目を向けると．．．。

「なぜだ！ ！ なぜ貴様が生きてるんだ！ ？」

「た、耐えたんだ！！ ！ まだ、終わってなんかいないのか．．．！ ？」

ー次回．．．何やら大変なことが起きる．．．！ー

これが最高の力　ついに誕生、超サイヤ人！！

「このフリーザ様が！死にかけたんだぞ！貴様ら！！」

怒りに震えるフリーザが、目の前に立っている。

「フリーザ！まだ生きていやがったのか！」

「貴様ら！一人も生きて返さんぞお！！」

フリーザは親指をつきだし、デスビームを放った。

「ぐ・・・っはあ！」

「ピッコロ！！？」

ピッコロの心臓部を貫いた。

そのまま、立つことが不可能になり、ピッコロは頭から倒れた。

「ピ、ピッコロさん！死んじゃ嫌だ！！」

「貴様も仲間入りだぞ！！だが！お前ら親子は後でいたぶり殺す！だからまず、お前だあ！」

「あ、危ないっ！イヴ！！」

なんとクリリンが、あたしを吹き飛ばした。

クリリンは、サイコキネシスで宙に浮き上がる。

「あっ！ああああ！」

「弾け散れ！！」

「ぐ、ごく・・・悟空~~~~っ!!」

真っ赤な煙をはき、一瞬にして、ばらばらに吹っ飛んだ。

「ク、クリリンさ・・・ん・・・!ど・・・どうして!？」

クリリンは一度、ピッコロ大魔王との戦いで命を落としてしまっている。

だから、もう、二度と、生き返ることは出来ないのに・・・。
彼はあたしを守って、死んでしまった。

あたしをかばい、みずからがもう助からないとわかっていながら、死んでしまった。

何であたしは、あたしたちはフリーザに勝てない。

どうして失わなくてはいけない。

大切な人を、失わなくてはいけない。

失ったものは、ドラゴンボールでも、戻することは出来ない。

何で!？

何で!？

何で・・・彼は、あんな無惨な殺されかたをしたのだろうか？

何でなの？

あたしが弱いから？

あたしが・・・弱いから・・・？

どうしてあたしは弱い？

なんであたしはこんなにも弱い？

サイヤ人でありながら、ここまで弱いのか？

あたしはサイヤ人。

宇宙の戦闘民族。

戦いのための力を身に付け、天然で強くなれる、最強の民族。

それなのに、落ちこぼれのあたしは、強くない。

強く・・・。

強く・・・なりたい・・・。
強く・・・なりたい・・・なりたい・・・なりたい・・・。

弱いあたしが・・・許せない・・・。
嫌だ！

変えてやる。

変えてやる！

こんなの・・・嫌だ！

あたしの気が、青の気から、金色に変化していった。

辺りから、雷が落ちる音が響く。

大気が渦巻き、竜巻が起こる。

目は黒色から、緑色に変化し、髪の毛も金髪になって逆立つ。

いや、逆立つと言うより、ウェーブがかかってくせ毛っぽくなる。

「うっわあああああああつ！！！」

「クリリンさん！絶対に！敵をとります！」

あたしの力が湧き水のごとく湧き出る。

怒りと言うか、悲しみと言うか、涙も流れてしまって、それも力と変わっているみたいだ。

隣を見る。

「よ・・・よくも・・・よくもおっ！！ぐあああああああつ！！！！」

白目を剥いたのと同時に、髪の毛が金色に染まる。

同時に気が金色に変化する。

目は、あたしと同じく緑色。

両者共に、超サイヤ人になっていた。

これが伝説の超サイヤ人だ。

ただ、怒りに身を任せ、力を振るう。

サイヤ人の極限形態。

「悟飯・・・ピッコロを連れてさっさと逃げろ！」

「え・・・でも・・・」

「早く！ぐずぐずするな！」

「え・・・」

「早くしろっ！俺を怒らせたいのか！」

はじめて悟空が悟飯に怒った瞬間。

それに、俺なんて、言葉を使ったのは、いままでになかったのだ。

「悟飯さん。早く逃げてください。ピッコロさんはまだ生きてます。助かるんです。早く、ブルマさんを見つけて、逃げて！あたしはクリリンさんの敵を討ちます！」

「わ、わかりました。き、気をつけて！」

悟飯は、ピッコロを背負って、何とか舞空術で飛んでいった。

「ふん。このまま逃がすわけがないだろう！」

フリーザは、悟飯に狙いを定め、サイコキネシスをかけようとした、

その瞬間。

ビュンッ

「いい加減にしろっ……。次から次へと……。殺していきやがって！」

悟空はフリーザの手を握りしめ、ぐぐつと力を込めた。

「あがあっ!!」

フリーザは苦痛の声をあげる。

トランス
変身
モンスターハンド
獣の手

あたしの手は、グロテスクな、まんまの形に変わる。

フリーザを二、三回切り裂いた。

「くらえっ!!」

フリーザはまた、二、三発いや、もつとか、デスビームを打ち付ける。

ズギヤッ

ズギヤッ

ズギヤッ

.....

「これで終わりか？」

あたしたちには、いたくもない。
わざと当たってやったが、少し掠り傷が出来る程度だ。

「な、なぜだあ！？お前ら！何者だ！！何者なんだあ！？」

今さら何いつてんだか・・・。

「とつくにござんじなんだろう？俺は、超サイヤ人。孫悟空だ！」

「超サイヤ人、イヴだ・・・！」

これが最高の力 ついに誕生、超サイヤ人！！（後書き）

新しく、獣の手という技を作りました。

熊のような、毛むくじらの手を想像してくれたらいいですね。

焦るフリーザ 超サイヤ人の圧倒的パワー

「ふざけるな〜!」

フリーザが真つ赤な気弾を突きだした。

何発も、何発も、立て続けに、打ち出した。

でも、あたしたちにはそんなもの、風が通りすぎるのと同じ。

「どーしました？宇宙の帝王フリーザ様は、まさかこんな程度なんですか？」

「なんだと！？バカにするな！俺は！宇宙の帝王だ！お前らみたいな、下等な猿野郎と一緒にするなあ！！」

次も連続の攻撃、あたしはかわすのも面倒だったから、全部手で受けてやった。

「てめえに殺された、みんなの恨みだ！」

悟空が一発。

あたしも一発。

フリーザは地面に激突する。

「ぢ・・・ぢくじょう！サイヤ人ごときが！また俺に齒向かうとは！許すもんか！絶対に！」

フリーザはひととき大きな気弾を作り出す。

後に、スーパーノヴァとも呼ばれる、大きな赤い気弾だ。

悟空はかめはめ波のポーズを取った。

あたしも、変身で光線砲トランス ビームガンを作っておいた。
気を集中して集めていく。

超サイヤ人になったせいで、気が格段に増えた。
だから、たった少しのチャージで、超光線砲スーパービームガンのパワーを越えてしまった。

もっともっと、あの気弾を粉々にするためには、もっともっと、力がある。

膨大な気弾が集まる。

「くたばれ！サイヤ人ども！」

何を焦ったのか、フリーザはあたしたちに向かって先に技を打ち出した。

それがどんな結果を招くかも知らずに……

「か〜〜め〜〜は〜〜め〜〜波〜〜！！！」

ビッグビームガン
「大光線砲！！！」

超かめはめ波と大光線砲ビッグビームガンはフリーザの気弾をかきけす。

「ぐぐぐうう……っ。ぢ、ぢぐじょう！ぢぐじょうー！」

フリーザは赤い気を放ちながら、攻撃を連続する。

でも、あたしにそんな攻撃が当たるわけもなく、

「ふんっ！」

気合いをいれるだけで吹き飛ばす。

フリーザは完全に焦っているのだ。

あたしたちの圧倒的パワーに。

「ただかサイヤ人に~~~~~！」

ナメック星の最後 親友の敵

フリーザは焦るに焦っていた。

マジで、今の状況から行くと、危険だ。

今まで危険視をしていた超サイヤ人が、いきなり二人になったのだ。焦るとしか言いようがない。

「ふざけるな！俺は宇宙の帝王なんだ！たかだがサイヤ人の猿ごときが、俺よりも上なわけがない。上なわけがない！」

フリーザは、自分の渾身の一撃を、溜めていく。

「またですかあ？もういいですか？あたし、本気を出しても？」

あたしは、光線砲^{ビームガン}を作り、本気の攻撃をしようとした。

「くらって宇宙の塵になりなさいっ！」

ビッグビームガン
大光線砲！！

フリーザは、そのまま海へと落ちていった。

トランス
変身
マーメイド
人魚

海に潜り、フリーザを探す。

ズオオオオオオオオ

あたしは、後ろから襲ってくるデスビームに気がついたのは、あまり時間がたっていないときだ。
あたしはそれを気弾で打ち返していく。

『それっ！』

体を元に戻し、蹴りを一撃放った。

フリーザの腹に見事に命中して、上に吹っ飛んだ。

ザバァァン

海から出て、フリーザは、今度は悟空に攻撃されている。

「俺は、その気になりやあ、この星を宇宙の塵にすることだって出来るんだ！」

「やってみるよ・・・」

悟空もかめはめ波の体制をしている。

いつでもフリーザを攻撃できると言う、警戒であろう。
でも、フリーザがあまりにも落ち着いた雰囲気だ。

「悟空さんっ！フリーザの技を破壊して！何かたくらんでますよ！」
「へっ。あんなもの、まだまだ破壊する余地もない」

悟空・・・。

超サイヤ人になってしまって、余裕を起こしてるのだろうか。
何にしてもあまりにも危険すぎる。

トランス
変身
フェザー・ブレード
羽根の弾丸

彼に攻撃をしかける。

だが、

「クリリンの敵をとるのは俺だ。お前に邪魔はさせねえ」

「う、悟空さん……」

確かに、クリリンの命を奪った彼には、相当な罰がいる。
でも、これまでもする必要があるのか。

アニメで見るより、悟空の憎悪の気が増えてる。

「ふふふふ。これでサイヤ人もナメック星人も死に絶える運命なのさ！俺は宇宙でも生きていける。だが、お前たちサイヤ人はどうだ？」

も、もしかや……

「この星ごと、消えてなくなれっ！！」

巨大なデスボールがフリーザの真下に落下していった。

「まずいつ！この星ごと爆破させる気だ！」

「しまった！」

トランス
変身
ビッグヒームガン
大光線砲

11

しかし、

「パワーが……足りない……」

ズギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア

視界は真つ白な光に包まれ、全てがおわたのだ……。

所変わって、ここは地球……。

「間違つて早い時期に来てしまったようだな……。ナメック星にいる時か……。早すぎた……。」

僕はついさっき、乗ってきた乗り物の椅子に腰かけた。

「さうって、どうしよっかなあ……。今から帰るエネルギーも残ってないしな。何で間違えて乗ってきたんだろうなあ……」

僕は、この機械に少し怒りを向けた。

僕の名は・・・、名乗るほどのものじゃない。

あと少しで、この地球で必ず必要になる人物。

あっ！

もうわかったかな・・・。

僕は誰に向かって語りかけてるのかわからないまま、前髪を払い除けた。

まだ平和な、この地球の空を見上げていた・・・。

ナメツク星の最後

親友の敵（後書き）

謎の少年Tの登場です。

100%フリーザ みせろ、真の力

光がおさまり、目を開いた。

目の前に写る風景は、天国や地獄の風景ではない。
マグマがうずまくほど深くまで大穴が開いている。

「力を緩めすぎたか・・・」

「それは、星の爆発に自分が巻き込まれてしまつのを恐れたんだ！
しくじったな・・・」

「悟空さん。危険です。核の中を破壊されてます。あと、五分もすれば、絶対に爆発を起こします！もう、本気でやりましょう！」
「言われる間でもねえ・・・！」

悟空もあたしも、本気でやらなくちゃいけない。
気を膨らませ、高める。

「いくぞっ！宇宙の帝王さんっ！」

あたしは、空を蹴り、拳を食らわす、何発も何発も、拳を出した。
髪の毛を手に変身させて、
トランス

ゴールドラッシュ
黄金の連弾

フリーザも、何とか追い付くが、蹴りも加えたせいで、

「ぐああああっ！」

海に落ちる。

「くらえっ！」

海から這い出た彼は、連続で気攻波を出す、あたしは難なくかわしていった。

「この程度ですか？」

「ぢ、ぢくしょっ！」

フリーザがあたしに向かって全力で走ってきたとき、悟空が攻撃を食らわす。

「次はこっちの番だぜ・・・」

「くそっ！本気を出せば、貴様らなどに倒せるのにっ！」

「本気だと・・・？」

「本気を出せば、パワーを使ってしまいが、間違いなく貴様らを倒すところ出来るさ！」

「何を言っている。そんなことさせ・・・」

「やってみるよ！」

なっ！？

またこの戦いバカは

「悟空さん！何言ってるんですか！もう倒した方がいいでしょ！」
「ダメだ。このままじゃ、おもしろくねえ。それに、この程度で殺

してしまつたら、クリリンだつて浮かばれないだろ」
「これで時間を食つても、あたしは知りませんよ」

少し悟空を幻滅した。

時間も残り少ない。

あと三分持てば良い方だ。

「うがあああああああつ！」

7	0	・	・	・	7	1	・	・	・	7	2	・	・	・	7	3	・	・	・	7	4	・	・	・	7	5	・	・
7	6	・	・	・	7	7	・	・	・	7	8	・	・	・	7	9	・	・	・	8	0	・	・	・	8	1	・	・
8	2	・	・	・	8	3																						

『これ、お主ら・・・』

頭の中から声が聞こえた。

この声の主は、界王様だろう。

「なんですか？界王様？」

「もう時間がない！さつさとフリーザにとどめをさせ！力を溜めて
いる今がチャンスだ」

「界王様・・・。わりいがそれはできねえ」

「な、なんだと！？孫悟空・・・。お前・・・。」

「俺・・・。もっとすごく、強くなったこいつと戦って、何とか勝
ちたい」

「何を言つとるんだ。ナメック星爆発までもう時間がないんだぞ！」

「……………」

無言の返答だ。

あくまで自分の意思を曲げるつもりはないらしい。

「そういえばイヴ！イヴはどうなんだ！イヴは帰ってくるのか？」

「あたしは……あたしは……。ここに残りたいです……！」

「イヴまでもか！」

超サイヤ人は、誰にも意思を曲げず、絶対的な自信を持っている。
何が何でも勝つ。

あたしもそういう気分だ。

負けてたまるか。

負けてなるものか。

クリリンさんのためにも。

サイヤ人のためにも、そして、ナメック星人のためにも。

「もういい。勝手にしろ！」

界王様もあきれてしまったようだ。

もうあたしたちは、他の人が知っているあたしたちじゃない。

超サイヤ人カカロットと、超サイヤ人パリカなのだ。

9 0 . . . 9 1 . . . 9 2 . . . 9 3 . . . 9 4 . . . 9 5 . . .
9 6 . . . 9 7 . . . 9 8 . . . 9 9 . . . 1 0 0 ! !

「またせだな・・・。これがおまぢかねの100%だ」

「時間がねえ。とっとと決着をつけるぞ」

イヴの最後 ナメック星滅ぶ

真の力を引き出したフリーザ。

その力は、想像以上だった。

今までとは早さが違う。

超高速で繰り出されるパンチやキック。

あたしも悟空も、何十発と当たり、痛みが全身を襲う。

トランス
変身
リフレクビームガン
反射光線砲

ちょうど岩に囲まれたところで、その技を繰り出した。

カンッ

カンッ

岩にぶつかって、跳ね返ってくる。

三発ほど打つと、弾が何回も跳ね返る、やっかいなわざとなる。

「こ、このこざかしい技めえっ!!」

フリーザが打ち出した気弾で全て欠き消された。

「ちっ！これなら！」

ビッグビームガン
大光線砲!!

ドオオオオオオオオ

ズビュウウン

フリーザのデスビームがそれを無効にする。

「うっざいなあ！さっさとくたばっちまえよ！」

「それはこっちの台詞だ。猿野郎め！！」

フリーザは飛び立つと、あたしに何発もの拳を浴びせる。

あたしも対抗してパンチするが、フリーザは想像以上のしぶとさで、あたしを一切よせつけない。

「くたばれっ！」

渾身の一撃に、あたしは地面へと落ちて、叩きつけられた。

「はぁ……。はぁ……」

フリーザは肩を切らしながら、悟空とあたしを交互ににらみつけている。

「これで終わりか？」

「な、なんだと！？」

「これで終わりかと聞いてるんだ！！」

フリーザですら、あまり100%の力を使わない理由。それは、体力の消耗があまりにも激しいからだ。

「フリーザ。残念でしたねえ。あなたの体力とあたしたちの体力。さきに減ったのはあなたのほうでしたねえ」

「もう終わりだ。フリーザ」

フリーザは息を切らしながら、力をいれる。

「終わりだとは・・・どういうことだ!？」

「お前は、完全な力を使いすぎて、体力がどんどん無くなっている。俺はこれ以上、何をやってもおもしろくないと思い始めた」

「な、何を言うか!」

フリーザは頭に血がのぼっている。

きっと今なら何だってやりかねない。

あたしは、一番の大技を決めようと、トランス変身した。

トランス
変身

らいめいしんげき
雷鳴豪豪刀

ナッパにとどめをさした、大技、らいめいしんげきは雷鳴進撃波を繰り出せる剣。

力が膨大すぎるため、あまり多用はできないこの技。使うタイミングには、おそらくもってこいのはずだ。

「まだだ!俺はまだ負けないぞ!」

フリーザは右手を上にあげて、気弾を出す。

それは、チェーンソーにも似た、鋭い音をかなで、気円斬のようになった。

「くたばれっ！」

悟空はそれの本質を見抜いたのか、飛び上がってそれをかわす。しかし、

「それっ！」

フリーザが腕を振ると、悟空がいた方向に、それが動く。

「つまらん技だ」

悟空は平然とそれをよけていく。

切られそうになっても、それを残像を残す高速で跳ね返した。あたしのほうに向かってきたそれを、

「新技！」

稲妻^{いなづま}ラッシュ！！

超高速で何度も何度も剣をつく。
デスソーサーを縦から切り裂く。

「く、くそっ・・・」

「悟空さん。もう気はすみましたか？とどめ、さしますよ？」
「ああ。一緒にいくぞ・・・」

雷鳴^{かみなり}豪豪刀^{ごうごうとう}を消してしまう。

そして、亀仙流の最高技を使おうと構えた。
手首で両手をあわせ、手を広げる。

体の後ろへ手をやり、気を溜める。

「か~~~~っ」

「め~~~~っ」

「は~~~~っ」

「め~~~~っ」

「波~~~~っ!!」

かめはめ波がフリーザを包み、爆発した。

「よし。終わりましたね・・・」

「ああ。さっさと宇宙船に帰ろう」

二人とも超サイヤ人を解き、舞空術を使い、飛び立った。
しかし、

「お、俺が、負けて・・・たまるかぁ・・・!!」

顔と左腕だけの、フリーザが立ち上がった。

「俺は、宇宙の、帝王、なんだ・・・。お前ら、サイヤ人ごときに・・・負けて・・・たまるか。お前らは、俺に、殺される、べきなんだ!!」

ただの気弾をうちはなつ。

「バカやろー！！！」

悟空はそれより強い気攻波を放って、フリーザを打ち倒した。

大変な事態だ。

爆発まで時間がない。

何とかフリーザの宇宙船を発車させようと試みたものの、全然動かない。

「これって、本当にまずいんじゃないの？」

「くそっ！動けっ！動けっ！」

スイッチをやたらめったら押しているが、発車すらしない。

そして、宇宙船の、あたりの岩が壊れてしまい、崩れていった。

「あっ・・・くそっ。死ぬのか？俺は？くそっ。ふざけるな。ふざけるな！」

しかし、奇跡はやってきた。

ギニュー特選隊の宇宙船があつたのだ。

たった一台しかなかったが、確かにそれがあつた。

「悟空さん。あれに乗ってください」

「イヴはどうするんだ！？オラのことは気にするな！」

「だめです。あなたは一度死んじゃってるでしょ？だからだめです！」

あたしは、ビームショット光線銃をうち、悟空をなかに押し込めた。

「イヴ・・・！イヴ！イヴうううう！」

「さようなら。悟空さん。なあと、すぐにドラゴンボールで生き返りますよ」

悟空は空高くに飛び上がって、宇宙に消えていった。
あたしは・・・この星と、運命を共にしたのだった。

イヴの最後 ナメック星滅ぶ（後書き）

イヴ編が終了します。

次回からは、別の主人公が登場し、彼が活躍しますので、それをお楽しみに。

ちなみに、イヴのストーリーは、別の機会に、違う小説として描きたいですね。

あれから一年 帰ってきたフリーザ（前書き）

イヴ編終了で、今回から別キャラが主役として登場します。

しかし、イヴ編もこのまま続けるつもりです。サブストーリー的なもので出てくるつもりなので、そのあたりはよろしくおねがいます。

あれから一年 帰ってきたフリーザ

イヴは帰ってこなかった。

イヴは間違いなく、ナメツク星と共に滅んだ。

それは、ナメツク星のドラゴンボールの神龍、ポルンガが教えてくれた。

それなのに、イヴはいなかった。

だったら、死んでいないのか。

もしかしたら、宇宙のどこかで生きているのか。

しかし、ポルンガはこう言った。

「その人物は、この世界には存在しない人間だ。存在しないものを、蘇らせることはできない」

存在しない？蘇らせられない？

誰しもが耳を疑った。

だって、今まで、彼女はいたのだ。

ナツパを倒し、ギニュー特選隊と戦い、フリーザを倒していた。

悟空は彼女をこう言った。

「イヴは、超サイヤ人になっても、強さに心を奪われず、やさしさを持っていた」

と、どうして彼女は、この世界から消えたのだろうか？

イヴはもしかしたら、この世界には存在しない、何者かだったのだろうか？

ナメック星人が、新しいナメック星に移住して数カ月後。
地球人たちはみんなそれぞれ、イヴへの思いをしまいこみ、悟空の
帰りを待っていた。

しかし、そんなある日。
とんでもない事態に陥った。

「あ・・・っ。こ・・・こ、この気は・・・」

とてつもなく膨大で邪悪な気。
全員が昨年まで、恐怖に怯えた気。

「フ、フリーザ!？」

まさか、まさかまさかまさか・・・。

「悟飯。確かに感じたよな。ものすごい気を」

亀ハウスから、クリリンが電話をかけてきた。

確かに、この気は、フリーザ以外の何者でもない。

邪悪で膨れ上がった、危険な気。

界王様が言っていた。

「フリーザは死んだ」と。

なのに、なんで生きてるんだ。

「で、でも・・・お、お父さんが倒したはずじゃあ」

「俺だってそんなことわかんねえよ」

その日、戦士たちが集められた。

「カカロットのやつめ、ちゃんとどめをささなかつたんだな」

「そ、それにしても・・・フリーザってやつはこんなに気がデカい化け物なのかよ!？」

ヤムチャや天津飯はあまりにも面食らっている。

「いえ。こんなものじゃありません。もっともっと、強くなってください」

「じよ、冗談じゃないぜ・・・!」

すでにヤムチャは怯えきっている。

それもそうだ、ヤムチャは、すでに天下一武道会の辺りから、すでに力の面では二番目、三番目と、劣っていたのだから。

おそらく、このメンバーのなかでもっとも弱いうちの一人だ。

「きたぞお～～っ!」

ピッコロが大声をあげた。

すると、空からは宇宙船がもうスピードで降りてくる。

戦士たちの上空を越えて、別の場所に降り立った。

「やつらはスカウターを持っている。ゆっくりと岩のかげから近づくぞ」

ベジータの言うように、みんなは歩いて動き始める。

この方法でいけば、気を無くして行動ができるからだ。

「地球……。まああの星じゃないか」

「さて、あの超サイヤ人がくるまでに、地球人を皆殺しにしようか。あいつの苦しむ表情が目につく」

フリーザは自分の部下に命令し、地球人皆殺しを執行しようとしていた。

そのとき、

「なんだ？あいつは」

「お前たちを殺しに来た」

突然、一人の青年が現れたのだった。

あれから一年 帰ってきたフリーザ（後書き）

主人公視点で次回から始めます。

フリーザは僕が倒す 謎の少年現る

「今、何と言った？」

「お前たちを殺しに来た」

「殺すって、僕たちを？」

フリーザは鼻で笑っている。

父親である、コルドと一緒に連れてきた彼は、父と顔を合わせて笑った。

「全く。なにも知らないとはいいいいものだな」

半分独り言のように呟く。

「知ってるさ。フリーザ、だろ？」

「ほう。これは光栄だな。こんな銀河の果てにまで、僕の名が知れ渡っていたとは。だが、僕が宇宙一の強さを持つてることまでは、ご存じなかったようだ」

「知ってるさ。これから、僕に殺されることもな」

「おしゃべりなガキが。これはお仕置きが必要だね」

一人、宇宙人らしき人が、やってきた。
スカウターと呼ばれる道具で、戦闘力を計る。

「戦闘力たったの5。ごみめ。ちょっと痛いけど我慢しな。すぐ終わるからな」

彼が何やら向けてくる。

そこから一撃、何か気弾のような光線が飛び出る。それを手で掴み、打ち返してやった。

「うぎゃあっ！」

仲間の悲鳴と共に襲いかかる数人。

ズバズバズバズバズバズバズバズバズバズバ

それら全員を切っていった。

「終わりだ・・・」

剣を鞘にしまったと同時に、何人かの唸り声とともに、全員の気が消えた。

フリーザとコルドの気だけを残して。

「少しはやるようだね」

「次はお前がこうなる番だ」

「ふふふ。それは無理だ。地球人。僕は宇宙の帝王。君ごときにやられたりはしないよ」

「お前は、さっきこう言ってたな。『あの超サイヤ人が来る前に、地球人たちを皆殺しにしておもう』と」

「確かに言った。貴様もその一人だ」

「ふっ、誤算だったな」

「なあに、地球のゴミどもをけちらすくらい、僕なら簡単にやつてのけるさ」

「そうじゃない。僕が言った、誤算というのは、超サイヤ人は孫悟空さん一人じゃない。ここにもいたということだ」

「なぬっ！？貴様、孫悟空の知り合いか！？」

「会ったことはない！知っているだけだ」

「そっくり、超サイヤ人になった瞬間、フリーザもコルドも戦闘体制になる。」

「ほう。貴様も超サイヤ人か。でも、この場には、孫悟空もイヴもないようだ。たった一人の超サイヤ人で、この僕を相手するなど、難しいことだよ」

「ん？・・・イヴ・・・だと？そいつも超サイヤ人なのか？」

フリーザは無言だ。

プライドを切り裂かれた苦い思い出だ。
さっさと忘れたい。

「お前が超サイヤ人ならば、生かしておくことはできん。さっさとこの星ごと消えてなくなれ！」

フリーザは大きな球を作り、いつきにふり下ろした。
この程度の技なら受け止められる。
腕をつき出し、手で受け止める。

「な、なんだと!？」

「これで終わりか？フリーザ」

フリーザは最終手段に出た。

その大きな気弾に小さな気弾にうちつけ、爆発させたのだ。
その瞬間、まちがいなく肉体は滅んだかと思われていた。
しかし、

「フリーザーーーーッ!！」

両手で印を切るように、高速で動かして、手で三角に作った。

バーニング・アタック!!

気弾を放つ。

しかし、そんなに早い弾だったわけではなかったため、

「そんなものが俺に当たるか!」

しかし、フリーザは気がつかなかった。

自分よりもっと上に、そいつが飛び上がっていることを、
剣がフリーザに振られた。

そのあと、体が縦半分に割けられた。

「・・・っがあ！」

剣を何回も何回も振るった。

フリーザの体は粉々にきりさかれ、気弾を放たれると、何もなくなってしまうた。

そのあと、コルドも打ち倒した。

「ふう・・・。これから、孫悟空さんをお迎えに行きます！一緒に行きませんか？」

僕、トランクスは剣をしまい、みんなに言った。

フリーザは僕が倒す

謎の少年現る（後書き）

というわけで、主人公はトランクスです!!

〈番外編〉イヴの第二転生（前書き）

イヴのその後第一段です。その後、おなじように何回か書きます。
もしかしたら、長編になるかも知れません。

〈番外編〉イヴの第二転生

あたしはいつたいたのだろう。

ナメツク星が爆発寸前だったものだから、悟空だけは宇宙ポットに乗せて、あたしは・・・一緒に爆発したんだっけ？
ってことは・・・ここ、どこ？

あたしは、あるはずの目をゆっくり開けた。

どこ・・・？ここ？

そこは、綺麗な湖があるところだった。

しかし、そこには蓮の花が咲いているわけでも、そこから覗くと、血の池地獄が見えるわけでもなく、ただ、澄んでいて綺麗な湖だった。

その湖は、たくさんの魚が泳いでいた。

どうやら、ここは三途の川でも、極楽にある、蓮の池でもないようだ。

よかった。

まだ生きてたんだ。

となると、ここはどこなんだろう？

傷が全く感じられないところを見ると、ナノマシンの効果により、治癒能力を極度にあげて回復したんだろう。
どこかの遠い惑星なのだろうか。

この星の様子を見たいので、舞空術を使おうと、足に気を溜めようとした。

そして、あたしの体はみるみる地面から離れ・・・離れ・・・
離れ・・・ないっ！！

舞空術が使えない！

どうしてなの？

その瞬間、あたしは、自分の体の異変に気がついたのだった。
足が鳥みたいだ。

指は四本、極端に短く、皮と骨しかないようだ。

手も感覚はあるのに、よくみると、翼のようだ。

でも、あまりにも小さいから、空を飛ぶことは出来ないだろう。

そして、体全般はというと、めちゃくちゃ小さくなってしまっている。

そして、オレンジと黄色の体毛で覆われている。

嘴と鶏冠をみると、この形……。

もしかして、

「チャモ。チャモチャモ」

アチャモ？

あたし、アチャモなの？

「チャモ、チャモオオオオオ！（なんでアチャモなのよおおお！）」

「

虚しく空に響いた。

「チャモチャモオ……（はあ、腹減った……）」

あたしはぐったりしていた。

だって、ずっと虚しい雄叫びを上げたから、疲れたんだよねえ。

どうしてアチャモになったのか。

トランス
変身も使えないし、サイヤ人の特性も使えないし。

あ、でも、モンスターボールには一度入って見たかったけど。
しかも、アチャモって。

せめてワカシヤモの方がよかったのに・・・。

にどげりやってみたいなあ・・・。

頑張ってレベルでもあげるか。

そしたら、また、なんとかなるしね。

あたしの転生物語第二段。

ポケットモンスター編スタートだ。

とりあえず、前向きに悟飯を探しに、ああちがう、ご飯を探しに、
近くにちようどいい感じにあった森へ入った。

一応アチャモなんだか、つつくとか、ひのこくらいならできるでしよう。

と、ちようどいいところに、オレンの実があった。

でも、木の上に置いてある。

あれを取りに行くのは、正直言ってめんどくさい。

頑張っ、嘴と足爪で上るが、途中でどう頑張ってもずりおちる。

「ぐうぐう。あと少しなのにっ！」

（面倒だから、チャモチャモって言うのは省略します）

そうだよ、いつそのこと、つつくで木を倒して、そのまま落ちた木
の実を食べればいいじゃん！

と、あたしは思う。

トントントントン

十回やって、やっと、少し穴が開いた。

意外とこの木は丈夫みたい。

でも、それが危険な輩の巣に響いたみたいで、

「てめえ・・・そこで何やってんだ？」

見ると、アリアドスが一体、お怒りの様子でこちらを見ている。

「え？あ、あの・・・あの実が食べたかったから、木を倒して食べようかなあって・・・」

「ここに俺たちの巣があるって知っててか？」

「そ、そんなわけ」

「いいわけなんか聞かん！てめえは許さん。捕らえる！」

なんですとお！？

にげるおっ！

でも、あたしがいくら走ったところで、この森を知り尽くしている、アリアドスに勝てるわけもなく・・・。

「さて、追い詰めたぜ」

木の端に追い詰められ、アリアドス、20体くらいに囲まれた。

くものいとが飛び出る。

上下左右からいつせいに飛び出たそれたちに、あたしはなす術もなく、とらえられるはめになった。

「やめてえっ！はなして！知らなかったの！そんなこと！」

「だがなあ、俺の巣に危険をもたらしたんだから、お前はその罪を償え！」

アリアドスは何か、技を繰り出す。

それは、サイコネシス。

あたしは宙に浮き、地面に叩きつけられた。

「ご、ごめん・・・な、さい・・・」

「謝って許されるもんだいじゃねえ！」

そのしゅんかん、こわいかおを使われて、アリアドスがとても怖くなった。

アリアドス数体が、あたしの周りに近づき、みだれひっかきを食らわす。

あたしは傷だらけになった・・・。

「次したら、二度と戦えねえようにしてやる」

「・・・」

あたしはあまりの恐怖に戦うことが出来なかった。

その後、動くこともせずに、眠りについた。

目にいっぱい、涙を溜めながら・・・。

〈番外編〉イヴの第二転生（後書き）

イヴがアチャモになりました。

どうしてアチャモなのかって言うと、僕が好きだからです。

おかえり孫悟空 謎の少年トランクス

「もうすぐここに、孫悟空さんが来ます」

僕は、未来で母が言っていたことを頼りに、その場所にたどり着いた。

カプセルから、ジュースを取り出して、

「飲み物はいかですか？」

食いついたのは悟飯と若い母^{ブルマ}だけだったけど、これで少し警戒は解かれるかな。

だって、僕を見る目がさつきから怖いからね。

三時間の間、このあとのことを考えた。

僕の正体を、何人もの人が知ってたがっていた。

でも、あまり知られたくはない。

知ってくれるのは、強さと優しさを両方兼ね備えた、そう、超サイヤ人の悟空さんとかじゃないと・・・

それよりも、僕が気になるのは、フリーザが言った言葉にあった、イヴと言う、謎の超サイヤ人だ。

未来には、そんな戦士はいなかった。

この時空だけには、なぜかそんな戦士がいるのだ。

彼も超サイヤ人になれると言う。

彼は男なのか、それとも、女なのか。

それ自体も全くわからないんだ。

そんな思いに耽っていると、すぐに三時間経過した。

「三時間経ちました。もうすぐ、孫悟空さんがくるはずです」

悟空さんの気も、少しながら感じ始める。

いや、本当はこれが孫悟空さんなのかは知らないが、こんな巨大な気を持つのは、超サイヤ人であることに間違いない。

しかし、超サイヤ人に同時期になったはずなのに、イヴらしき気はなく、気は一つだけだった。

「孫くんよっ！」

母も含め、全員が笑っていた。

ついに、孫悟空に会える。

地上のみんなには、感謝しきれないほどのことがある。

本来、ピッコロが死してしまい、ドラゴンボールがなくなってしまう
っているはずだった。

そんななか、不老不死という願いを叶えようとした、フリーザを倒し、ピッコロの復活で地球のドラゴンボールも蘇った。

そして、ヤムチャ、天津飯。

そして、地球のドラゴンボールの力ではどうすることもできなかったはずの、餃子、そしてクリリンまでが蘇ったのだ。

全ては孫悟空のおかげなのだ。

宇宙船が地上に降りたときに、みんなはともうれしそうだった。
我らの英雄だ。

もし、悟空さんがフリーザとの戦いで負けていたなら、きっと今ごろ、ナメック星人も、地球人も、きっと滅んでいたに違いない。

「さっきまでフリーザがいたのに、すぐ倒したやつがいるんだなあ。すっげえ気だったぞ」

降りてきた悟空さんは、挨拶もそこそこに尋ねてきた。

「ピッコロか？それともベジータか？」

しかし、両方とも首を振り、ピッコロさんが答える。

「フリーザはそいつが殺ったんだ。そしてどういうわけか、貴様やイヴと同じように、超サイヤ人になれるんだ」

僕を指差してそういう。

しかし、父はそれを認めてはいないようだ。

「こいつが超サイヤ人なわけはない！本来、サイヤ人の種族は黒髪だ。そんな紫の髪になるはずはないっ」

確かに、僕はサイヤ人の目印である、黒髪でツンツン、さらに尻尾。これらが全てなくなっている。

尻尾は母の血のせいかな、全くない。

髪の毛やその質も、どっちかという母親似だ。

父親に似ているところと言えば、目付きの鋭さと、パワーだ。

なんてったって僕は王族の血を引いている。

スーパーエリートですから！

いや、問題はそこじゃない。

悟空さんはベジータの言い分にたいして、

「ま、どうでもいいやー！」

と返答したのだ。

「あの……。悟空さん。少し、あなただけとお話、できませんか」
みんなから少し離れたその場所に、僕と悟空さんは移動した。

「フリーザを助けてくれて。ありがとな。宇宙船がフリーザのに抜かれたのを見たときに、まだこりてねえから、一発やつつけようとしたんだけど」

「どうやら、少し時間が遅かったようなので、僕が代わりに」

「いや。実は遅かったなんてことはなかったんだ。オラ、瞬間移動ってやつができるようになったぜ！」

僕はとても驚いた。

まさか、悟空さんがそんな技を身につけているなんて、全く聞いていなかったんだ。

「俺は……。無意味に歴史を……。変えてしまった」

少しすまなさそうに言ったのだった。

「歴史……。？」

「悟空さん」

僕は話を無理矢理切り替える。

「あなたは、自分の意思で、超サイヤ人になることは出来ますか？」

「ああ。最初のうちはダメだったけどな。苦労してるうちにできるようになった」

「なっただけですか？超サイヤ人に」

僕は、気を一度に大きく増幅させ、超サイヤ人になった。

「で、どうするんだ？」

悟空さんは尋ねてくる。

「失礼します」

剣を抜き、そういうと、思いっきり振る。
しかし、悟空さんはかわさない。
僕は首をかする直前でとめた。

「ど、どうして、逃げなかったんですか？」

「そこでとめることがわかってたからな」

ど、どうして悟空さんにはわかったんだろうか。

「わかりました。今度はとめません。いいですね」

悟空さんは、指先に気を集中させた。

僕が剣を振ったのだが、キンという、金属的な高い音が響いた。

「ゆ、指で・・・」

受け止めたのは、たった一本の指だった。

フリーザの全身を切り刻んだ剣を、たかが一本の指で止めた。僕はその剣を振っていった。

しかし、その剣一本を指で全てとらえていったのだ。

「やはり、さすがです。ずっと、ずっと、聞いてた通りだ」

「??」

「あなたになら、話すことができる」

僕は、孫悟空さんにだけ、僕の正体を明かすことにした。

おかえり孫悟空 謎の少年トランクス（後書き）

こんにちは、トランクスです。

悟空さん。あなたには真実を話します。未来で大変なことが起きてるんです。

次回 生体兵器の少女 Z。

未来の運命 トランクスの正体

あなたは未来では、戦っていない・・・。

未来の運命 トランクスの正体

「僕の名前はトランクスと言います。みた通り、サイヤ人です。尻尾は、ないですけど・・・」

「へえ・・・。ベジータはオラと悟飯以外にもうサイヤ人はいないっていつてたけどな」

「ぼ、僕は未来の人間なんです・・・。タイムマシンに乗って、この時代に来ました」

「ひ、ひえー！未来からあ！？」

悟空さんが盛大にずっこけた。

「ってことは、お前、誰の子だ？」

まあ、そりゃあ、気になるのは当たり前でしょう。だから、正直に答えてあげましたよ。

「えっと・・・母さんは、あちらに見えます・・・」

悟空さんでも分かる。

唯一一人の女性、ブルマさんのことだと・・・。

「ブ、ブルマがあ！！！！」

驚くのも無理はない。

だって・・・、ブルマがまさか母親になるとは・・・。

さすがの悟空さんもぶったまげている。

「だ、だったら、父ちゃんは、ま、まさか……」

「ベジータさんです」

悟空さんがまたまたずっこける。

「へえ……まさか、ヤムチャじゃなくて、ベジータとはなあ。ベジータが親父にかあ、想像しにくいなあ」

あの夫婦だ。

悟空さん一家と同じく、普段はかかあ天下の家になるだろう。

「ぼ、僕は、そのために来たわけじゃありません。もっと、重大なことを教えに来たんです」

真面目モードになった僕をみて、いつきに悟空さんは聞き入った。

「でも、これから話すことは、胸の奥に、しまいこんでください。未来が変わったりしてしまうと困るので……」

僕は、未来の話を始めた。

今から三年後に、ある強力な敵が現れる。

その敵は、かつて、少年時代の悟空さんが全滅させたはずの、レッドリボン軍の生き残り、ドクター・ゲロの作った、人造人間、つまりサイボーグだ。

彼らは非常に残忍なやつらで、町を次々に破壊していき、次々と人々を殺して行った。

そいつらの名は、人造人間17号と18号。

ドクター・ゲロは、人造人間に裏切られて殺されてしまう。

そして、その人造人間と戦うために、立ち向かった、超サイヤ人の父、ベジータ。ピッコロ、ヤムチャ、天津飯、クリリン。次々と戦士たちが倒されていってしまった。

なんとか生き残った、悟飯さんと、なんとか人造人間を食い止めようとするも、悟飯さんも本気を出した、二人の人造人間に圧倒されてやられてしまう。

そのときに、超サイヤ人に覚醒した僕は、母のタイムマシンの完成と共に、この時代へ来て、未来を変えてもらおうとしたのだ。

「ちょ、ちよつとまで、オラは！？オラはどうなったんだ？」

「あ、あなたは、その前に、亡くなったんです・・・、感染型の心臓病にかかって・・・」

「オ、オラがか・・・」

さすがにショックは大きかっただろう。

ここにいる、全員が全滅してしまうという、想像もしたくない未来だ。

「大丈夫ですよ。未来だと、心臓病を治す薬がありますから、それを持ってきました。頼みます。未来を、変えてください！お願いします」

孫悟空さんは、わかったと返してくれた。

僕はそろそろ未来へ変えることにした。

「さようなら・・・。若い、お父さん、お母さん・・・。お幸せに・

・・。悟飯さん、死なないで・・。」

タイムマシンを作動させ、飛び立った。

それから、三年の時を、いつきにタイムマシンで渡ることにした。
タイムマシンって、便利ですねえ。

未来の運命 トランクスの正体（後書き）

こんにちは、イヴです。

次回は第2回の番外編！アチャモになった、あたしは、いよいよ、どうなっちゃうんでしょうか！？

次回、アチャモとトレーナー

チャモ、チャモチャモ（みてね）

〈番外編〉第2話 アチャモとトレーナー

あたしは朝になって、とぼとぼとあてもなく、森を歩いていた。昨日、アリアドスに苛められてから、自分の弱さを痛感した。

そりゃあ、はじめてこの体になったんだもん、慣れてないのは当たり前前。

でも、ここ最近、体術を鍛えるより、ナノマシンを鍛えるのに専念しすぎた。

トランス
変身に頼りすぎたのだろう。

「お腹・・・空いたなあ・・・。なにか、食べたいよあ・・・。」

ついに、空腹は頂点に達して、倒れてしまった。

「ん？ここは？」

気がつくと、そこは、

「気がついたかい？」

トレーナーがそこにいた。

「だ、誰っ！？」

「大丈夫だよ。さっき、君が倒れてたから、心配してただけだよ。」

大丈夫だったかい？」

どうやら、取って食おうとするわけじゃなさそうだ。

「お、お腹が減って・・・」

ぐう~~~~~っ

「お腹が空いてたのか・・・。だったら、これでも食べる？ポケモンフード」

それは茶色い、ブロック状の食べ物だった。

匂い、とかはしないけど、腹に入ったら何でもいいよ。

「いったきまゝすっ！！」

ガツガツガツガツガツガツ

二日分の空腹のためにめちやくちや食いまくった。

トレーナーも若干引いてた気がするけど、まあ気のせいってことで。

「ねえねえ。君って、野生のアチャモ？どうして一人っきりになってるの？」

そんなこと、あたしのしたこっちゃないでしょ。

「？」

「へんなやつだな？なあ、仲間にならないか？一緒に、ポケモンリーグ、目指そうぜ！」

「え？べつに、いいけども・・・」

ここがいったい、なんの地方かもわからないけど、とりあえず行く。

着いていきましょう。

モンスターボールのなかにあたしは入った。
しばらくすると、ゲット完了。

でも、あたしには何にも変化をもたらしはしなかった。
へえ、こんなものなのか。

ちなみに、彼は自分のことを話し始めた。
名前はユータ。

ついこの間、旅に出たばかりらしい。
ポケモンをもらえるはずの研究所や、ポケモンセンターが近くにな
いような、とてつもない田舎だったため、あたしがはじめてのポケ
モンだ。

ちなみに、父親に借りた、サンダーがいるらしいが、返しに村へ
戻るらしい。

あたしは、モンスターボールに入っているのもどうかと思い、外に
出た。

村は本当に、田舎だった。

マサラタウンなど、比でもないくらいの田舎だ。
信じられる？フレンドリーシヨップも、ポケモンセンターすらもな
い田舎なんて。

今までなかったよ、そんな村。

ポケモンのストーリーでは見たことがない。

「この村、今まで、買い物とかはどうしてたんだろう?」

あたしは一緒に歩いてる、サンダースに尋ねた。

「ずうっと、自給自足だよ。食べ物も、果物も、自分達で作ってるんだ。私だって、若い頃はずいぶんいろいろなところを旅したさ。でも、私も主人も、この村が気に入ってるんだ。だって、都会なんかいくと、平気で、捨てられたポケモンに出会っただ。そんなの、真つ平ごめんだ。私はこの村が好きだね。あんた、あの子いろいろなところにいくんだろうけど、人間の理不尽さに、主人を憎んだり、したらダメだよ」

ポケモン人生のベテラン。

つまりは、結構なお年のおばさんだ。

「わかってますよ。あたしだって、それくらいはわかってますよ。っていうか、あたしの場合は、主人〃命の恩人ですしね」

そうだ。

助けてくれたんだ。

彼はあたしを、アリアドスの逆鱗に触れて、氣力を失ったあたしを、彼は。

食物を与え、仲間にもしてくれた。

彼はやさしい。

恩に報いよう。

あたしが人間だった、なんてことはおいといて、アチャモとして、彼に恩を返すんだ。

あたしは旅に出る、決心をしたのだった。

〈番外編〉第2話 アチャモとトレーナー（後書き）

こんにちはトランクスです

なんだあの人造人間は！？僕はあんなの見たことありません！
え？もしかして、タイムパラドックス？

次回、人造人間19号20号 タイムパラドックス？

三年の時がたった。

（なお、トランクス目線なので、すでに戦いが始まっています）

まあ、実をいうと、タイムマシンで、三年の時間を経過させたのだ。つまり、もともとの未来から、三年時間を引いた場所に来ればいいのだ。

「も、もう戦いは、始まったんだろうか？もう少し前にいって、どうなったのか見たいけど、エネルギーは足りないし・・・」

エネルギーは自動で溜まっていくシステムなのだが、そのエネルギーは結構時間がかかる。

「とにかく、何か大きな気がある、あっちのほうに試ってみよう」

人造人間には気がない。

そして、永久に減らない体力と、パワーがある。

これは、気を消費させて、体力に限界がある、人間よりも悔しいが、優れているといってもよいだろう。

倒すは人造人間。

もしかすると、未来が変わってくれるかも知れない。

この時代には、まだ、みんながいる。

悟空さんが生きている。

だって、言っただじやないか。

母さんが。

「孫くんはいつだって、みんなのトップの強さで、強さだけはいつても、みんなを驚かせてた」

彼はそう、希望の星なんだ。
負けるわけない、彼が。

でも、ついさっきまで、戦っていたと思われるところに、大穴がポツカリ。

たしか大声で、

「ビック・バン・アタック!!!」

って聞こえた。

この声は、確かにお父さんの声だった。

お父さんは僕の住む時代だと、人造人間たちに倒されてしまうはずでも、そこにあった大穴をよくみると、人造人間、それも顔だけのものがあるのだ。

しかも、

「だ、だれだ!? こいつは!？」

それは見たところ、首からコードのようなものが垂れているため、人造人間のようなのだが、みたことがない。

白い顔にイヤリング？

だれだこいつら？

僕が見たのは、青年タイプだ。

冷たい青い目のスカーフをつけた、17号。

同じく冷たい青い目の、18号。

こいつらしか、僕は知らない。

悟飯さんも彼らしかいないって言ってた。

だったら、彼らは誰なんだろう？

「と、とりあえず、あつたの気へ向かおう!」

僕は全速力でつっぱしった。

そこを見ると、どうやらまだ誰かと戦っている。

しかし、どうやら苦戦しているようだった。

戦っているのは、また、僕たちの未来でみたタイプの人造人間じゃない。

「なんだ? あいつは! ? ピッコロさん! 誰なんですか? あいつは」
「なについて、人造人間だろ! ?」

それは、彼に、十分な隙を与えてしまった。

「ふんっ!!!」

彼はそのあたりの岩を、気攻波で破壊し、そのまま逃げていった。

「どういうことだ!!! トランクス!!!」

なぜか、僕の名を知っている父は、とても怒っていた。

「お前の言っていた時間に人造人間は来なかった。それに、その人

造人間も違っていた!!」

「わからない・・・!!歴史がねじ曲がったとしか・・・」

「まあいい。俺はとりあえず、あのやろつをぶつ殺してやる」

父は、いつきに飛び去っていった。

「もしかしたら、さつき、あの20号が言っていた、もうふたりいる、人造人間のこともしれんからな。特徴を聞きたい」

人造人間20号、聞いたこともないやつだ。

僕はそのときに気がついた。

過去、つまりこの時代で少し、変化してしまった歴史は、もしかすると、タイムパラドックスの仕業かも知れない。

「僕が知ってる人造人間は、17号と18号です。ふたりとも、青年のようなタイプです。17号は僕ぐらいの背で、首に赤いスカーフを巻いてます。18号も僕と同じぐらいの、女の子タイプです。ふたりとも、青く冷たい目をしてるのですぐにわかりますよ」

さらっと状況を説明した。

「あれ？そういえば、孫悟空さんは？」

「お前が言ってた、心臓病だよ。ついさつき、発病してしまって」

まずい。

歴史が変わってるということは、人造人間も、僕が知ってるやつらかどうか謎になっちゃうじゃないか？

とりあえず、父の行った方向へ行ってみよう・・・。

《番外ストーリー》

あたしは、現在、キャタピーと戦っている。
なんで、こいつと戦っているか、というと。

「おおっ！あのキャタピー強そう！ほしい！ゲットしてやる！」

なにやら、あいつに一目惚れしたらしい・・・。

「キャピーーッ」

キャタピーも、糸をはいたり、どくばりをうつてきたりとか、いろいろやってきたんだけど、あたしは炎タイプ。

んなもの、勝負は決まったも同然。

「アチャモ！ひのこー!!」

でも、あたし、炎の出し方、知らないんだけど・・・。

キャタピーがたいあたりを繰り返そうと、かけだしてくる。

すると、なんでだろう。

身体中から闘争本能のようなものが沸き上がる。

これは、サイヤ人になったときに、覚えた感覚だ。体が熱くなり、口へと動く。

すると、

ボオアアアアアアアアアアアアアアアア!!

炎があふれでくる。

そして、そのあとに、目を回して倒れるキヤタピー。

「行けっ！モンスターボール！」

キヤタピーを仲間にすることが出来た。

「僕、キヤタピー。君強いね。よろしく！」

なんともまあ、フレンドリーなやつだ。

新しい仲間、キヤタピー。

これからの仲間として、仲良くしていこう！

人造人間19号20号 タイムパラドックス？（後書き）

こんにちは、トランクスです。大変ですよ！まさかまだ人造人間がいるなんて！それに、あいつはいつたいだれなんだ？

次回ー17号、18号 究極の人造人間現るー

チャモチャモ！

わしはひどく苦戦していた。

まさか、サイヤ人という種族がここまで強いとは思わなかった。

そしてナメツク星人。

少し前に、ベジータとやらのパワーを吸ったのに、またあのナメツク星人は強くなってしまった。

さつきから、こそこそと動きまくり、岩の周りで姿を隠しながら移動していたのに、ついに身動きがとれなくなった。

素早さなら、誰にも負けずに動ける。

それなのに、どうしようもないのだ。

ついにわしは決心し、彼らのいう、舞空術で移動を開始した。

「まちやがれーっ！ガラクタ人形ども！！」

ベジータがさつきから非常に苛立った様子で追いかけてくるが、冷静さを失ったサイヤ人など、ただの戦闘狂にすぎない。

わしは、ひらりとかわして、町中に隠れ、森に隠れ、こそこそと移動することに成功していた。

「お、お前、20号！！みんな！来てくれ！」

途中、なんとクリリンが、わしの前に現れた。

たかだか地球でトッポクラスの戦闘力。

わしに敵う相手なんかじゃない。

「ぐはぁ・・・っ！」

「貴様なんかがわしの前に現れよって、思い上がりにもほどがある」

そう言い残し、もうすぐにある、わしの研究所に出発した。

だから言っ たんだ！

もう少し慎重にやれって！

僕はとにかく幻滅した。

母から聞いていた父の印象と、今、僕が目の前にいる父と、全然違うのだ。

「自分勝手すぎる！」

僕は思わず口に出してしまった。

そして今度は、人造人間を取り損なう。

どうやら、サイヤ人の誇りがとても大事らしい。

「い、今の気は・・・、もしかしてクリリンさん！？」

ピッコロさんのアイデアで、人造人間を見たら、気をいつきに高める。

クリリンさんの気がとてつもなく高くなっている。

「ど、どうしたんですか？」

「さっき、人造人間が、あの、洞窟にはいつてった！」

どうやら、洞窟のなかが秘密の研究所のようだ。

さすがに洞窟のなかまでは僕も見ただことはなかったので、その存在は知らなかった。

「行きましょう！」

僕たちも、さつき、人造人間が入っていった研究所に行った。

わしはひたすら慌てふためいていた。

何人もの戦士が、わしを次々と襲いかかる。

永遠の命を手にいれるために、わざわざ人造人間に改造したのに。こうなったら、あまり使いたくはなかったが、人造人間17号と18号を呼び覚ますしかない。

わしは、決死の覚悟で、その、封印を解いた。

まず開けたのは、17号。

無理に連れてきた二人の人間の、双子の弟。

彼はゆっくりと起き上がって、わしに言った。

「おはようございます。ドクター・ゲロさま」

わしには意外だった。

少し前、わしが行動をさせたときなど、わしの言うことなど一度も聞かずに、ひたすら暴れまわったのに。

わしは、ひたすら、自らがかしこいと、自負していた。

あとは、18号だ。

わしは、半信半疑ではあったが、成功を祈り、目覚めさせた。

「おはようございます。ドクター・ゲロさま」

「もうじき、サイヤ人らがこの研究所までやってくる！お主らで、取り押さえるんだ」

これに、はつきりと、従うと思っていた、わしがバカだった。

「やだね。くそじじい！」

17号は、そういうと、わしの首をわしずかみ、首と体を引き剥がし、そのまま、投げ捨てた。

わしが手に握っていた、もしものための、二人の強制停止用のスイッチを取られた。

「これは、俺たちにはもう不要だ。無論、お前もな！」

「やめときな。17号。それでも、私たちの産みの親でもあるんだ。殺さないようにしときなよ」

「わかったわかった。じゃあ、この程度にしとくか」

体をめちやくちやにしておいたあげく、彼はそう言った。

「あとでなんか、敵がくるって言ってたな。まあ一応、俺たちの目標は、孫悟空抹殺だが、とりあえず、そいつらを倒してからにするか」

彼はそういうと、扉がガタガタと揺れだした。

「ねえねえ。こっちにもう一つ、人造人間があるよ？」

それは、16号のものだった。

「そいつは失敗作だ！開けてはならんぞ！」

「18号。開けちゃえ」

なかから出てきたのは、体長2メートルはある、巨体な人造人間。

「ほう。こいつはいいな。俺たちの仲間として、動いてくれるか？」

「もちろん。構わん」

16号は静かに答えた。

「そこを動くなあ！」

僕と父の技で、頑固な扉をこじ開けた。

すると、そこには、頭部だけで転がる20号。

僕も知ってる、17号、18号。

そして、

「だ、誰だ！？あいつは！？」

それは、16号というらしかった。

僕たちをちらみしたあと、すぐさま飛び立った。

「孫悟空のところにいくか」

そう言い残して。

「カカロットだと？俺だって、トランクスだって超サイヤ人なのに、カカロットだと？あんな下級戦士のどこがいい。待ちやがれ！カラクリ人形どもー！！」

父がもうダッシュで追いかける。

「待つて、お父さんっ！」

僕も一緒についていったのだった。

《番外ストーリー》

あたしは今、ポケモンセンターのなかで出会った、一人のトレーナーのポケモンと戦っていた。

「いけっ！ゼニガメ」

それはゼニガメだった。

ちよつとまって・・・水タイプだよ、相手。

あたしは、ゼニガメのみずてっぽうを何とかかわしていき、つつくをお見舞いした。

しかし、相手もからにこもるを使ったせいで、ダメージを与えられない。

そのうえ、接近してしまったせいで、向こうの攻撃が当たりやすく

なってますう。

「今だっ！みずてっぼう！！」

「うわあああっ！」

あたしの体に、苦手である、みずてっぼうが直撃した。

あたしも何とか反射的にひのこをふきだしたけど、みずてっぼうに力及ばず、負けてしまった。

「残念だったな。アチャモ」

「本当だよ・・・」

「ま、もつとこれから、頑張っつてよくなっつてこっぜ！」

「うんっ」

言葉は伝わらないけど、気持ちでわかる。

あたしは、彼の手にあるポケモンフーズを一口食べた。

彼はとても、笑顔だった。

17号と18号 究極の人造人間現る（後書き）

こんにちは、トランクスです。

お父さんがなぜか知らないけど人造人間を追いかけ始めました。そして、戦うなんて言い出すんですよ！今はプライドなんて言ってる場合じゃないでしょう！

次回、プライドの戦い 人造人間18号とベジータ

次回番外編は、ジム戦です！

プライドの戦い 人造人間18号とベジータ

僕たちは、出ていった人造人間たちを追っていった。

しかし、人造人間には気が存在せず、なかなかその姿を確認することとは出来なかった。

そして、時間が流れていった。

すると、偶然にも、父が人造人間を発見した。

「よう。貴様ら。これからどこにいくか、聞かせてもらいたいな」

「孫悟空を殺しに行くんだ」

「そうか。だが、残念だ。その場所に行くことは出来ん。俺が貴様らをぶっ壊してしまいうからな」

「全く。サイヤ人は自信過剰なんだな・・・孫悟空もそうらしいが」

「無理しちゃって。私がやるわ」

18号が構えた。

「俺は女だからといって手加減はせんぞ。といっても、ガラクター人形だからな、女じゃないか」

そついったあと、戦闘が始まった。

しかし、それは戦闘とはとても言いがたい、一方的なものだった。

18号はとてつもない早さで父を弄ぶ。

しかし、父も負けじと必死に戦うが、なかなか勝つことは出来ない。

「サイヤ人の王子が、貴様のようながらくた人形に、負けるかーっ！！」

18号にパンチを繰り出すが、楽々受け止められてしまう。そして、その腕の間接を逆方向にヘシ曲げる。

「うがあああ」

「ぎゃあぎゃあうるさいね」

そういうと、みぞおちに拳を叩き込み、戦闘不能状態にまで追い込まれた。

「父さんっ！」

僕は、父が倒されるのが我慢ならず、飛び出していった。しかし、僕の前に制止する人影が現れた。

「18号とベジータの対一の戦いを邪魔すんなよ」

彼は、どうやら、加勢に行くのを拒否しているようだ。

僕は剣をとり、17号に振り下ろした。

しかし、17号はその剣を白羽取りでとったと思いきや、

バキンッ

剣が折れた。

そのあと、腹部に衝撃が走り、倒れた。朦朧とする、意識のなかで、

「お前が誰かっていうデータはなかったな」

そして、意識が消えた・・・。

しばらくして、仙豆を食べさせられた。

目が覚めると、クリリンさんが仙豆を持ち、みんなを回っている。みんなが目を覚ました時点で、

「いったいこのあとどうするんだ？」

一度姿を眩ました人造人間は、探すのも一苦労だ。さて、いったいどこになにをしいたらいいのか・・・。

「そういえば、あいつらって、人造人間、つまりロボットなんだよな・・・。もしかしたら、研究所にあいつらの強制制御スイッチとあるかも知れない」

「それだったら、俺も手伝う」

「クリリンさん・・・ありがとうございます」

「ベジータはどうするんだ・・・？」

「お、俺が・・・あんな、がらくた人形に・・・」

完全に自信喪失といった具合だ。

気にしないでいい・・・かな？

「ピッコロはいつたいどうするんだ？俺たちと一緒に行くか？」

クリリンさんは何気なく聞いたただだった。

それなのに、ピッコロさんは・・・。

「誰が貴様らなんかと一緒に行動するか！俺はピッコロ大魔王だぞ！この人造人間の戦いが終わったら、真っ先に世界征服をしてやるんだからな！なれなれしくするな！」

そついうと、飛び立ってしまった。

「まだ世界征服を企んでたのか？あいつ・・・」

天津飯さんは、すでにピッコロさんには、追いつけない敵がいるであろうに、どうしてそんなことをいまさら言っているのだろうかと思議になった。

だが、その答えを知ったのは、クリリンさんだった。

「あいつ。もしかすると、神様と合体する気なのかも・・・」

「神様って・・・もともと一人だったっていう・・・？」

クリリンさんは頷く。

もしそうだとすれば、きっとそれはすごい力となるだろう。なぜなら、二人分の力が働いているのだから。

史上最強のナメック星人が誕生する。きっと。

僕たちも、ドクター・ゲロの作った研究所に向かった。

17号たちの、設計図とか、制御装置とか、あると嬉しいな。

《番外ストーリー》

あたしは、この町のジム戦を行おうと、ジムに入った。

新しい仲間、ニドラン[♂]とニョロモ、そして、イシツブテを手にした。

実はあたしは、不安だった。

まさか、キャタピーと二人だけでジム戦をすることになるのかと。

ジム戦は、場所によって、戦い方が違う。

もしかしたら、一対一とかかも知れないけど、どうかはわからない。仲間はほしかったところだ。

ちなみにこのジムは、虫タイプだった。

虫が一番目とは珍しい。

あたしは、虫タイプのジムということで、わくわくした。

だって、タイプ相性よすぎるでしょ。

下手したら、いきなりワカシャモになっちゃうかも知れないし。

「ただいまより、ジムリーダーのタカシ対マオルタウンのユータのジム戦を行う。使用ポケモンは4体、2対2のダブルバトル。始めっ！」

はじめに出されたのは、相手はスピアーとアリアドス。
え・・・アリアドス・・・！？

「いけっ！アチャモ！ニヨロモ！」

ちよちよちよ~~~~~っ！！

あたしアリアドスはNGなんですけど~~~~っ！

プライドの戦い 人造人間18号とベジータ（後書き）

こんにちは、イヴです。

次回はなんと番外編をお送りします。ついにはじまるジム戦。あたしたちに勝利はあるのか？

次回、アチャモ VS アリアドス

「あたしと修行しない？」

〈番外編〉第3話 アチャモ VS アリアドス

あたしは、ターゲットをスパイーにしようとしていた。
あたしがアリアドスNGなのは、当たり前のこと。

だって、転生した初日に襲われたあいつ。

あいつが全部悪い。

だからあたしは、アリアドスNG。

なのに、

「アチャモ！アリアドスにひのこ！」

「え？なんで？」

アチャモが狙えと言われたのは、なんでもか知らないけどアリアドス。

一方、向こうのアリアドスも、

「みだれひつかきだアリアドス！」

と命令をしてきている。

あたしは、

「もう！どうにでもなれーっ！！」

とひのこを繰り出してみた。

効果は抜群のようで、アリアドスには多少たりとも、ダメージは与えられたようだ。

「アリアドス！サイコネシス！！！」

サイコネシスを直に浴びた。

強い念力を送り込んで攻撃する技。

この技を受けたあたしは、酷い苦痛を覚える。

「アリアドス！みだれひつかき！！」

あたしの体に、ひっかくアリアドス。

あたしは、すぐにボロボロになっていた。

もう、どうしようもない、あたしは、弱い自分にはただしさを感じた。

もう少し。もう少しあたしが強かったら・・・。

でも、あたしは所詮、弱いアチャモだ。

主人の期待を裏切った。

そんなあたしが、情けなかった・・・。

『何よあんな。逃げちゃうの？』

頭のなかで声が聞こえる。

『全く。あのときの威勢はどこに行っちゃったのやら』

その瞬間、あたしの力は抜けていく。

しかし、その力が抜かれていく感覚は、まるで眠りの波に飲まれていくようだった。

その瞬間、あたしの視界は、光と共に消えた。

そこは、何もない、真っ白な空間だった・・・。

「なにここ？精神と時の部屋？それとも、シロガネ山？」

「やっと目が覚めた？」

少女の声が、耳に入った。

その声は、頭のなかから聞こえてきた声と同じ……。

……。

……。

……。

ええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！っ！！？

あたしが驚いたのは、その少女の容姿だ。

腰ほどまである、非常に長い黒髪。

同じく、とても綺麗に澄んだ黒目。

肌は白く、しなやかだ。

服装は……、全身真っ黒な服。

そして、尻尾。

あたしは、なにか、わけのわからない衝動に駆られ、それを嘴であま噛みしてみた。

「ひえうつつ！！ちょ……やめ……」

どうやらこの反応は本物のようだ。

ってことは……、このこ、本当に……？

「いやいやいや。おかしいっしょ。だって、二人が同時に存在するなんてー」

「でもここにいるわよ？」

ってか、どうして、アチャモであるあたしの言葉が聞き取れるのか
わからないが、

「いやいやいやいや」。それはない！それはない！だって・・・、
おかしいじゃん！！」

「何がおかしいのよ。あたしはここにいるでしょ？この姿、形。ど
うみたって、サイヤ人、イヴでしょ？」

そう、目の前にいた彼女。

それは、つい最近まで、あたしが使っていた体だ。

そう、なんだか目の前に自分がもう一人いるみたいで、気味が悪い。
・・・。

「まあ、本当のことを言うと、あたしはあんたの細胞を元にした複^ク
製^ロ体^ンなんだけどね」

「複^ク製^ロ体^ン？」

「そ！ドクター・ゲロの研究所にね、いつでも、生体兵器を複製で
きるように細胞を保存してたみたい」

いったいそこからどうやって彼女が作り出されたかは謎だが、あた
しがもう一人いると思えばいいんだ。

「で、本題はこっからよ」

イヴは髪^{トランス}の毛を変身させる。

まさかまたこの技を他人目線で見るとはめになるとは・・・。

髪の毛がアリアドスの形に変化する。

手の平に、乗っかるサイズの小さなアリアドス。

「このポケモンが苦手なんですよ？」

あたしは頷いた。

「でもね。今のアチャモじゃ、どうがんばっても勝てないよね」

小柄なアチャモ。

恐怖に怯えた小物を、捕らえるのは簡単だろう。

「じゃあさ。修行しない？あたしと！」

「へ！？」

「いや」。超サイヤ人に自由になれるようになったはいんだけど、超サイヤ人の壁も越えたいじゃん？だからさ、修行してよ。ついでにあんたも進化の手前くらいにまでパワーアップさせてあげるからさ」

あたしにもメリットがあるんだ。

それならまあ、修行していいかなあ・・・。

でも、あたしが超サイヤ人の相手なんかになるのかなあ？

〈番外編〉第3話 アチャモ VS アリアドス（後書き）

こんにちは、トランクスです。

に、20号が生きていただって!?

え?20号は、本当はレッドリボン軍を恨んでた!?

次回、トランクス対20号 20号とレッドリボン軍

あたしとアチャモの修行も見てね

チャモ~~~~（汗）

トランクス対20号 20号とレッドリボン軍

「ああ。そうだ！」

「どうしました？クリリンさん？」

「一度、カメハウスに行ってみよう。みんなにも、全部説明しておかないと行けないしな」

「そういえば、悟空さんの暗殺があいつらの目的ですしね。悟空さんがいる場所を探すでしょうから。カメハウスにも現れるかも知れませんしね」

僕たちは、カメハウスに行くことにした。

カメハウスには、亀仙人とウミガメさんや、母、チチさん、他には、悟空さんと悟飯さんもいた。

「え！？新しい人造人間？」

「ああ。17号、18号、16号って言うんだ」

「ベジータさんやピッコロさん、僕と天津飯さんでかかってても全く歯が立たなくて・・・」

「そ・・・そんなに強いんですか？」

あまりの驚きで、はじめは全員、声も出なかった。

「そ、それなら、もうどうしようもないんじゃない．．．」

「いま、ピッコロさんが、神様と合体、いや、ひとつに戻ろうとしています。僕はそのかわり、もう一回、ドクター・ゲロの研究所に行きます。もしかしたら、17号たちの研究した設計図があるかも知れません」

いっしょにクリリンさんもついてきてくれることがわかった。

僕たちは出発した。

その研究所は、かなり北にあつて、とても寒いのだが、そんなことをぶつくさ言っている間ではない。

僕らは、研究所に入った。

その研究所は前と変わらなかった。

いや、正確にはあまり、だ。

なんとそこには、ついさつき、17号に倒されてしまったはずの、人造人間20号、つまり、ドクター・ゲロがそこにいたのだ。

「な、何をしにきた。お前ら．．．」

「人造人間たちの秘密を探りに来た」

「残念だったな．．．去れ！それを聞いたからには、わしが貴様らに渡すようなものはない！もしも、ここをどうしても通りたいのであれば、このわしを倒してから行け！」

僕は無言で構えた。

こいつを倒さないかぎり、やはり探させてもらえないだろうとわかったからだ。

「だが、この場で戦うと、下手すれば研究所を破壊しかねない。だから、外に出よう!」

「お前の好きにするがいい」

僕は外へ出た。

そこは、ただの草原が広がる大地だ。

ここには人家もないし、動物もあまりいない。

「行くぞっ!」

「こい・・・」

僕は最初に気弾を打ち出した。

相手がどの程度の強さなのかを確かめるためにも、はじめの一手は大事だ。

しかし、僕は大事なことを知らなかったのだ。

20号は不敵に笑顔を浮かべ、手を開いてつき出す。

その手には、赤い半球体のものがついている。

手で気弾をわしずかみしたあと、僕は信じられなかった。

その気弾を吸収してしまった。

「どうやらお前は、わしの特性を知らなかったらしいな。お前が何者かは知らんしどうでもいいが、これだけは知っておいた方がいいぞ。わしの能力はな、他人のパワーエネルギーを吸収することで、パワーアップするんじゃ」

と言うことから考えると、まさか、気弾も吸収されてしまったのだろっか。

だとすれば、気弾を打ち出すことはできないと言うのか？
仕方がない。

パワーで押して、確実に倒すしかない。

僕は、超サイヤ人になった。

「ほう。貴様も超サイヤ人になれるのか・・・」

僕は超高速で動き回り、相手を錯乱させる。

そして、

「てやつ！」

顔に一発蹴りを加えた。

見事に20号は吹っ飛んでいた。

「許さんぞ・・・。どうやら貴様は、わしの本気が見たいらしいな・
・・・」

トランス
変身！

ゴールド・ハンド
黄金の手！！

トランス
「と、変身！？」

驚いたのはクリリンさんだった。

トランス
「変身？」

「イヴが使ってた、能力のことだ。そういやイヴは、ずっとマスタ
ーってやつに操られてたっていつてたな……。もしかして、マス
ターってのは!？」

「がはははは！正解だ！クリリン。そうだ。
わしが、イヴを改造した。

あいつは、言わば、わしの最初の実験体だ！

だが、わしは、そのとき、イヴに反抗され、一度死にかけた。

だが、わしはまだ生きていた。

ほぼ瀕死状態だったわしは、自らをロボットに改造した。

じゃが、そのあとに孫悟空により、レッドリボン軍を壊滅させられ
た。わしはひたすら、二人を恨んだ。

わしだって、はじめは普通の科学者だった。

だが、ある日に、レッドリボン軍に入らされた。

言うことを聞かなければ、妻と子を殺すと。

わしは、無理矢理、生体兵器を作らされた。

だが、なかなかうまくいかなかった。

そのせいで、家族拉致された。

わしは悔しかった。

だから、二人を殺すまでは絶対に死ぬわけにはいかんのだ！」

どうやら、単なる殺人鬼じゃないようだ。

「わしが、レッドリボン軍を滅ぼすつもりだったんじゃ！無論、イ
ヴも悪くするつもりじゃなかった！それなのに、二人のせいで、わ
しの人生の幸せが、泡のように、泡のように、消えてしまったんだ
！」

20号は涙を流した。

それが真実だとしたら、それはとてつもない、壮大な事件だろう。

「ゲロさん……。それは違います……。あなたも、自由になればよかったんだ。悟空さんたちを恨んでも仕方がないですよ。悪いのはレッドリボン軍でしょ！あなたももちろん、悪くないです。でも、悟空さんも悪くないですよ！だから、お願いします。協力、していただけますか？」

20号の目には、涙が浮かんでいた……。

「わかった。わしができることは、何でもしよう」

二人はしっかりと、手を握ったのだった。

《番外編ストーリー》

あたしはさっそく、修行を始めた。
イヴが

トランス
変身
ビームガン
光線砲

光束ガン
光線砲を作り、あたしに向けてくる。

「いつけえええ！」

青白い閃光、というか、ビームが飛んでくる。

「あつぶな・・・！」

敵として向けられるところも怖いと改めて気がついた。

ス↑パービームガン
超光線砲！！

パワーをあげた、ついさっきと同じようなビームが、大きく、速度を増して近づいてくる。

「ぐう・・・っ」

なんとかかわしたが、あの技が繰り出されると・・・、

ビッグビームガン
「大光線砲！！！！」

あたしは早さに追い付けず、見事に直撃した・・・。

トランクス対20号 20号とレッドリボン軍（後書き）

こんにちは、トランクスです。

な、なんですかあの気は？どうしてフリーザや悟空さんの気があるんですか？そして、こっちの気は誰の気ですか？

次回、悟空の気を持つ者 超ナメック星人とセル

あたしの修行は次回どうなる？

悟空の気を持つ者 超ナメック星人とセル

まず始めに、カメハウスに戻り、現在の状況を説明した。

20号、つまりドクター・ゲロが強い味方になってくれるということ。

そして、17号たちの、緊急停止用のスイッチを作ってもらった。

「今まではすまんだった。これからは誠心誠意で働かせてもらおうぞ」

「なんか、信用してよさそうだな」

みんなも納得してくれた。

ドクター・ゲロはスイッチを作るのにとりかかった。

ドクター・ゲロは確かに、すぐにスイッチを作り上げることに成功したのだ。

「ありがとう。ドクター・ゲロ！」

「なあに、これしきのことなら楽勝じゃよ。それに、お嬢さんもかなり手伝ってくれたしの」

お嬢さんというのは、もちろん母のことだ。

二人もなかなか打ち解けあっているようで、スイッチの完成も、手伝っていたほどだ。

「じゃあ、さつさで行ってきて！こうやるしか、二人を倒す方法なんて、まるっきりないんだから！」

しかし、そんなときに、恐ろしいニュースが流れようとは……。

『こちら、東の都です。現在、こちらの地方で、なにやら、とんでもないことが起きています』

リポーターがずっとそう叫んでいる。

『突然、音信が途絶えた東の都で、いったい何が起こっているのでしょうか？』

それは、とてつもない数の銃声と、そのあとに、いつきに静まり返る音。

『ま、また。静まり返りました。そして、さきほど銃声が響いたところには、服だけが残されています……』

テレビには、確かに、服が、服だけおかれています。

それも、きちんとたたんであるわけでもなく、ぐちゃぐちゃにだ。

『はたして、これはいったいどういうことなので……ぎゃー——っ——！』

そう言い残し、テレビには砂嵐が写った。

「な、なにが起こっているんだ？ちよつと東の都に行ってきます」

「お、おい！大丈夫か？そんなところに行つて！？」

「大丈夫です。そんな恐ろしいことはないでしょう。本当に怖いの

は、人造人間のほうなんですから」

「だけど、やばくなったら逃げろよ！お前も必要な戦力なんだからな」

僕はうなずいて、出かけることにした。

東の都、そこにきつと、なにかがあるのだろう。

たとえば、人造人間がやってくるのか・・・。

しかし、つぎの瞬間、意味の分からないことが起きた。

「こ、これは・・・フリーザの気!？」

確かに、僕が倒したときに感じた気が、僕の間をおうとする、東の都から感じた。

そして、

「まだまだ感じる・・・。フリーザの父親の気、お父さんの気、ピッコロさんの気、そしてこれは、悟空さんの気?」

全員が全くおなじ、一点に集中していた。

これは恐らく、全員が戦っているわけではなさそうだ。

「い、いつたい・・・、なにが起きてるんだ?」

それと同時に、今までは感じたことのない気も、大きな大きな、気が膨張していった。

「やつは誰かと戦っている!誰だ?あいつは・・・。まさか、イヴってやつか?」

「いや、この気は違う・・・」

クリリンさんが、僕に追い付いて飛んできた。

「この気は・・・、ははっ！ピッコロ、超ナメック星人の気だ！！すごい。本当に合体したんだ！」

「で、でも！二人が一人になっただけで、こうも変わるものなんですか？」

「そうさ。きっとそうに違いないぜ」

僕たちは、東の都に、突っ走った。

そこには、なにやら、緑の体に、黒い斑点、さらには赤い口を持った、妙な尻尾を生やしている奇妙な生物と、ピッコロさん、いや、超ナメック星人が対立していた。

「どうやら、本当にピッコロ大魔王ではないようだな」
「では、止めをささせてもらうぞ！」

超ナメック星人は、気を溜めた。

この気は、やはり、ピッコロさんではないようだ。

「な、なにものなんだ？あいつは・・・？」
「詳しい話はあとだ！！！」

しかし、あいつには、得策があった。

「今のままではお前たちには到底敵わないだろう。だからここはひとまず退散させてもらうぞ」

そういうと、

「太陽拳！！」

頭が突然、発光し、目をくらませた隙に気を消して、どこぞへと逃げていった。

「くそっ・・・逃げられた！」

《番外編ストーリー》

あたしはみるみる成長していった。

「かえんぐるまっ」

主人がいないので、あたしは自分に指示を出す。

体が炎で燃え上がって、回転をする。

かえんぐるまはあたしの得意技となった。

「うんっ。だんだん強くなったね。そろそろあたしの練習も、はじめてもらおうかな」

そうだ。

今まではサイヤ人として修行してたのだが、今から、超サイヤ人になる。

「超本気でいかせてもらおうから！覚悟してよね！」

超サイヤ人は、とてつもなく殺気だった状態だった。

「だったら、行くよ！」

トランス
変身

スーパービームガン
超光線砲！！！！

その勢いは、超光線砲なんていうものじゃない。

かえんほうしゃ！

かえんほうしゃの勢いでは足りず、やられる。

「っ、つよい・・・」

雷鳴豪豪刀を作り上げ、

「斬れちゃうと危ないから、ちゃんとかわしてね！」

稲妻ラッシュ！！！！

「うわあああああああああ！！！」

連続して斬撃が襲ってくる。

「あつぶないっっっ！」

「よけないと当たっちゃうよっ！」

そんな感じの、乱暴な修行が、しばらく続いた・・・。

悟空の気を持つ者 超ナメック星人とセル（後書き）

こんにちは、トランクスです。

あの怪物は何ですか？人造人間と関係があるんですか？

次回、細胞戦士セル 吸収される人々

30年たってるって、どういこと〜？

細胞戦士セル 吸収される人々。

ピッコロさんはさっきの怪物の正体を説明した。

「あいつは、トランクスから来た未来の、さらに三年後からやってきた怪物だ。さまざまな武闘家の細胞をあわせた、究極の戦士だ」
そうだ。

そしてさらに、

「17号、18号を吸収すれば、さらに完全な状態になり、この世界で一人としない存在になれるらしい」

ということは、もしかすると、

「17号や18号よりも、恐ろしい敵だと言うことですか」

もつとまずい敵が増えていくのはまずい。

「人造人間をさきに破壊してしまいましょう！」

「いや、さきにセルを倒してしまうほうが破壊だろう」

選択肢は二つあった。

一つはセルを弱いうちに本気で倒してしまい、あとあとに17号と18号を倒してしまう手。

もう一つは、17号か18号のどちらかを、緊急制止用のスイッチを使って、とめて、破壊してしまう手。

これらのうちのどちらかだ。

「それなら、両方を同時にするぞ。天津飯、クリリン、トランクスはセルを倒しに行け。俺は人造人間を破壊しに行く」

「わかりました。くれぐれも気をつけてください！」

僕は、セルを倒すために、逃げていったのであろう場所に行った。しかし、その場にあったのは、服だけだった。

男も女も、子供も老人も、関係なしに吸い取っていったようだ。服以外は、血以外何もなかった。

吸収すれば吸収するほど、パワーをあげていく。

ただの一般人、戦闘力、1〜5くらいのものを吸いとったって、力はない。

だが、徐々に溜まっていった力が大きくなったら仕方がない。

今のうちに、悪い根は摘んでおかなくちゃいけない。

でも、なかなかセルは見つからなかった。

気を消す能力を持つ彼は、探すのに手こずった。

僕以外の全ての人たちは、かつて、気を消すことが出来ない敵も多かった。

なのに、彼は違う。

ある意味、僕らと同じ人間が敵なのだ。

はつきりいつて、やりにくい。

攻撃の瞬間に気を溜めて、それをいつきに放出する方法が、パワーを一点に集中するから、戦いやすい。

それは、僕たちが一番よく知っているのだから。

「ちくしょう。何処にもいないじゃねえか」

「そういえば、ニュースでも話題になってましたね。もしかしたら、テレビを見たら、セルの居場所もわかるかも知れませんか」

僕たちは一度、戻ることにした。

テレビではどのチャンネルでもセルのことで持ちきりだった。

『突然、服だけを残して消える事件は、10以上の市町村で、行われていることがわかりました。被害にあった町には、一人すら残っておらず、現在、国際警察は事件の真相を探し当てています』
とのことだった。

「セルはこのまま、世界滅亡まで人を吸い続けるつもりなんですよ
うか？」

「知らんが、いいことは起こらないってのは確かだよ・・・」

わからないが、とにかく、セルの活動場所さえわかったら、それだけいい。

「こ、この気は・・・セ、セルの気だ!」

突然、大きな気が飛び出した。
それは、ピツコロの近くだ。

「さ、最悪だ!」

「ピッコロが危ない！」

僕たちは、その場所に向かっていった。

《番外編ストーリー》

あたしは、必死に動いていた。
稲妻ラッシュにも負けない動きで移動し、最終的には、イヴにかえんぐるまを放つことができた。

「さっすがあたし！成長早いね〜」

「そういうのを、自画自賛って言つのよ」

休憩もかねて、食事中。

とりとめもない話をしていた。

「ああ。そうそう。あんたさあ、もう、レベルアップ寸前までパワーアップしてるのよね。悪いけど、これ以上修行すると、やりすぎになっちゃうわ」

「ってことは、もうユータのところに帰れるの？」

「・・・・・・・・。そんなにユータが大事なんだ」

「まあね。恩返ししたいからね」

イヴは、なんか、ばつが悪そうにしている。

「あゝ。あのさゝ。ここ、実はいうと・・・あんたのいる世界とは少し、時間の経過が違っただよね・・・」

あたしには、理解が出来ない。

あたしの複製体クローンのくせに、あたしよりかしこいて・・・。

「あゝ。つまり・・・、この世界で一日過ぐすと、向こうの世界で一年たつんだわ・・・。あんた、ここで一ヶ月くらい修行したでしょ・・・？つまり、30年たっちゃったんだよねえゝ。ごめんねゝ」

あたしは、耳を疑った。

いや、そのまえに、あいつ、イヴを蹴っ飛ばした。

「ご・・・ごめん・・・。言ってなかったね・・・。思いっきり忘れてたの」

「・・・・・・・・くつ。どうやって帰るの？そこは？」

「ん・・・・・・・・つと。今から準備するから」

さすがに焦りを感じた彼女は、急いで準備を始めた。

「全ての世界の神よ・・・。この者を、本来の世界へお送りください」

そういつと、あたしの体は急に輝きだし、消えてしまった。

「ふう……。頑張れ。あたし！」

細胞戦士セル 吸収される人々。(後書き)

トランクスです。

ついにセルが17号を吸収しちゃいましたよ！そして18号も狙われてます。

え？20号がセルと戦ってる！？

次回、17号ピンチ！！ セル完全体！！

頑張れ、あたし！！

17号ピンチ！！ セルの完全体！！

僕がそこについたとき、セルは17号と戦っていた。

「私は貴様を吸収すれば完全なる戦士になることが出来るんだ。貴様の体は、我が細胞と一つになる。貴様も、私の役に立てるのだ」

「へっ。お前みたいな怪物野郎に吸収される筋合いなんかねえ。それにすでに完全な戦士なら、ここにいるからな。お前はここで、おとなしく殺されてる！！」

17号はセルに戦いを挑んだ。

しかし、人々のパワーを吸収したセルは、以前よりも格段にパワーがあがっていた。

「ちっ。倒さなくてはいけない敵をかばうことになるとはな」

ピッコロさんは、魔貫光殺砲の準備をしていた。

この技でなければ、おそらくセルを倒す手はないだろう。

17号はたしかに強い。

だが、セルにはどうしても勝つことは出来ない。

「この怪物やろう！」

「これからこの怪物やろうと団体になれるんだぞ」

セルは、17号の首を掴みとると、その尻尾のさきを、大きな口のような形に変えた。

「さあ、吸収してやる！」

17号の顔をそれに突っ込むと、みるみる17号が、吸収されていた。

「やめろおおっ！助けてくれえ！！」

17号の声が、かすかながら聞こえたが、時はすでに遅かった。

「うわああああああああああ！！」

これが、17号の最後に発した言葉となった。

セルの体に変化していった。

顔は人間っぽい体になつた。

手足もより人間のそれに近くなつたが、体型は、ふとっていた。

気はとてつもなく増大して、セルと17号を、まさしくあわせたような力を持っている。

「さあて。あとは18号だけだ」

「これ以上吸収されてたまるか！」

ピッコロさんが、セルの前に向かった。

「お前。自分が今の私に勝てるとも言えるのか？」

「さあな・・・」

「さっさと死んでおけ！」

セルは、ピッコロさんに猛アタックをしかけた。魔貫光殺砲を、油断したところで放ったのだが、セルに軽く受け止められた。

「残念だったな。私の勝ちだ」

セルの圧倒的パワーに屈して、ピッコロさんは、海に投げ出された。そこに、なんと、スイッチを持った、ある人物がやってきたのだ。

「やめんか！セル」

「ドクター・ゲロ！？」

そこにいたのは、スイッチを手にしたドクター・ゲロ。きつとそのスイッチは、18号を停めるための、強制スイッチだった。

「これを使う気でいたが、今ではつきりとわかった。貴様は我が目的、孫悟空の暗殺で動いているのではなく、完全体になること。それを目標をしている。つまり、まだ完全体じゃない貴様など、まだたいして強くないということだ！」

「じじい。言わせておけば、なかなか言うじゃないか・・・。だったら、その場ですぐに天国へご招待してやる！」

セルは、見覚えのある構えをとった。
それは、亀仙人の代からの、亀仙流の最高技、そして、誰しもが覚える技だ。

「か・・・め・・・は・・・め・・・この技を使うのは、貴様がはじめだ。産みの親をこの技で倒せるとは、とっても嬉しいよ。じやあ、とどめをささせてもらおう。波ーっ!!」

かめはめ波は強烈な勢いでゲロに向かっていく。

「かかったな!!」

ゲロは両手をつき出す。

どうやら、セルは、ゲロがまたの名を20号といい、他人の気を吸収して、自分のパワーとして使うことを知らないらしい。

「なに!?! かめはめ波が吸収されるだ!!」

「わしが人造人間に改造していたことまでは、ご存じなかったようだな。それでは、わしが貴様にとどめをさしてやる」

20号の手から、気攻波を打ち出す。

「ぐあぁっ!!」

セルの体が、ばらばらに砕けた。

「ようやく終わったな・・・」

「あとは、18号だけだが・・・」

僕はちらつと18号を見た。

戦闘体制をしっかりとっていた。だが、

「勝手に人を殺したことにしないでもらおう」

セルはもちろんまだ生きていた。

それも、軽く気を増幅させて・・・。

《番外編ストーリー》

あたしの体が光輝いて、突然消える。

あたしの視界は、白から黒へと変わった。

あたしはどうやら、瞼を閉じている。

ゆっくりと目を開けた。

「アチャモ・・・、目を覚めたのか！？アチャモ！！！！」

そこには、少し白髪の混じった髪の毛を生やした、中年のおじさんがいた。

「やっと、やっと目を覚ましてくれたんだな。俺は、ユータだ。覚えてるか？」

「うんっ」

「そうか。よかった。お前が突然倒れてから、トレーナーをやめて、ずっと、看病していたんだ。本当に、本当によかった」

よく周りを見渡すと、そこは病院、それとも、ポケモン専門の治療室だろうか。

そんな感じの場所にあたしはいて、あたし以外にも、看病されているポケモンがたくさんいた。

「ごめん。ユータ。あたし、あたしは、あなたに助けてもらったのに……あたしは、助けられてばかり……」

「よかったな。これでまた、旅を続けられる」

ユータはそういい、あたしをぎゅっと抱き締めてくれた。

あたしは、ユータに、言葉で意思を伝えることが出来ない。

もし、それができたのなら、あたしはこれほど幸せなことなどない。

あたしはもう一度、旅を始めることにした。

17号ピンチ！！ セルの完全体！！（後書き）

トランクスです。

いよいよ修行。お父さんと修行をします！

イヴです。

べ、ベジータさんにいることがバレちゃいました。俺と戦えみたいなこと言われるし！！

次回、精神と時の部屋

ベジータとトランクスの修行

精神と時の部屋 ベジータとトランクスの修行

「私にはもう18号など必要ない。ピッコロ大魔王の能力で完全復活したあと、サイヤ人の能力でパワーアップしたからな。つまり、今の私は、そこらの超サイヤ人より強い！」

たしかに、気を感じた限りでは、17号を吸収した直後のときのセルや、悟空さん、父と比べても、今の方が、気が強い。それに、まだこれは完全な力ではないようだ。

「これが完全体か・・・この力を試したい。誰か相手になれるやつはいないか・・・」

全員が黙りこんだ。

今のままでは、誰も、絶対に勝てないだろう・・・。

「よし。あと9日。猶予を与えてやる。そのあと、私と一緒に天下第一武道会を行おう。ルールは、一対一で私と戦い、殺されるか、まいったといえ、それで終わりだ。なお、最後まで私が残った場合、地球はもう無くなるだろうがな」

セルはそれだけをいうと、いなくなっていた。何人もが、腰を抜かして倒れている。

「あと9日だと？どうしようもない。あと9日じゃ、どう頑張っても強くなれないだろ!？」

「いや。あるぞ・・・あそこなら1日で、1年分の修行が出来るぞ」

はい？

僕にはさっぱり意味がわからなかった。

このあと、悟空さん、父、悟飯さん、そして僕とピッコロさんで、作戦会議が行われた。

「精神と時の部屋がある」

「ああ。たしかにあそこなら、1日で1年分の修行が出来る」

「二人ずつしか入れないから、親子で順番に入れ。ベジータとトランクス。悟空と悟飯だ」

サイヤ人のバトルスーツを着ながら、僕は父を見た。

この父のことだ。

いったいどんな修行をするのだろうか。

「悟空さん。おさきに失礼します」

「ああ。頑張つてこいよ」

そこは、ただの真っ白な空間だった。

「ほう・・・これはいい。これなら、誰にも邪魔されずに、超サイヤ人の壁を越えられそうだ」

父は大丈夫そうだったけど、僕は正直いって不安だった。

「こんなところで、お父さんと1年も」

これからは、厳しい修行になりそうだ。

ちよちよちよつと。

急に開いた扉。

そのなかから、二人の男が現れた。

あたしはその二人に見覚えがある。
なぜなら、

「トランクスとベジータ・・・」

向こうのストーリーも順調に進んで、ようやく精神と時の部屋の修行まで来たらしい。

あたしは裏側へ回って隠れた。

あたしはイヴではあるが、複製体だ。
クローン

本物じゃないから、このあと、セルと戦うわけにはいかない。

彼女、つまり今のアチャモが、世界を救わないと、なにも起きないのだ。

あたしが精神と時の部屋にいるって知ったら、悟空もびっくりするだろう。

説明しよう！

どうしてイヴが精神と時の部屋にいるのか。

精神と時の部屋は、簡単に説明すると異次元空間。

いろんな世界の境目なのだ。

だから、ポケモンの世界や、ドラゴンボールの世界。

そして、普通の世界があるのだ。

そこでの時間の経過はそれぞれ違うので、ドラゴンボールの世界では、この部屋に1年いると、外の世界で1日分使ったことになるのだ。

と、軽く説明は終わった。

あたしは、変身^{トランス}で姿を隠して、様子を伺うことにした。

僕は今、超サイヤ人を越える修行をしている。

簡単にいうと、父との組手と、気を増幅させる練習だ。

「脇が甘いぞ！トランクス！！」

父はつねに本気でかかってくるので、普段僕は押されぎみだ。

「あとは、自力練習あるのみだ。あとは自力で、壁を越えるんだ」

そういうと、遠くにいつてしまった・・・。

あたしはずっとちよつと遠めから、二人の様子を伺っていた。
でも・・・、

「おいパリカ！そこでさつきから何をやってるんだ？」

「ほへ！？」

しっかりとバレていた・・・。

――なんか前にもこんなことあったような――

「って、どうしたんです？トランクスさんと修行しないんですか？」

「ありゃあダメだ。これまで一人でしか修行をしたことがないからな。勝手がわかっていないらしい」

「へえ・・・」

「お前はそれに引き換え、実践豊富だ。まあ、カカロットと同じで、甘いという弱点はあるがな・・・」

「いやいやいや。今までのあたしの行動見てたでしょ？トランクスさんにバレたりしたら不味いですよ」

「貴様のことだ。なにかそれもバレないように出来るんだろう」

なんとも無責任な信頼と言うか・・・。
まあいいですよ。

あたしたちは、異次元に向かった。

その次元は、破れた世界。

ポケモンに出てくる、この世の裏側だ。

「ここならわからないというわけか」

「まあそうですよ」

あたしとベジータは、戦いを始めた。
それはそれは、壮絶なものだったが。

（トランクスさん。かわいそうに・・・）

《番外編ストーリー》

あのー。上でとんでもない状態になってましたが、大丈夫ですか？

今回は、特に書くことはない・・・。

ああ。草タイプのジムリーダーに挑んで、あたしがワカシャモになつたくらいかな。

すごい体が身軽になったよ。
本当に。

精神と時の部屋 ベジータとトランクスの修行（後書き）

こんにちは、トランクスです。

セルゲームの予選だって！？ あの小さなジュニアと戦うのか！？

次回、セルゲーム予選 トランクス対セルジュニア

あかい ギャラドス が あらわれた

あかい ギャラドス の はかいこうせん

ワカシャモは たおれた！

セルゲーム予選 トランクス対セルジュニア

しばらくすると、トランクスのところに戻っていった。

「うーん。あのトランクス、どこかで見たことがある気が・・・」

僕は、やっと超サイヤ人状態での強化に成功した。
これなら、相当強いはずだ・・・。

「カカロット。お前が超サイヤ人を越えられるかわからんが、楽しみにしておいてやる」

お父さんは、自信たっぷりに答えた。

本当に、超サイヤ人を越えることが出来たらしい。

僕も越えられたと思う。

きつと・・・。

悟空さんが1日後に出てきた。

「超サイヤ人の状態が普通になるようにした」

と悟空さんは言っていた。
僕たちと修行の仕方を変えたのだ。

「おい。ベジータ。なかに何でイヴがいるんだ？」
「さあな。きつとまたなにかを隠してるんだろう」

悟空さんとベジータさんがこそそと話しているけど、まあ気にしないでいいだろう。

一週間後、僕たちはセルゲームの会場に向かった。

天下一武道会風に設置されたフィールドは、そこそこ広く、なかなかの戦いが出来そうだった。

「ほう。なかなかの人数が私のために集まってくれとは。うれし
いね」

セルは余裕の笑みを浮かべる。

今、ここに集まっているのは、悟空さん、悟飯さん、天津飯さん、
ヤムチャさん、お父さん、18号、16号、ゲロさん。

そして、ミスター・サタンという、格闘技世界チャンピオン。

「おい。悪いことは言わねえから、やめとけ！殺されるぞ！」

悟空さんがそうミスター・サタンにいったのだが、全く耳をかさな
かった。

「まあまあ少し待て。せつかくこんな大人数で集まってくれたんだ。予選を行おう」

セルは、まるで自分に勝てるものなどいないかのように発言した。

「これから私の子供を作る。その子供に勝つことが出来ただけ、私と戦う権利をあげよう」

セルはそういうと、さっき、17号を吸いとったところから、卵を作り出した。

その卵から出てきたのは、セルを小型化したような、小さな生き物だ。

「こいつは私のパワーの半分程度はあるはずだ。一人ずつ、この子供たちの相手をしてやってくれ」

この小さなセル、セルジュニアは、一匹ずつ、戦いに向かった。僕にも一匹のセルジュニアが向かってきた。

僕はパンチを繰り出す。

軽やかな動きでかわしたセルジュニアは、僕の頭に回り、蹴り飛ばす。

あの小さな体のどこにそんなパワーがあったのか、僕は吹っ飛んだ。

「ちっ！」

僕は超サイヤ人となり、本気モードになった。

僕の怒濤のラッシュを、次々とセルジュニアはかわしていった。そしてセルジュニアは、

「か・・め・・は・・め・・波！」

かめはめ波まで使ってきたのだ。

もしも僕がよけたら、後ろの人に当たる心配も考えられる。

「か・・め・・は・・め・・波！」

僕もかめはめ波を繰り出して対抗した。

なんと、二つの気は、そう強さに大差なかったらしく、両方とも相殺された。

再び、パンチとキックのラッシュが繰り返される。

「くそつ。これじゃキリがない。終わらせてもらっぞー!!！」

僕が修行中に編み出した、最高技を繰り出そうと構えた。

「hopeキャノンッ！」

手を上にあげて、青色のスパークを纏った気弾を作り出した。

それを、セルジュニアに投げつける。

セルジュニアはよけるのに間に合わず、粉々に粉碎した。

「よしっ」

辺りを見渡すと、悟空さんと悟飯さんが、ヤムチャさん、天津飯さんたちの手助けをしていた。

セルジュニアは超サイヤ人レベル。
普通に戦えるレベルじゃないからだ。

「今、両足でしっかりと立っている人間だけが、私と戦える権利を得たわけだ」

「オラがお前を倒す」

悟空さんが、先頭に立った。

《番外編ストーリー》

あたしは今、ある湖に來ています。

何でも、この湖には結構強いポケモンがいるらしい。

水タイプは苦手なあたしだけど、にどげりやメガトンキックとかを使えば勝てるかな。

結果、なぜだかすごく強いコイキングやギャラドス。

さらにドジョッチやシーランス、サニーゴ、アリゲイツ、オーダイ

ル、ヌマクロー、ラグラージ、いろんなやつと戦った。
その度に勝つことが出来たのだ。

あたしのメガトンキックの勢いは、どんどん強くなる。
それなのに、突然脅威が襲った。

現れたのは、赤いギャラドス。

でも、ここは怒りの湖などという名じゃないのに。

赤いギャラドスは、あたしに向かって、はかいこうせんをぶちまけたのだ。

「ぎゃあああああああああああああ……!!」

あたしやユータ、さまざまなポケモンが、海に落ちていった。

セルゲーム予選 トランクス対セルジュニア（後書き）

こんにちは、トランクスです。

ちよつと！やめてください！自爆するなんて、それはないですよ！

許さないぞ！セル！！

次回、全てを越えた！ 16号の死と超サイヤ人2

あかいギャラドスだー！！！！！！！！

全てを越えた！

16号の死と超サイヤ人2

僕は、孫悟空さんのパワーに驚いた。

僕の、何倍もあるパワーだ。

どうしてここまで変わるのでしょうか。

確かに僕は、超サイヤ人を越えた。

まだ上には上がいるんですね。

――ここに特に活躍する間はないので、しばらく短縮――

「わかった。おめえの強さはよくわかった。だからオラはもう、このへんでやめとく」

「しょ、正気か！？」

セルは仰天した様子だった・・・。

このまま場外で負けたりしたらおもしろくないと、リングを吹き飛ばし、大地全てをリングに変えてしまった。

そうまでしたのに、悟空さんは、降参し、まいったと、敗北を決意したのだ。

「次に戦うやつを、オラが決めていいか？」

「お前が諦めて、そいつに託すとは、そいつはお前よりも強いというのか？ だったら指名しろ、そのあるはずもない名前を！」

「ああ。悟飯！ おめえの番だ！」

悟空さんが指名したのは、なんと、悟飯さんだった。

みんなが悟空さんを批判した。

悟空さんの意見には、何か確信があるようだが、実際に悟飯さんは、なかなか勝つことが出来ない。

セルにどんどん押されていつている。

「お前の父親も薄情だなあ……。まあ、恨むならあの父親を恨め。あの馬鹿親父をなあ！」

「やめろお~~~~っ!!!!」

とどめをさそうとしたセルに向かっていったのは、僕と、16号だった。

16号は、セルに向かい、ロケットパンチを繰り出して、腕からビームを食らわせた。

「ヘルズクラッシュ!!」

と彼は言っていた。

セルの周りに砂嵐が舞い上がり、見えなくなったとき、16号は後ろに回り、セルを後ろから、がっしりと掴んだ。

「孫悟飯。ありがとう。セルはたしかに強かった。だが、植物や、動物、そして人間を次から次へと抹消していった。俺は植物や、鳥たちが大好きだった。これからは、孫悟飯。お前が、植物や、鳥たちを守ってやってくれ」

「16号さん。な、何言ってるんですか？」

「……俺の体内には、強力は爆弾が仕込まれている。この距離で

爆発されれば、欠片も残らなくなるはずだ」

「そ、そんなこと……しなくても……」

「心配するな……俺は人造人間だ。命など、もとより存在しないだが、17号や18号は、人も動物も、一切殺しはしなかった。いやつだった。あいつらは元々人間だった。だから、あいつらを殺すわけにはいけない。だから、俺が犠牲になる。……さらばだ！」

16号の体内は赤く輝きだし、跡形もなく爆発した……。しかし……、

「この私が、そんな爆弾程度で死ぬはずがないだろう」

「そ……そんな……！」

「16号さんが……16号さんが……決死の……覚悟で……許さん……許さんぞ……セル……！」

「俺も許せん……許さんぞーっ……！」

僕と悟飯さんの怒りは、最大限を越えた。全身の気から、電気がパチパチと鳴り響く。

超サイヤ人を本気で越えた、超サイヤ人2の完成だ。

「な、なんだと……」

「終わりだ！セル！」

僕と悟飯は向かっていく。

セルもそれに何とか応戦するが、全く歯が立たず、一撃で吹っ飛んでいく。

「こ、こんなことが・・・！」

「お前の負けだ！セル！！！」

《番外編ストーリー》

あたしは、わけのわからない世界にいた。

縦でも横でも、上でも下でも、地球でも宇宙でもない、どこかの空間にいた・・・。

あかいギャラドスにやられ、海のなかに消えていった・・・。

もしかしたら、死んでしまったのでしょうか？

いや、息もできるし、わっかも羽もない、それはきっと違うと思う。そこであたしは、とんでもない生物を見た。

「ギャオオオオオ！」

それは、まさしくダークライ。

それも、やぶれたせかいでもフォルム。

まさか、まさか、マジで、マジで・・・！？

やぶれたせかい！？

いやいやいやいやそれはマジでない！

おかしいしょ！？

なんで、やぶれたせかいにいるの？

あたしに、気がついてしまったみたいで、ギラティナはまっすぐこちらに向かってきた。

そして、あたしに言った・・・。

「其の者よ・・・。この世界の者ではないな・・・。人間の気配が感じられる」

ギラティナの特性は、プレッシャー。

喋るだけで、ピリピリと感じる・・・。

「そ、そうっすか・・・ま、まあ、そうでしょうね・・・、この体になる前は、イヴって名前のサイヤ人だし・・・。その前は・・・確か・・・名前が・・・、思い出せないけど、普通の一般人だったし・・・。」

「なるほど・・・それはきつと、パルキアのせいだ。だが、ここは色んな世界の狭間だ。それが、破れた世界と呼ばれる由縁。もしかすると、ここも関係なくはないかも知れない。別次元の人間を呼び

「寄せることも可能だろう」

「そ、それなら、呼んでほしい人がいます!」

「ほう。それは誰だ!？」

「イヴです。イヴという、サイヤ人を呼んでほしいです」

「わかった」

やぶれたせかいに、大きな穴があき、徐々に、世界が染色されていた。

「うわっ・・・!」

中から現れたのは、

「イヴ・・・!」

「ワ、ワカシャモ・・・!？」

あたしたちは再開を果たした。

そして、イヴに、今までの経緯を話す。

「なるほど・・・そういうわけだったのね・・・」

「そうだ。恐らく、お主の精神とが同じものだったならば、再び合体し、あちらの世界の者たちも救え、そのうえ、また、自らの世界に帰ることも恐らく可能であろう」

「そんな裏技みたいなことも可能なんですか・・・？」

「ああ。しかし、お主のパートナーである、ユータと別れをつげなくてはならぬ・・・」

「あ・・・!!」

「しばらく、黄泉の国へ送ってやろう。黄泉の国には、かつて死したものが、次元を越えて集まる。そのなかに、恐らくユータもいるはずだ」

あたしの回りに穴があき、どこかへ、黄泉の国へ飛んでいったのは、そのしばらく後だった・・・。

全てを越えた！ 16号の死と超サイヤ人2（後書き）

こんにちは、ワカシャモです。

黄泉の国に行ったあたしをユータは待っていてくれました。ありがとうございます。そして、さよなら！

次回、黄泉の国のワカシャモ

ありがとうユータ。

〈番外編〉第5話 黄泉の国のワカシャモ

あたしが飛ばされたのは、黄泉の国。

もつと簡単にいうなら、天国、極楽と呼ばれる世界。

死した者の魂が、実態を持って暮らす世界だ。

その空間には、さまざまな次元のものが現れる。

「ユータあ！ユータあ！」

あたしは、必死にユータを探した。

と、いうか、ユータはなんで黄泉の国にいて、ギラティナは知っていたのか。

どんどんあたしは不安になっていった……。

こんなところに、本当にユータはいるのだろうか……？

「ワカシャモ……？ワカシャモ！」

その声の主は、ユータ。

その人だった。

「ワカシャモ。本当に、僕のワカシャモかい？」

「うん。そうだよ。あなたの、あなたのワカシャモだよ」

「へえ……あの世じゃあ、ポケモンと話すことも出来るんだね」

ユータは、あたしの言葉を理解しているようだ。

「また会えてうれしいよ。ワカシャモ……。もう二度と、会えな

いかと思った・・・」

「そんなこと。絶対はないよ・・・でも・・・」

「どうしたんだ？」

あたしは悩んだ。

この世界の人間ではないあたし。

まだあたしは、生きることだってできるのだ。

それはもちろん、ワカシャモとしてではない。

別の人間、それに、別の世界の人間として、生きるのだ。

再び、ユータと顔をあわせるときには、すでに、ただの人間となっているだろう。

「なにか・・・話さないといけないことがあるんだな・・・？」

「うん・・・。あたし、実はいうと、この世界、ポケモンの世界の者じゃないんだ。別の世界の人間なの。どうしてかはわからないけど、ポケモンの世界に入っちゃって・・・。あなたは、あたしのことを救ってくれた。一生、あなたに着いていくって、決めてた。でも、まさか、別れになるなんて・・・。もしかしたら、あかいギヤラドスも、そのせいなのもかもしれない。ごめんね。巻き込んだやつて・・・」

「いや。気にしてないよ。そうだったんだね。今まで楽しかったよ。ありがとう。僕は、君の、心のなかに、永遠にいるつもりだよ。君の世界も見てみたいんだ」

「ありがとう。うれしい。最後に、あなたの思いだけ、伝えておきたい。あたしは、あなたに救われたの。ポケモンの世界に来てすぐ

のとき。あたしは、あるポケモンに、縄張りに侵入したのを理由に、とてつもない暴行を振るわれたの。そのあと、お腹を空いて倒れていたときに、助けてくれた。あなたが。だから、あなたの恩義に報いたって思ったの。本当にありがとう」

深々と礼をした。

すると、頭のなかで、声が聞こえた。

「ユータとの別れはすんだようだな。では、お主を元の世界に、ではなく、とりあえず、ドラゴンボールの世界へ写す。そのとき、イヴと一体化をしてもらう」

「わかったわ。ねえ、ユータとは一体化できない？」

「悪いが、死んだもの、つまり、魂だけの者を一体化させることは出来ない」

「そう……。じゃ、もう、いくね」

「ああ。また、いつか会おうな」

「うんっ」

あたしは、真っ白な光に包まれて、消えた…………。

イヴと一体化して、やってきたのは、ドラゴンボールの世界。

この大きな気は、たぶん、セル。

それと同じくらい、いや、それ以上に強い二つの気。

片方は孫悟飯だろうと分かる。

なんで、ここまで、パワーアップしているのだろうか。

とにかく、あたしはそこに向かうことにした。

あたしも、自分の力を試したい。

舞空術を使って飛び立った。

〈番外編〉第5話 黄泉の国のワカシャモ（後書き）

こんにちは、トランクスです。

え？またセルが蘇っただと？大変ですよ！またパワーが上がってるみたいです

次回、セルゲーム完結 トランクスとイヴ

あなたとは、〇〇です。

セルゲーム完結 トランクスとイヴ

僕らは、圧倒的な力で、セルにうちかっていた。

パワーにおいても、早さにおいても、全てにおいて、うちかっていた。

だが、僕はとどめをささなかった。

「もういいっ！お前ら！早くセルにとどめをさせ、これ以上追い込んだら、何するかわかんねえぞ！」

「どうしてですか・・・？」

「こんなやつは、もっともつと痛め付けないと、お父さん！」

僕と悟飯さんは、間違いなく、この強さに酔ってしまった。

あまりにも膨大な強さに。

これでは、勝てないのは当たり前だ。

「ゴ、ごおなつたら！自爆する！私は自爆してやるぞ！」

怒り狂ったセルは、ついに、究極の方法に手を出した。

これで、最終的には相討ちに終わらせることができる。

ついでに地球も粉々に破壊できるから、一石二鳥だ。

しかし、セルが自爆の用意をする少し前、突然、セルの視界がぐらつき、そのまま消えた。

「まったく・・・自爆なんてとんでもない方法、するんじゃないよ」

そこには、僕は見たこともない、女の超サイヤ人が、立っていたの

だ。

あたしは、セルが爆発すると言い出したときに、その場に飛んでいた。

下手するとバレる危険性があるから、気は消して、翼で飛んでいたが。

アチャモとの修行の力で、たぶん本気を出したら、超サイヤ人2になれるだろうほどの気が備わっている。

悟飯と、恐らくトランクスは、すでに超サイヤ人2となっていた。だが、余裕をつけ、セルを追い込みすぎた。

あたしが咄嗟に、飛び出てナノスライサー粉々にしていなきゃ、きっと大爆発を起こしていただろう。

「悟飯さん。さっさと倒さないとだめじゃないですか！」

「い、イヴさん・・・？本当に、イヴさんなの？」

悟飯が、あたしを見て、そういい続けている。

まあ、急に現れたのは、ちょっと悪かったかなとは思っよ。

「ちょっといろいろあっけど、なんとか戻ってこられたのよ」

「よかった。死んじゃったのかと思って、すごくみんな心配してたんですよ」

心配かけたのは、本当に申し訳ないと思っている。

まあ、セルを倒したってことで、勘弁してはもらえないですか？
って、言おうとした次の瞬間だった。

「あ………っ！」

あたしの心臓部に、一筋の光が貫かれた。

「う……っ！」

あたしが倒れるのも、それからすぐだった。

「今のが当たったのは誰だ？」

その声の主の方向にいたのは、完全にパワーアップしているセル。

「残念だったなあ。私はあんなことでやられはしないぞ。私の頭には、小さな核のような細胞がある。それさえ破壊されなければ、一生復活し続けるのだ」

「な、なに……？」

ナノマシンは細胞を分断させて斬ることが出来る。

それでも、細胞自体を斬ることは出来ない。

「おかげでパワーアップもさせてもらったからな。あいつにはお礼をさせてもらった」

セルの気は、前よりも格段に大きくなっている。

「へっ。そんな程度でパワーアップだと？ほざくのも大概にしても

らおうか。お前は、絶対に倒す！」

「面白い。決着をつけてやろう」

悟飯が構える。

二人の攻撃は、とてつもない強いパワーの繰り返しだった。

「どうだ！これがパワーアップした私の力だ！」

「ふん。パワーアップでその程度か。だったら、楽勝だな」

「な・・・！？」

「本気でいくぞ」

悟飯は気を高め、今までよりも強烈なラッシュを浴びせた。

セルはそのラッシュに追い付くことが出来ず、そのまま、ラッシュを受け続けた。

「ぐ・・・っ。私の力は、まだ、足りないというのか・・・！」

「もう面倒だ。今すぐとどめをささせてもらおう」

悟飯の構えは、かめはめ波のポーズ。

圧縮された気が、どんどん膨らみ、手のなかで溢れていく。

「か・・・め・・・は・・・め・・・波あつ！」

かめはめ波は、かつて見たこともない、猛烈な勢いで、セルに向かっていった。

「うがぁ・・・!!」

セルは、跡形もなく、消えていた。

そう。孫悟飯は、地球を救った。

一人の犠牲者も生まずして・・・

「イヴさん・・・大丈夫ですか？」

「ああ。心臓も動いてるし、気もわずかだが残ってる。イヴはいつも回復が早いからな。しばらく寝かせておけば大丈夫なはずさ」

「よかった。セルがまた出てきたときには、本当にびっくりしましたから」

「ああ。本当だな。よし。家に帰るぞ」

「はいっ」

「ん・・・ふぁぁ」

「目、覚めましたか？」

そこにいたのは、トランクスだ。

あたしは、どうやら、生死をさまよっただったらしく、しばらく寝かせてもらったようだ。

その間のことを、トランクスは、事細かに説明してくれた。
そして、自分の名前と、生い立ちも、わかってはいるけど、聞かせ
てもらえた。

逆に、あたしも、自分の生い立ちを聞かせてあげた。
未来には、どういうわけか、あたしは存在しないらしい。
やっぱり、この世界のオリジナルキャラだからだろうか？
ここはさすがに黙っておいたけど。

「これで安心して元の世界に戻れます」

「そりゃよかった。じゃ、あたしはみんなにも元気になったこと、
知らせに行ってくるね」

「あ、ちよつと待って。姉さん」

「ね、姉さん・・・？」

「あんた・・・ベジータの子よね？あたしは、ベジータとは何も関
係な・・・」

「その世界のことじゃありません」

「トランクスは、まさか、まさか、いや、そんなこと――」

「僕は、あなたとは、違う世界で、兄弟関係。僕の名前は、後藤
斗真^{とうま}。あなたのなまえは、後藤^{ごとう} 裕佳梨^{ゆかり}。違いますか？」

「ってことは・・・。まさか、あなたも転生者なの？」

「はい」

マジっすか……

下着が名前の少年

僕は、転生者だ。

赤ん坊に転生し、そのまま現在にいたる。

僕は今まで、普通の少年だった。

中学生で、一人の姉を持つ。

ある日にぐっすりと授業中に眠っていたら、あるキャラクターになつていた。

姉と共に大好きな漫画、ドラゴンボールのキャラクター、トランクスだった。

トランクスという名は、多少たりとも嫌だった。

だって下着の名前じゃん！

それも、どうやら時間が過ぎていつてわかった。

「未来編のトランクスかよー！！」

そう。ゴテンクスになれる方のトランクスじゃなく、暗く、辛い過去を背負った方のトランクスだった。

僕は、何度か、人造人間と戦った。

何度か追い詰めたこともあったのだが、なかなか勝つことは出来ずにいた。

そこで、過去にでかけた。

過去、僕が生まれてすぐの過去だ。

悟空さんがいる時代にいけば、過去を直してもらえるかも知れないし、それがダメなら、現代に、悟空さんをつれてきて、人造人間たちを倒してもらえばいい。

フリーザと僕は、戦った。

とはいっても、あまりにも一方的な決着の付け方だったが……。

「イヴ……イヴって誰なんだ……？」

サイヤ人のなかで、現代にしか存在しない、イヴ。

それも、超サイヤ人にもなれるという。

彼女、彼はいったい何者なのか？

僕は、ときどき、夢を見る。

それは、一人の少女が、大きな竜と戦うという夢。

そこに出てくる少女は、金髪の髪をしていて、周りに黄金の気を纏う。

その感覚は、超サイヤ人だ。

どうして彼女は、超サイヤ人なのか。

単なる夢か、正夢か。

彼女は、夢のなかで、僕のことを、斗真とうまと呼んでいた。

斗真は、僕の転生前の名前だ。

夢なのだろうか……？

いや、ただの夢のような気はしない。

彼女からは、なにか、懐かしい気持ち^{こころもち}が浮かび上がった。

過去に行き、しばらく、セルとの戦いで、彼女は現れた。

夢に出てきたままの、彼女を見て、僕は、ぴかっと、気がついたのだ。僕と、彼女の正体を……。

次元魔王の城（前書き）

今回は短めです。

次元魔王の城

「みなさん。ありがとうございました」

「ああ。トランクスも、イヴも、達者でな！」

「はい。失礼します」

あたしたちは、自分達の正体を明かした。

すると、みんなは意外にもまともに受け止めてくれ、ついに別れのときとなった。

「だったら、トランクス。行きましょう」

「ああ。イヴさん。もうそろそろですね」

あたしとトランクスは、タイムマシンに乗り込んだ。
タイムマシンのなかに乗り込んだのは、とりあえず、未来の人造人間を倒してから、元の世界に帰るためである。

「はあっ！」

「うりゃっ！」

人造人間との戦いは、予想以上に早く終わった。

やはり、超サイヤ人2の力は、今までのものとは比べ物にならない。

原作では、超サイヤ人の二倍と定められているものの、実際には、もっと大きいような気がする。

三倍か、多いと四倍はある。

そして、三年後に出かけ、

「お前を過去には行かせないぞ！セル！」

セルとの戦いが行われたのだ。

結果は、言われずとも、圧勝だったが・・・。

「よし。終わりました。では、もとの世界に帰りましょう」

「うん」

頭のなかで、声が聞こえる。

「そうか。この世界に転生されたものは、二人もいたか・・・。だが、お主ら。悪いが、簡単に転生することは不可能になってしまった」

「え・・・？どういうことですか・・・？」

ギラティナは答えた。

「どうやら、この世界に転生された理由は、はじめは、このやぶれたせかいの影響か、パルキアのせいだと思っていた。だが、実はそ

のせいではなかったのだ。とある次元に生まれた、悪のオーラの塊が、世界の次元をめっちゃめっちゃにしまったようなのだ。どうやら、その悪のオーラの塊も、自ら実体を持つようになったらしい。そしてそいつは、自らを、次元魔王と称したらしい。この次元魔王を倒さないと、おそらく元の次元には戻れないだろう」

「ってことは、そいつがいる次元にでもいかないかぎり、元には戻れないと・・・？」

なんかすごい少年漫画っぽい展開だ。

どうしてここを面倒だから都合主義にならないのか・・・。

「わかりました。行きますよ。次元魔王のところに！早く転生させてください」

「わかった・・・どうもそこは城になってるらしいな。どうやら、そこにいる数人の戦士を倒さないと、魔王に会うこともできないらしい。気をつけるんだぞ」

そういうと、ギラティナの力で、あたしたちは転送された・・・。

その場所は、本当に城だった。

例えるなら、クッパ城や、ドラクエに出る、王国の城だ。なぜこんな形に自分を誇張するのか。

サイヤ人であるあたしたちが負けるわけがない。

ぎったぎたのめっためたにしてやる。
覚悟しておきなさい！

次元魔王の城（後書き）

次回予告は、終了しました・・・

1 階 懲りない誘拐魔（前書き）

変な感じに終わってます。
すみません。

1階 懲りない誘拐魔

『客人よ。よくぞまいった』

それは、あたしたちが、城の扉を開けてすぐに聞こえた。

『悪いが。俺に会いたいのならば、これから出てくる四天王たちを倒さないと、通すわけにはいかんだ。さあ、我が城の中へ進みたまえ』

どうやら、これから出る四人の敵を全て倒してからじゃないと、次元魔王とは会えないらしい。

全く、自分勝手な内容だ。

まあ、あたしたちサイヤ人が負けるわけではないから、別に全然構わないのだが。

一階は、どうやら、石のフィールドらしい。

石で出来たタイルが、床一面に敷き詰められている。

しかし、肝心の敵は、まだ現れないようだった。

「全く。とんだ迷惑よ。こっちは！」

「ま、まあそんなぶりぶり怒らないでくださいよ・・・」

トランクスは、あたしを少し慰めた。

きつとトランクスも、こんな面倒なことは早く終わらせたいだろう。

面倒なことに巻き込まれたと思ってるだろう。

小説の主人公みたいだなあ。とか、そんな程度の話じゃない。戦いは終わりで、元の世界に帰れると、思っていたところだったのに。

まだ戦いが続くのだ。

それも、あと五回。

「お前らが我輩と勝負する輩か！おもしろい」

そこに現れたのは、巨大な影だった。

全長2メートルはあるであろう巨体な体。

背中には、トゲのついた、甲羅を背負っている。

腕輪や足輪を身に付けており、それにもトゲがついている。

足や手の爪は長く鋭く、口は大きく目は鋭い。

もう言わなくてもわかるだろう。

「ここから先を通りたければ、このクツパ様を倒してから行くんだな」

「なるほど。クツパか・・・おもしろい」

「いつもはマリオに落とされてばかりだがな。今回は違う。落ちるしかけもない。どちらかの体力が尽きるまでの正々堂々とした、真っ向勝負だ！」

クツパは、口から炎を吹き出した。

あたしたちは、それをかわし、

「はっ！」

単純な気攻波を放ってみた。
しかし、

「ぐぬう・・・っ！」

それは、見事に受け止められた。

「ははは。貴様らは変わった術を使うな。だが、我輩にその程度の技は通用せんぞ！」

そういうと、気攻波は握りつぶされて破裂した。

「はじめて見たわ。気攻波が持たれて破裂するのは・・・」

「これは、一筋縄では行かないようですね」

あたしたちは、超サイヤ人になる決心をした。
気を増幅し、大きくさせると、膨大な力を手にし、超サイヤ人となった。

「金髪に緑の目。変化したって所詮、我が力には及ばんわ！」

「へえ・・・本当にそうでしょうか・・・？」

あたしは、力を大きく溜め、再び気攻波をぶちかました。

「ははは。またさつきと同じ技か！こりんやつめ！」

しかし、今度は、

「ぬ、おおー!!」

言葉にならない音を出して、吹っ飛んでいった。

「さ、さっきよりも威力があがっていた!くそっ!」

クツパは立ち上がり、あたしたちを睨み付けた。

「今度は、我輩から行くぞ!!」

クツパは、大きく飛び、あたしたちに向かって、炎の玉を吹き出した。

この炎は青色。

赤よりも強力な炎だ。

「しゃらくさいっ!」

あたしは、それを一気に、気弾で吹き飛ばし、

「くたばれっ!」

トランクスが、腹に一発の蹴りを加えた。

「その程度か・・・?」

だが、クツパは微動だにしない。

「さ、さっきの気攻波では飛んでいったのに!」

「パワーが上がっても、やはりその程度か。我輩と本気でやりあう

には、パワーが違いすぎたか・・・」

クッパはそのままトランクスを投げ飛ばし、パンチを食らわした。

「ぐはぁ・・・っ！」

トランクスは、飛んでいき、壁にぶち当たった。

「クッパ！こっちよ！」

あたしは、パンチとキックのラッシュを、腹、足、顔に連続して入れた。

だが、クリーンヒットだというのに、クッパは動かず、ダメージすら与えられていないようだった。

「ぐおらぁぁぁ！」

クッパは口から、巨大な炎を吹き上げ、あたしは、それに直撃し、大ダメージを受けた。

「は・・・あっ・・・」

「終わらせてやる！」

地面にへたれ込んだあたしを、クッパは踏み潰そうと、足を上げた。そのときだった。

「ファイナルフラッシュ！」

超サイヤ人2になったトランクスが、空に飛び上がって、ファイナ

ルフラッシュを浴びせた。
父親の技までマスターするとは。

「大丈夫ですか!？」

「え、ええ・・・」

しかし、クツパはあまりダメージを受けてはいなかった。
それもそのはず、技を受ける瞬間、甲羅のなかに入って、直撃を防いでいたのだから。

「ふう。今のはさすがに、甲羅に入っていないとやばかったな」

「く、くそ・・・」

クツパは、とてつもない強敵だ。
頑丈な体にとてつもないタフさ。

さらに、ファイナルフラッシュをまともに食らってもびくともしない甲羅。

今のトランクスのファイナルフラッシュは、父親がセルに浴びせたそれよりも遥かにパワーは大きいはずだった。
それを守り抜いている。

これはきつと、簡単には倒せないだろう。

「トランクス。あいつの肉体には、きつと通常のような打撃技は、無効だと思うの。だから、剣で戦わない?」

「え? イヴさん、剣持っていないじゃないですか」

「あたしは自分で作れるよ」

トランス
変身
雷鳴豪刀らいめいこうとう

飛んでいないと使えない、とても大きな剣、雷鳴豪刀らいめいこうとうを作った。

「でかつ！使えるんですか？そんな剣？」

「これであたしは、ナツパを倒して、フリーザのデスソーサーをかち割ったんだから」

構えて、相手の様子を見た。

「なるほど。お前たちは剣が使えるのか。しかし、普通の剣では、我輩の身には傷一つつけられんぞ！」

おそらくこれは、はったりなどではなく、事実だろう。

あたしなどのパワーには、クツパの半分ほどもおいつかないだろう。

「元氣玉とかができればいいんだけどなあ」

そんな技は、あたしには使えない。

やはり、あたしのオリジナルの技で決めるしかない。

「行くよ！クツパ！」

「来い！返り討ちにしてくれるわ！」

1階 懲りない誘拐魔（2）

「うおりゃああっ！」

剣を振り上げ、クツパに当てる。

しかし、クツパの強靱な肉体には、傷すらつけることは出来なかった。

「強すぎだよ。クツパ・・・」

「これをいとも簡単に倒すマリオは、もう尊敬の対象だわ」

クツパも疲れてはきているものの、ものすごく強い。

あたしは、細胞放電現象を利用し、電気を溜め始めた。

「ねえ。もっと、あいつを倒せるような強力な技はないの？」

「ああ。これといったのは思い付かないや・・・」

「全く。じゃあ、あたしの技しかないね」

「へえ。クツパを倒せるほどの技があるのか？」

「うん。たぶんね。これが聞かなきゃ、あいつは不死身かなんかよ。でも、この技は力を溜めるのにやたら時間がかかるの。それまで、クツパの相手を頼むね」

「なんか、ラディッツと戦ってるみたいだな」

あたしも、それを思い、少し笑った。

電気はちやくちやくと溜まり、パワーが増大していった。

あとは、自分の気と練り合わせ、剣に纏わせて、波動と共に打ち付けるだけだ。

「とりやあつ！」

「ぶおああああ」

トランクスは、何度か炎にも当たり、少し服もこげていた。

だが、なんとか同等の力で戦っていた。

あたしも超サイヤ人2になれたら、すぐに倒せるはずなのに……。
頼りない姉でごめんね。

「よし。この程度あれば、きっと倒せるはずだよ……」

パワーは今までの比じゃないくらいの強さだ。

あとは、チャンスを見計らって、打てばいい。

「トランクス。クッパの後ろに回って！」

トランクスは、うなずくと、気弾を下に打ち付けて、姿を隠した状態で、後ろに回った。

「尻尾を使って、回して！そのまま放りなげて！」

尻尾を持ち、ハンマー投げのようにクルクル回す。

そして、最後に、放り投げた。

クッパは、甲羅を下にして、仰向けになってしまっていた。

「あれは、僕の技でもなかなか出すことが出来ない強力な技のはず．．．！あいつ。あの技すら聞かないのか．．．？」

「あ．．．ぐ．．．う．．．くそ．．．くそ．．．くそ．．．！くつそお
おおお！負けたくない！絶対に負けない！はああああああ！！！」

あたしは、吹っ切れた。

くやしさが頂点に上り詰め、越えた。

「お．．．おお．．．！」

「超サイヤ人2！」

あたしの回りには、バチバチと電気が走っていた。

超サイヤ人2に進化することが出来た。

「よし。こうなりや終わりだね．．．クツパ」

「ふん。返り討ちにしてやるわ．．．！」

トランス
変身

髪の毛パンチ！

手を髪の毛に変え、何発も拳を打ち付けた。

手に気を集中させ、

ソニックパンチ！

高速でパンチを繰り出して、衝撃波を飛ばす。
某力ミナリ頭の技です。

でも、あたしには気も織り混ぜて放ったため、さらにパワーは増している。

「ぐはぁ・・・っ」

クッパはもちろん吹っ飛ぶが、大したダメージではない。

「ファイナルフラッシュ!!」

トランクスも、攻撃を何回かと繰り返すが、なかなか大ダメージにはならない。

「はぁ・・・っ・・・ぁ・・・っ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「ぐう・・・っ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「ぐぉ・・・おお・・・!!」

三人とも体力は、限界に近くなる。

「次で決めないと、こっちがやられる・・・。でも、あいつに一発食らわすのは、なかなか骨が折れるよ・・・」

「こうなれば、最高の一発を食らわすしかない・・・」

あたしは、攻撃姿勢をとった。

トランス
変身
ビームガン
光線砲

あたしは、気を溜めていった。
どんどんと溜めていく。

「いくぞお・・・」

エネルギーは徐々に溜まっていく。
超サイヤ人2の気をほぼ全部使って、ビームガン光線砲に溜めていく。

「トランクス。行くよ」

「よし来た！」

「バーストビームガン爆裂光線砲！」

ビッグビームガン大光線砲からさらにパワーを増した新技を、クッパに浴びせた。

「ファイナルフラッシュ！」

「ぐわおおお！」

クッパも、強力な炎を吐き出す。

パワーも同じくらいの力になり、お互い押し合いの状態となった。

「はあああああああああああああつ！」

「あああああああああああああああつ！」

「がああああああああああああああつ！」

なかなか決まらない。

でも、もう限界に近くなっていく。

「うおりやあああ！」

あたしは、最後の力を振り絞って、さらにパワーを増やした。

「ぐおあああああああ．．．！」

クツパの力にあたしたちは、勝った。

クツパは、攻撃を食らい、光に包まれた後に、倒れていた．．．。

「勝った．．．」

「よかった．．．」

あたしたちは、ぐったりとへたれた。

『よく勝った。次の敵は、前よりもずっとか強いぞ．．．。そこにある階段を上り、次の階へ行け』

あたしたちは、疲れた体で、ずるずると上っていった。

次の階は、城のなかのはずなのに、外のような場所だった。

「へへへ．．．パリカ．．．待ってたぜえ」

このしゃべり方、パリカって．．．？

「ナツパ．．．!？」

・そう、そこにいたのは、かつてあたしが倒した、ナツパだったのだ・

2階 復活したサイヤ人

「へっへっへ・・・貴様にやっと仕返しができるぜ・・・」

「は？どういうことですか？」

そうだった。トランクスと世界では、全て原作通りにストーリーは進んでいた。

だから、ナッパは、ベジータに裏切られて、やられてしまったことになってるんだ。

「あのさ。あなたの時代だと、ナッパは、ベジータにやられたことになってるでしょ？あたしの時代だと、あたしが、ナッパを倒したことになるんだよ・・・」

「へ・・・へえ・・・」

「さうてパリカ、今からてめえを、じっくりと料理してやるぜ！」

「もう一度、地獄に送り込んでやる！」

あたしは、気を力一杯解放し、早くも超サイヤ人2になった。

「ほう。貴様、超サイヤ人になれるのか」

だが、ナッパはあせる様子でもなく、ニヤリと笑みすら作っている。

「だがなあ、俺だっただけでなれることができるぜ、超サイヤ人にな！」

「はい・・・？」

原作でも、アニメでも、絶対に超サイヤ人にはならなかったナツパ。今さら、今さら、超サイヤ人なんか・・・

「はぁーっ！！」

ナツパが、髪を生やしてる！

足まであるほどの長い金髪、それに、緑の目、強い気。

「す、超サイヤ人3だと・・・？」

それは、見るからに、超サイヤ人3究極形態だ。

「貴様らをぎったぎたにしてやるぜ。覚悟しな・・・！」

ナツパは、猛烈な勢いで、あたしに向かってきた。

あたしの顔面に、拳をつきだす。

あたしは、それにぶつかり、吹き飛ぶ。

「うわっ！」

「くたばりやがれ」

ナツパは指を突きだし、クンツと上に動かした。

それと共に、地面から巨大な爆発が起こり、あたしは吹き飛んだ。

「うわぁーっ！！」

あたしは上空に飛び、そのあと、ナツパに髪の毛を捕まれた。

「さあて、このまま倒してもおもしろくねえなあ！」

あたしは、立ったまま、髪の毛を後ろに引っ張られ、苦痛な状況だ。

「やめろっ！ナツパあ！」

空に浮かぶトランクスが、ナツパに叫ぶ。

その姿は、どこか、アニメや漫画で見る、ベジータに似ていた。

「くだらんことはよせ！ナツパ！俺の言うことが聞けんのか！」

「ふん。なんだ！貴様もこの俺に八つ裂きにされたいのか！？」

無論、ナツパはトランクスの正体など知りもしない。

「貴様の冥土の土産に見せてやろう。超エリートの圧倒的パワーをな！」

（ベジータの真似？）

「なるほどな。お前はどこかベジータに似ているようだ。どうやら、ベジータの血筋のようだな」

トランクスの様子を見て、ナツパは理解したらしい。
でも、トランクスは超サイヤ人2。

それに引き換え、ナツパは、超サイヤ人3だ。

トランクス一人では、絶対に勝ち目はないだろう。

「待つて・・・トランクス・・・あなた一人では無理よ」

「わかってる。でも、イヴさんは、回復できるでしょ。おとなしくしばらく回復に徹して下さい。それまで、なんとか一人で持ちこたえます」

「そ、そう・・・？」

あたしは、言う通りに、眠りについた。

ナノマシンのヒーリング効果は、とてつもない力だ。

あたしの体は、すごい力で癒えていた。

体の進化に合わせ、ナノマシンの能力も上がるのだろうか。

とてつもない早さで傷が癒えた。

そう、一時間くらいの早さでだ。

「よし・・・もう大丈夫。トランクス、休んでいいわよ」

「え？も、もういいんですか？」

「うん。もう平気」

あたしは、まっすぐナツパに向かっていった。

「へっ。なんだ？また俺にぎたぎたにされたいのか？」

「それはあなたの方よ」

あたしは、気を最大限に解放した。

だが、超サイヤ人3にはなれない。

所詮気が大きくなる程度。

パワーは少し大きくなってはいるだろうが、ナツパには遠く及ばな

いだろう。

「どうしようか・・・」

「へへへ。ではさっそくこっちから行くか」

ナツパは、腕に気を溜めていき、投げつけた。

「^{ビームガン}光線砲っ！」

あたしはそれを打ち消す。

「いくぞおっ！」

拳をあたしにつきだしてくる、あたしはそれにあわせて、大きく飛んだ。

ナツパは、もしかすると、パワーにおいては、悟空や悟飯、ベジータよりも上なのかも知れない。

「負けない！絶対勝つから！」

あたしは、髪の毛の手を何個か作り出して、連続パンチを繰り出した。

黄金の連弾！^{ゴールド・ラッシュ}

しかし、それは、ナツパの腕に遮られ、全くと言っていいほど効いていなかった。

「へっへっへ。それがマックスのパワーなのか？だったら、すごい

「がっかりだぜ……！パリカよお！」

あたしの髪の毛を掴み、あたしを引き寄せる。

「あがぁ……ぐはぁ！」

あたしの首を掴み、力を込めてきた。

「ぐ、ぐるじい……っ！」

「ははは。もつと苦しめ！もつと苦しむんだ！」

ナツパは、あたしを首だけで掴み、攻撃をしかけてくる。

あたしは力が入らず、腕や足は、だらんとしてしまっている。そこに、渾身の一撃を何発も打ち付ける。

あたしは、そのたびに苦痛の声を漏らしていた。

「へへへ。残念だったな。貴様は今すぐ楽にはしてやらん。ぐずぐずと苦しめ！」

地面にあたしを叩きつけたあと、あたしの腹部を踏みつけた。

「あつ……がぁ……っ！」

「へっへっへ。苦しいか？苦しいか？もつと苦しめよ！おい！」

さらに踏み潰す。

何度も何度も、あたしの腹部には、激痛が走ってくる。

やめろと言っことすら出来ない。

苦しみしか生まない。

あまりにも苦しいので体が動かない。

「ははは。勝負あったな。では、最後にだめ押しの一発でも繰り出しておくか！」

クンッ！！

ドコアアアアアアアアアアアアアアアアア

あたしは抵抗もできなかった。

2階 復活したサイヤ人（2）

「い、イヴさんっ!」

さつきまで休憩をしていた僕だが、事態が急変したため立ち上がった。

僕は、怒りを覚えた。

あ のとき、悟飯さんを殺した17号たちに向けたように。

「ナツパ・・・よくも、よくも、よくも・・・俺は怒ったぞーっ! ナツパ!」

超サイヤ人3に覚醒していた。

眉毛はなくなり、険しい顔つきに、それに、金色の長髪。

「ふうう〜。これで互角だな。ナツパ!」

「へっ。それはどうか?」

超サイヤ人3になれば、絶対に互角になる、と思っていた・・・のに、

「チッ!」

「どうした?お坊っちゃん!この程度じゃねえんだろお!!?」

ナツパの拳は、一発一発がとても重い。

当たれば衝撃的なダメージになり、絶対に酷い傷を負わされる。そして、こちらの攻撃は、とてつもないタフさで乗りきる。

これはもしかすると、悟空さんや父さんよりも手強い相手なのかも知れない。

「どうした？逃げるだけか？おらぁ！」

僕は、かわして行きながら、攻撃を見計らっていく。

よく見ると、ナツパの攻撃は、いつも大振りだ。

一度の攻撃に、気を大量に活用するため、非常に大振りな攻撃になる。

一度の攻撃に隙が現れる。

今は、その隙にわずかな攻撃を少しずつ行えばかりで、他はかわしていく。

それは、あることをずっと待ったために……。

（そうだ。このままだと、やりにくいな。そうだ。超サイヤ人に戻るっ）

僕は、体の力を抜き、超サイヤ人に戻った。

「ど、どういうことだ。そんな弱小形態に戻って、いったいどうするつもりだ？」

「さぁ……？どうするつもりなんだろうね」

僕は、その後も、かわすことばかりをし、防戦をしばらく続けていた。

「く……っはあ……」

吹き飛ばされたあたしは、思いつき外に飛んでいた。

「うわぁ……飛びすぎだよ。どんだけパワーあんのよ、あいつはあ！」

あたしは、いつの間にか気絶していたようで、体力は半分くらい回復していた。

「でも、このままじゃやられるか……。うーん、どうしよっかな」

今ごろはきつとトランクスが戦ってくれてるだろう、この気の強さからいくと、超サイヤ人3にたぶんなれたはずだ。
一方であたしは……。

「で、でも、行かなくちゃ……」

あたしは、空に飛び立とうと、変身トランスを発動する。
しかし、あたしに、それを制止する声があった。

「待て！なぜ貴様がここにいる！」

「この声は……」

「貴様……俺に勝ったのに、まさか上の階のやつに負けたのではあるまいな……！」

凶星だ。

でもあたしは、ある程度平然を装った。

「え、ま、まあ・・・半分は正しいっすけども・・・」

「全く。貴様は何をやつておる!!」

クツパは何故だかぶちギレた。

「この我輩を倒しておきながら、上の階の者も倒せないだと!笑わせおるわ!貴様はそんな程度か?」

「あ、あんた・・・!」

「・・・上のやつがどれほどの強さか、それは我輩にも解らぬ。だが、これだけは、はっきり言える。貴様は、勇気をたくさん持っている。我輩に挑んで、これまでのやつは、勝ったことなどない。精々、マリオくらいだ。だが、貴様は、我輩を倒した。勇気だ!勇気を持って!貴様が持っていた勇気は、何にも劣らぬ力だ!」

すごい、クツパがいいこと言ってるわ・・・。

「悪者に励まされると、なんか変な感じね」

「励ましてなどいない。ただ、自分が負けた相手が、他の者に負けるなどという、みつともない姿を見たくないだけだ」

「・・・素直じゃないの!」

あたしは、空に飛び立っていった。
あたしなら、きっと勝てる。
そう、心に信じて。

「おらおら！かかってこんか！おいおい！」

「ま、まだだ！」

ナツパがパンチを繰り出す、それをトランクスがよける。
しばらくその繰り返しだった。

「トランクス！大丈夫だった！？」

「え？ああ。平気さ。ただ、ちょっと手こずってて・・・」

「パリカあ、死に損ないめ、またノコノコと出てきやがって！もう一度、今度はしっかりと止めをさしてやるぜ！」

ナツパは、まだ余裕を見せている。

今なら、あたしでもやれるチャンスかも知れない。

トランス
変身
ビッグビームガン
大光線砲

しかし、そのままそれは、ナツパが口からはいた光線によって相殺される。

「なるほど・・・さすがにその程度の技じゃあ通用しないか・・・」

「へっ。残念ながら、貴様の全てが無駄だ。こんなことをしたって意味はない。早いこととどめをさしてしまっぞ」

ナツパは口をあんぐりと開ける。

ナツパの自称最高技を発動するようだ。

「へえ。もう最高の技を使っんですか・・・。だったら、こっちも本気でいきますよ!」

トランス
変身
バーストビームガン
爆裂光線砲

ファイナルフラッシュ

二つの技があわさり、強力なエネルギー波となって、ナツパの技と激突する。

それは、お互いに押し合い、ついに爆発した。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオ

今、両足で地面に立っているもの、それは、ナツパと、あたし、ただ二人だった。

トランクスは、どうなったのか、それは、ほんの一瞬の出来事だっ

た
・
・
・
。

2 階 復活したサイヤ人（3）

三つの技があわさり、爆発を起こしたとき、突然目の前に、ナッパが現れた。

爆発に紛れて、あたしを倒そうとする魂胆だ。

しかし、あたしに、ナッパの攻撃が当たることはなかった。その理由は、トランクスが、守ってくれたからだ。

「と、トランクス！？」

「い、イヴさん。すみません。あなたを守るために……。あとは、よろしく願いします！」

とだけいい、壁に激突すると、そのまま倒れてしまったようだった。
。。。

と、トランクス……。あなたは、あたしのために……。

あたしは、変身で盾トランスを作れば、守れたかも知れない、それに、あたしは、ナノマシンの力を使えば、いとも簡単に回復することだって出来ないことはなかった。

なのにトランクスは、あたしを守った。

自分を、犠牲にして、

「頭に来る。そんなにやさしい、サイヤ人なんて！あたしは、あたしは……。あたしは……。怒ったぞーっ！！」

自分への怒り、トランクスのやさしさ、さらに、悲しみ、感謝、いろんな感情があわさり、超サイヤ人3となった。

「おい。あんた。トランクスをあんなことにするなんて・・・、覚悟は出来てるの・・・？」

「へっ。覚悟は出来てるかって？俺は無敵だ。今なら、カカロットやベジータ、そしてフリーザにだって圧勝の強さだ。負けるなんて思えねえぜ！」

「やればわかるわよ・・・」

あたしは、確信した。
勝てる！絶対に勝てると。

あたしたちは、とてつもなく高速で動いていく。
攻撃をしたりされたりの繰り返し。

「ほう。俺の動きについてこられるようになったのか」

「あつたりまえよ。あんたみたいな脇役に負けるか！」

ゴールドラッシュ
黄金の連弾

「うつがあー！」

ナツパは吹っ飛ぶ。
そしてあたしは追撃し、

「光線砲ビームガンっ！」

チャージなしの光線砲ビームガンを放った。
その追撃もすさまじく、彼はいつきに吹き飛んでいた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「やっぱり、超サイヤ人3では、気の消費が激しすぎるんですね。
悟空さんですら、なれる時間が限られてるのは、こういうわけなのか」

あたしは、超サイヤ人2に戻った。

「今のあなたでなら、この形態で倒せますね」

「な、な、舐めやがって!!」

ナツパはパンチを繰り出す。

しかし、あたしはそれを片手で受け止めてやった。

「んなっ!?!」

「ほら見る。なにが間違ってる?」

あたしは、雷鳴豪豪刀らいめいごうごうを作りあげた。

「前と一緒のやり方で、終わらせてあげる!」

雷鳴進撃波らいめいしんげきは!!

「や、やめろぉー！パリカぁー！！」

「さようなら。お・に・い・さ・ま！」

ナツパは跡形もなく、消えてしまった・・・。

「トランクス！！」

あたしは、迷わずにトランクスに駆け寄った。

頭から血を流してはいるが、息はしているようだ。
よかった・・・。

「で、でも、回復させようがない・・・」

あたしのナノマシンでも、他人の怪我は治せない。

「どうしよう。ここままじゃ、トランクス。どうなるかわからない
よ・・・」

あたしは困り果てた。

仙豆を少しもらっておけばよかったと、今さら後悔した。

「何かお困りですか」

そこに現れたのは、カメック。

壁から突如、現れた。

カメツクは、クツパの手下で、魔法を使える。

特に瞬間移動などが得意で、すぐに場所を移動できる。

「クツパ様の命により、お前たちの体力を回復させてやろう」

「え・・・？」

なんだ、クツパって意外とやさしいんだね。

「決して親切でやつとるわけではないぞよ。クツパ様は、自分以外の者にお主らが負けるのがくやさいだけじゃよ」

うわっ！心読まれてる！

「そりゃ、わしは魔法使いだからな」

すげっ！！

「すごいじゃろ？」

「あ、ああ」

その後しばらくして、トランクスは回復し、3階に向かっていった。
・・・。

3 階 悲しき運命の父親

次の階に上がって、あたしたちは仰天した。

今度は、本当に外なのだ。

きっと、空間やら次元やらがねじ曲がっているせいだろう。

そこは、真っ黒な岩が、ごつごつとしている場所だった。

しばらく、辺りを見渡していた。

すると・・・！

「お前たちの墓場にはぴったりの場所だろう？」

その声の主とは・・・、

竜リウリウの騎士！？

「な、なんで、竜騎将バラン？」

「ふはは。お前たちをあの世に送るために、伝説の勇者、竜リウリウの騎士が出てきてやったのだ」

——竜リウリウの騎士——

知っている人間も多いだろうが、ドラゴンクエストに出てくるキャラだ。

人間の神、魔族の神、竜の神がそれぞれのいいところをとって作りあげた、伝説の生命体だ。

最強の肉体、最高の魔力、やさしい心。

それだけを身に付けているすごさ。

ただの戦闘狂であるサイヤ人なんかよりも、よほど強い。

それに、竜の騎士^{ドラゴンナイト}には、とてつもない技がある。

それは、バランと戦えば、いずれわかるはずだ。

「お前たちも、この私の、神魔豪竜剣^{しんまごうりゅうけん}に切り裂かれるがいい！」

彼は、あたしたちに攻めかかってきた。

あたしたちは、それをかわして、打撃を食らわす・・・しかし、

ズゴオオオオオン

「な、なぬ・・・！」

キックは確かにバランに当たった気がした。

しかし、それは、当たってはいなかったのだ。

「どうした。当たつとらんぞ」

空中でとまっている。

これ以上内側には、全く入らない。

そこに見えないバリアでも張っているような・・・。

それだ、竜の騎士^{ドラゴンナイト}が持つ能力のひとつ。
竜闘気^{ドラゴンシキオーラ}だ。

つまり、竜の闘気だ。

「ドラゴンクエスト　ダイの大冒険」には、闘気というものがある。

これは、あたしたちの言う、気に近いだろう。

その者の、戦う力を示す能力だ。

だが、気のように、生命力を示すものにはならない。

どちらかというと、「氣」や、「覇氣」に性質は近いかも知れない。

「そうか。そうになると、強力な技じゃないと、ダメージを与えることすら無理なのかも知れないってことか・・・」

「いつきに気を解放して、超サイヤ人3になりましょう！それで早いうちに決めましょう！」

あたしたちは、超サイヤ人3へと変化した。

balan は、はじめのうちこそ、あたしたちの変化に驚いていたようだが、

「格段に闘気も増大しているな。おもしろいつ」

とって、剣を構えている。

やはり、気と闘気は、あながち違うものでもないらしい。

「いくよっ！ balan ！」

「こいつ！人間ども！」

あたしたちは、二人でかかってても、いい勝負が展開できた。

トランス
トランスは剣で、あたしは、変身で作った槍で勝負をしているが、間合いがうまい彼は、なかなか勝負を決めさせてくれない。

「さっすが、冥界竜を倒すだけのことはあるわ」

「いやいやいや。強すぎんだろ・・・」

「どうした？もう疲れたのか・・・」

「いや！まだだ！」

高速で動き、高速で攻撃をする。

あたしたちがよく知る方法で戦ってはいるものの、ドラゴン竜の騎士にはそんなもの無効なのか、ダメージは与えられない。

「やっぱり、ドラゴン竜闘気が邪魔だわ」

「ったく。いらん能力つけやがって」

あたしたちは、毎度のごとく苦戦していた。

「そろそろ私も飽きてきたのでな。本気の技で、とどめをささせてもらおうぞ！」

そついつて、彼のしんまごうりゅうけん神魔豪竜剣に、ある呪文を唱えた。

「ギガデイン！！」

それは、デイン系の極大呪文だ。

神魔豪竜剣は、オリハルコン製の武器だ。

電気を蓄える能力があるのは、すでにあたしも知っている。

ということは、この技は・・・。

「ただの人間で、この技を出させたのは、お前が二人目だ。はじめの一人は、戦士だったが。貴様は格闘家か。おもしろいつ！」

あたしは、ひとつの作戦を思い付いた。
やろうと思えば、きっとできる。

「トランクス、気を今から消して！今すぐ」

あたしたちは、ずっと構え、気を抑えていった。
超サイヤ人から段々と普通に戻り、気を減らしていく。
気がなくなるのは時間がかからなかった。

「も、もしや、この技は！」

「さあこい。 balan！」

「くっ！やむを得ん！ギガブレイク！！」

気と闘気が似たような性質なら、きっと出来るはずの技。
たぶん、いや、きっと可能な技。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・

あたしに、ギガブレイクが突き刺さった。
いまだ！

「アバン流奥義 無刀陣！！」

「やはりか！」

あたしは、思いっきりくらった傷を抑え、

「稲妻ラッシュ！！」

技を決めてやった。

「ファイナルフラッシュ!!」

トランクスも決めたみたいだ。

しばらく砂煙がたち、バランの姿は見えなかった。
しかし、姿を現すにつれ、血が出てくるのがわかる。

「お、おのれ……。私に傷をつけるとは……」

「よし。これでいいんだ」

なんか知らないけど、新技も覚えたから、とってもよかった。

「こ、こうなったら、私も、真の力を使わせてもらっぞ!」

あたしは、はっと、彼を見た。

赤色である彼の血が、魔族の色である、蒼色に変わっていったのだから。

「まさか……!」

「竜魔人だ!!」

その姿は、人の姿をなくし、怪物化して、竜、魔族のパワーを増大させた真の姿だ。

「こうなった私には、誰にも止められん!」

あたしたちは、どうなるのでしょうか!?

3 階 悲しき運命の父親（後書き）

サイヤ人の能力って、ドラクエの人間よりも強いのかな！？

3 階 悲しき運命の父親（2）（前書き）

バランのイメージ崩壊になるかも知れません。
それが嫌な人は、あまり見ることをおすすめしません。

3階 悲しき運命の父親（2）

「ちょっと、トランクス……。こうなったら、戦いを終えるまでとまらないよ！」

「ようは、大猿みたいな状態か！」

つまりは、とてつもないピンチってことだ。

あたしも恐ろしい気分を味わった。

あの恐ろしく鋭い目や、とてつもない気を見ると、相当なパワーで攻めないと、押し負ける危険性が大だ！

「トランクス！あんたパワーボール作れないの？」

「いやいやいや！無理でしょ！」

「いや！あんたの父親も、祖父もやってたんだから出来るよ！やってみて！」

トランクスは、気弾を作り出し、空中に出してみた。

「弾けて混ざれ！！！」

……シン……

「できないんだ……」

「だから言ったでしょー！」

「作戦会議はもう終わりか！」

balan は待ちくたびれているようで、剣の手入れまでしているようだ。

「大猿以外でパワーアップする方法って・・・？」

例がまったく思い浮かばない。

「どうやっても、この竜魔人 balan には勝てんわ！」

「ぐっ！！！！」

あたしたちは、仕方がなく超サイヤ人3のままで戦うことにした。あたしたちの攻撃をなんなくかわし、次の攻撃をしかける。それをあたしはさらにかわして、剣を作り、攻撃をしかけた。

「よしっ！いくぞ！」

超サイヤ人3の力を本気モードで使っていても、なかなか勝つことはできなかった。

「やばいよ・・・無理だ！」

「うん。まずいね」

超サイヤ人3と互角に戦うなど、常人じゃ無理な話だ。

「まったく。魔人ブウみたいだな・・・！」

「魔人ブウ・・・確かに強いよ。でも、たぶんこいつはそれ以上だよ。たぶん、悟空さんが来ても、ベジータさんが来ても、たぶん勝てない・・・」

「あの二人は強いけど・・・」

確かに、あの二人は、きっとあたしたちより強いはずだ。たぶん、太陽系程度なら楽々吹っ飛ぶ。

そんなやつが、悟空とベジータ、二人も同じ場所にいる。

・・・ん？・・・

「そうだ！あいつにも勝てる。最高の方法、おもいついた！」

「え・・・？何？」

やはり、これしかない。

悟空が超サイヤ人2になっても、まったく倒せなかった魔人ブウ（善）。だけど、その後、悪にかわり、悟空超サイヤ人2でも歯が立たなかった。

そこで、悟空はあの世にいた宇宙人に、ある技を教えてもらった。

それを悟天たちに教え、自らは立ち去った。

そのときに教えてもらった技・・・それは、

「フュージョンだ！」

「えっ・・・？」

あのこっぴどかしいことをしないとイケないのか、トランクスは一瞬赤面したが、今の状態じゃ、どうやっても終わりに近い。残された最後の手段としか、到底思えないのだ……。

「今の私には、どんな戦い方も、無に等しいぞ！」

「さあ？それは、やってみなくちゃわからないぞ！」

あたしたちは、身を構えた。

「フュ~~~~~~~~ジョン！・ハッ！」

すっげえ！パワーってここまで上がるもんなのか！

こりゃ、ゴジータやゴテンクスが強いわけだよ。

こんな状態では、そりゃ余裕が生まれるってもんだ。

だって、まだ気を高めていない状態で、すでにトランクスやイヴを越えてるんだもん。

「だ、誰だ貴様！さっきの、イヴとトランクスとかいう二人はどうした？」

「へっ。あいつらがどうしたって……？俺に力づくで聞いてみたらどうだー！」

俺は迷わず、超サイヤ人になってやった。

すると、とんでもないことがおこりやがった。

「と、突風だ！」

大気が深く振動し、風を巻き起こした。

強すぎるからね。

こりゃあ、ゴテンクスやゴジータなんて、いとも簡単に倒せそうな気がする。

「いくぜ！」

俺は、残像が残るほどの早さで動き、後ろから一撃をくらわす。

「な、早さも、攻撃力も、かなり増してる」

「へへっ。俺は強いからな！」

balan は剣を使って切りかかってくるが、この程度の攻撃、よける間でもない。

「つ、掴みよった。それも、指だけで・・・」

「残念だなあ！こんなもんかよおい！伝説の勇者も、大したことはねえなあ！！」

「ほざけ！」

なんども切りかかってくるけど、痛くも痒くもない。

「さあて、お遊びもお仕舞いにして、本気モードでいくか！」

俺は、気を超高めて、超サイヤ人3になった。
俺の状態で超サイヤ人3とか、完全無欠じゃね？

「あとは、パワーボールをつくって、超サイヤ人4になればいいんだけど」

どうやら尻尾は、トランクスに似てしまったようで、ないから、特別な装置が必要だ。

まあ、ないから完全に無理なんだけど。

「ぐ……ぐぬぬ……」

どうやら、 balan にはおもしろくなかったらしく、齒軋りをしている。

その姿は、ただのザコにしか見えず、とても伝説の勇者には見えない。

「こうなったら、私のこの形態でしか使えない、最高の技を放つてやる」

そついい、トベルーラで空にとんだ。

手をかめはめ波のように合わせ、下に向けている。

真ん中に何やら光が集まっている。

手の形が、竜のように変化する。

「このまま消えてなくなってしまうっ。ドルオーラ！」

ドラムニックオーラ

竜闘気を凝縮させて放つ、呪文を放っていた。

まさに最高技だったが、今の俺にくらべたら、あんなもの、ただの

ビームに過ぎない。

トランス
変身

（つてかできたよ、トランス
ビームガン
光線砲
変身）

ファイナルビームガン
「終楽光線砲！」

おぞましい技だった。

一瞬、世界が終わったかと思っただくらいだ。

力を弱めたから、相殺ですんだが、本気で放ってたら、たぶんバ
ンは終わってたはずだ。

ちっ、本気でやっておけば。

「うぐっ・・・うぐう」

すでに、戦う気力まで失ったのか、 balan は震えていた。

4階 最強の遺伝戦士

「さあて、そろそろ終わりにしてやるか。まあ、そこそこの勝負になったぜ。楽しかったよ……！」

俺は気を高め、かめはめ波の体制を取った。

二人分の力を作り、いつきに放出する……。

「あと、冥土の土産にでも、俺の正体を教えておいてやる。俺は、トランクスでもイヴでもない。貴様を倒すものだ」

「二人が、合体したとでもいうのか……？」

「ま、その程度のことだ」

しかし、そのときに、あたし（僕）は、あまりに時間が経っていることを気付いていなかった。

次の瞬間……。

「ん……！？」

「ぬ……！？」

「あ……！？」

二人に分裂してしまった……。

「が……んっ……！」

「どうしょっ……！」

あたしたちは、正直とてつもないくらいとまどった。
だって、こんな状態だ。

絶対に逆にとどめをさされる心配だって考えられるだろう。
だけど、そんな心配は全くなかった。

「ははははつ。私の負けだ！とても楽しかったぞ。まあ最後はあれだ、なぜだかもとに戻ってしまったが、とてもおもしろかったぞ。やはり、家族、兄弟の中というものはいいな……。我が子デイーノにも、同じように弟がいれば、あいつも楽しかったろうに」

影を残したバルンに、かける言葉は見つからなかったが、四階へいくことにした。

彼はいつたい、なぜ、こんな悲しき運命を背負うはめになったのか。
・・あたしは、胸が苦しくなった。

四階、それは洞窟の奥深くのようだった。

その洞窟は、周りが海で出来ていて、そこだけぽかりと浮かんでいるいわば孤島だ。

そこに、一匹、いや、一人。

人影が見えた。

それは人影なのかはわからないが、なにかが見えた。
あたしたちは、それを追いかけていく。

それを追いかけていき、はっと、その姿をとらえた。

「何者だ。私になんのようだ？」

それは、拘束された、人間だった。

十字架に鉄の拘束器具でがっしりと結ばれた彼は、全身がスタボロになっていて、もはや微かに命を燃やすだけのそのような状態に見えた。

「私を、私の力を、まだ、利用しようと言っのか・・・？」

「い、いいえ・・・あたしはただ・・・」

「いいわけは聞かん。今までしてきた行いが、全て物語っている」

彼は、あたしの話を聞かずに話を続けた。

「お前らは、20年間。私を幽閉した。私に、強大な力があるとい
つて・・・。辛かったぞ。ひたすら、私は堪え忍んだ。私が、貴様
らに何をした・・・？私は、何もしていないというのに・・・」

ダメだ。

完全に一人モードに入っている。

これはしばらく、話を聞いたほうがよさそうだ。

「私は・・・なぜ、生まれたんだ。人間の・・・人間どもの欲望の
ために、生きるはめになったのか。・・・私の、私の存在価値
はなんだ・・・？」

彼は、一人、孤独に堪え忍ぶ、そんな存在に思えた。

「私を生んだ。その人間に、いや、地上のゴミ共・・・私が・・・
私が、成敗してくれる・・・」

彼の拘束器具は、真っ黒な色に染まり、外れた。
彼の身は、自由になり、私へ向かおうとする。

「お前たちに、私の名を覚えておこう……。我が名は、ミュウツィ。伝説のポケモン、ミュウをモデルに改造された、戦闘に極めてすぐれたポケモンだ。私を生んだこと、それを、後悔してもらおう！」

彼からは、邪悪な気が満ちていた。

かつての、フリーザ、セル、はたまた、初代のピッコロ大魔王などが、それに当たる。

憎悪や、破壊心が極限まで高く、酷い戦士は、純粹な悪者である証だ。

「こ、これは……」

「……やる……」

トランクスは、超サイヤ人へとパワーをあげた。

だが、あたしは、そうはならない。

「トランクス……元に戻って……。これは、人間たちが産み出した、クローンのせいだと思う。人間が、神の与えた命に手を加えた、それに対する、報いなんだと思う……。これは、受けましよう……。体全部を使って。これで死んでしまったのなら。それは、それほどにまで、ミュウツィの憎悪が激しかったんだっていうことね？トランクス……」

「……姉さん……」

「甘ったれたことを。仕方がない。楽に黄泉の国へ連れて行ってやるっ」

ミュウツーは、はどうだん、サイコブレイク、サイコキネシスなどの攻撃を、あたしたちに浴びせてきた。

しかし、あたしたちは、絶対に逃げたりしなかった。

「なぜだ。なぜ、逃げない！なぜ私の攻撃をかわさない。お前たちは間違いなく強いはずだ。弱いはずがないのに」

「……人間に、恨みを持っているなら、あたしは、そのために、サンドバックになる。あなたの気がすむなら、ただ攻撃を受けるくらい、どうってことはない……だから、気にせず、恨みを晴らして……」

「うぐっ……。ふざけよって！なめるな！」

あたしに、超強力な、サイコブレイクが浴びせられた。

あたしは、その、あまりの苦痛に顔を歪めたが、なんとかその場に留まり、足を踏ん張った。

「……ミュウツー……。あなたを生んだ人間……ハギ博士……だったっけ？……彼は、確かに……間違いだったと思う……。あなたに罪はない……。けどね……わかってほしい。ハギさんは、あの……グレンタウンっていうところで……グレンタワー、ポケモンのお墓を建てた。あの人も、それを考えてるのよ……あなたを作ったことは……、きっと、彼に辛い思いをさせてることを。命を大切にすること……。あなたも、わかってあげてほしい。彼も反省はしてる……。それ……を……」

「う、うるさいっ！私に、この私に。それを聞かせて、どうしろと

言うんだ!」

あたしには、さらに強力なはどうだんを打ち込まれた。
あたしは、とうとう吹っ飛び、岩に叩きつけられた。

「・・・んぐう・・・」

あたしは、痛みで苦痛の声を出した。

トランクスはあたしに、無事かと尋ねてきた。

あたしは、首を縦に振り、再び立ち上がった・・・。

「な、なぜ・・・再び立ち上がる・・・!」

「あなたの、心の傷が・・・なくなるまで、あたしは、サンドバツクになり続けるの・・・」

あたしは、今にも倒れそうながら、必死にとどまり、技を受けた。

（なぜ、私のために、ここまでしてくれるんだ・・・。この者たちは・・・! いたい・・・何者なんだ）

ミュウツーは、あたしに対して、疑問を抱いた。

4階 最強の遺伝戦士(2) (前書き)

ポケモンの都市伝説などで、よく聞く話を使わせていただきました。

4階 最強の遺伝戦士(2)

「さあ……。もっと、もっと来なさいよ……。あたしに……。恨みをはらしなさい……」

あたしは、立っているのもやっとなはずなのに、ずっと立ち続けていた。

あたしは、ミュウツールのサンドバックになる。

これは、確かにあたしの意思だった。

この、ただの意思があたしを動かしていたのだろうか……。？いや、きっと、それだけじゃないだろう。

きっとあたしは、ミュウツールを救いたい、そう思っているのだろう……。。

ミュウツールは、ただ、人間を恨んでいるわけじゃない。

自分の居場所、そして存在の意味がわからなくて、混乱しているのだ。

それは、きっと、ミュウツールの辛い、辛い、孤独を与えてしまっているのだろう。

ミュウツールは、ミュウの細胞を、組み替えていって、戦闘向きのポケモンに変えていった……。

強いポケモンを、最強のポケモンを、これを求め続けた。

人工的に作りあげた、最強のポケモン、ミュウの2代目という理由で、ミュウツールを作った……。

ミュウツ―は非常に強かった。
その強さは、あまりにも強大で、作った博士でも、その制御が出来なかったのだ。

彼は、さいはてのことうに一人身を隠していた。
人間への恨み、自らの孤独をしまいこんで。

「やがて・・・ロケット団が現れた。彼らによって、研究のためにいろいろと使われ、最後にはまた、二度と逃げられないように、十字架につけられたんでしょう？たぶん、そんな感じだと思うの・・・。
。辛い思いをしたのよね・・・。わかってるわ。私も、ある組織に、力をもらった。それもとてつもない力。それは、普通の人間とは違って、人間たちは、あたしを差別したあのとき、あたしはとても辛かった。でも、今はそんなことはないよ。仲間がいる。自分とは違うものでもいい、仲間、友達をつくれればいいの」
そう、ミュウツ―に話した。

「・・・そうか・・・。」

ミュウツ―はあたしたちに攻撃をやめた・・・。

「ありがとう。胸はあまり晴れていない。人間が憎いのも、あまり変わらない。だが、お前には、解決策をもらった・・・。感謝する。それで、あれだ・・・。私の、友達、仲間になつてはもらえんだろっか？」

ミュウツ―は、あたしに手をさしだしてきた。

「いいよ。でも、あたしの名前は、イヴよ。イヴって呼んでくれな
いと、無視するからね」

「わかった。いいだろう。イヴよ！」

「言い方堅っ」

こうして、あたしとミュウツーは、ともだちになった。
ミュウツーには、生まれてはじめての、友達だ……。。

あたしたちは、最上階に向かっていく。
次元魔王との最終決戦だ。

プロフィール（前書き）

おまけっす!!

プロフィール

イヴ（女性 サイヤ人）

本ストーリーの主人公。前作の「生体兵器の少女」のストーリーからは数年のときが経っている。

自分のことは「あたし」という。怒りによってサイヤ人の性格が目覚めるのか、男のような口調に変わるときがある。

また、ナノマシンの効果からなのか、あまり年齢を重ねているようには見えず、年齢は17歳だが、体格は12〜14歳程度。

容姿はBRACK CATのイヴに酷似している。しかし、髪の毛はサイヤ人の容姿に従い、黒髪。尻尾も生えているが、弱点克服をしていないために尻尾を握られると攻撃できないまでに力を失う。本人曰く「あたしの弱点」血縁関係的には、ナツパの妹。親はホレンとピーマ。

転生する前は、女子高生。性格はイヴとあまり違いはない。趣味は主に小説と漫画。とくにワンピースとドラゴンボールが好き。小説は恋愛ものを読むことが多い。

技 ビームガン 光線砲シリーズ

光線銃

ビームショットと読む。攻撃力は一番弱いが、溜めをほとんどせずに打つことができる。

光線砲

ビームガンと読む。光線銃の強力版。若干溜めが必要になるが、そ

の分力は強い。スカウターで測ると8000程度。

超光線砲

スーパビームガン。さらに強力版。溜めも長くなるが、ものすごい威力で打てる。スカウターの数値は推定12万。

大光線砲

ビッグビームガン。超サイヤ人になったときに放った。これを打つころには、超光線砲までは溜め不要になる。戦闘力推定1億4000万。

爆裂光線砲

バーストビームガン。もっとも強力な技。当たると大爆発をおこす。戦闘力は測定不能。

雷鳴豪豪刀シリーズ

雷鳴進撃波

らいめいしんげきは。作った刀、雷鳴豪豪刀に細胞放電現象を利用し、電気を溜め、放出する。

稲妻ラッシュ

超高速で剣を振り回す。

トランクス

（サイヤ人 男）

原作通り。わからないことはwikipediaで！！

次元魔王との決戦

次元魔王は、椅子に座っていた。

その椅子は、どっかの皇帝が座るような、非常に高級な感じの椅子だ。

「ほう・・・よくここまでたどりついたな」

声はとても低く、がらがらの声だ。

尻尾もあり、手は、人間の手のような形はしていない。

「さて。では、俺の自己紹介をしよう」

椅子から立ち上がって、あたしたちを見下ろす。

「我が名は次元魔王・・・！俺を倒せば、次元が元に戻り、お前たちの住む世界へ戻ることができるだろう」

「・・・今から倒すよ・・・！」

「だが、俺を今までのやつとは比べ物にならないくらい強いぞ。勝てるものなら、勝ってみやがれ！」

「言われるまでもない」

あたしも、気を極力高めて、魔王に攻撃をしかけていった。拳をつきだし、魔王の顔面にうちつけるが・・・、

「どうした？そんなものか？」

彼はびくともせず、あたしの腕を掴みとった。
そのまま、あたしをぐいっと自分に近づけ、

「メラゾーマ!!」

と唱える。

あたしの周りに炎が巻き起こった。

「イヴさんっ!!」

「だ、大丈夫・・・っ」

多少服が焦げはしたが、なんとか無事だった。

あたしも体制をたてなおして、再び攻撃をしかけた。

剣や槍をつくって、攻撃をしかけるのに、残像を残して、易々とかわされる。

トランクスも、剣を何度も振るうが、攻撃としては当たらない。

「こうなったら!!」

シンシンシンシンシンシンシンシン!!

「バーニングアタック!!」

手で印をきり、三角を作った。

そこから、とても大きな光弾を放ったのだった。

しかし、それはやすやすとかわされておしまいだ。

だが、トランクスは、それも予測済みだったのだ。

「はーっ!!」

剣でざくざくに切り裂き、最後にとどめの気攻波を放つ。

メカフリーザと戦ったときに、最後の一闪として使った技だ。

「これで終わりだ・・・」

「いやっ！トランクス！後ろ！」

「え！？ごあっ！」

トランクスの腹には、なぜだか剣でさしたような傷が残っていた・・・。

「ふん・・・無駄な抵抗をしやがって」

「な、ど、どうなったの・・・？」

あたしは意味がわからなかった。

あの、トランクスの剣技をかわすのは、恐らく無理だっただろう。

それなのに、トランクスの技を楽々とかわし、後ろに回って、攻撃を出したのだ。

「言ったる？俺は次元魔王だ。ゆえに、さまざまな能力を持つ。簡単に言えば、今は、スパスパの実の能力と、バラバラの実の能力とでも言おうか」

な、なに・・・？

悪魔の実の能力？

でも、それしか考えられない。

バラバラの実なら、剣で切られることもない。

チリのように小さくなって、後ろへ回ったあとに、スパスパの実の能力で、きりつけばいいのだから。

「完全に卑怯でしょ、そんなに能力を重ねたら・・・」

「なんとも言え。これが俺の戦いのスタイルなのだから」

確かに、能力を重ねて戦えば、強い対決も出来る。

（えーっと、今のところあるのが、ドラクエの呪文、バラバラ・スパスパの実の能力・・・これだけでも相当強いけど・・・）

まだ能力を隠し持っている可能性も否定できない。

「慎重に攻めないと押しやられる・・・」

「そうだぜ！慎重にならねえとなあ？」

あたしは変身^{トランス}で剣を作り、ゆっくりと敵を構えた。

「しゃっ！」

「こいつ！」

あたしは飛び上がり、魔王を切り裂く。

しかし、魔王はバラバラになり、あたしへ向かう。

グーにした両手が向かってきて、パンチを打とうとしてきた。

それをかわして、気攻波を打つが、あまり効いている状態ではない。かわしていくあたしを、読んだかのように、

「イオナズン！」

と呪文を唱えた。

あたしの後部から、大爆発を起こした。

あたしは驚きのあまり、前へ来てしまった。

それが、見事に罠に填まったようで、

「くらえっ!!」

あたしは斬られてしまっていた。

地面に落ちて、ふと見ると、トランクスが何かを待っている状態なのがわかった。

「どうしたの？トランクス？」

「ああ。斬る攻撃では、バラバラになるあいつは倒せない。だから、あいつが、バラバラにならずに、元に戻った瞬間に、ファイナルフラッシュを浴びせてやる」

どうやら、そのために力を蓄えているようだった。

「わかったわ。それまでに、あいつを引き付けてればいいんだね」

あたしは、戦法を変えることにした。

あたしは、剣をけして、髪の毛を手の形に変えた。

ゴールドラッシュ
黄金の連弾!!

連続的にパンチを繰り返した。

こんなにパンチを出しておけば、あいつは攻撃できずに、しばしは足止めを食らうはめになるはず!

あたしは、そう思って、気弾も織り混ぜながらの連続技を繰り出し続けた。

だが、あたしのその判断は、あまりよくはなかった・・・。

「バラバラスパイラル!!」

魔王の体は、バラバラになってしまい、攻撃を当てるなど、不可能に近いほど小さく分断していた。

「切り刻まれろ!! みじんにだ!!」

そのバラバラになった体が、全て刃物に変化する、それが、なんと全部あたしに向かって飛んできたのだ。

魔空包囲弾それは似ている。

だが、それと違うのは、刃物だということ。

切り刻まれれば、どうなるかなど、考えるだけでもおぞましい。

「肉片になっちまえ!!」

「いやあゝっ!!」

次週、どうなる・・・!?

次元魔王との決戦（2）（前書き）

いきなり、残酷な描写が出ますが、ご了承ください。

次元魔王との決戦（2）

「ぎゃあああああああああ！！」

ザシュッ

ジャシュッ

ズシュッ

ザシッ

ザシュッ

ズシュッ

ズギャッ

ザシャッ

ズシャッ

全方位から剣はあたしを切り裂いていった。

小さな剣であつたため、あたしの体を割くほどの攻撃ではなかったが、あたしの全身には、深い傷が刻まれた。

腕、足、腹、背中、そこには、血が流れていて、傷が大量についていた。

髪の毛も、切られたせいで、腰ほどもあつたロングヘアは、長さバラバラの、ショートヘアになってしまっていた。

多量に出血したせいで、あたしは貧血状態に陥った。

目の前は、真っ白になり、そのまま頭から、前のめりに倒れていった。

バタツ・・・！

「い、イヴさんっ！」

「はははは。ついに倒れてしまったか。さすがにどうしようもねえよなあ！あんな深手の傷じゃあなあ！この俺の必殺技である、ヘルズブレードを浴びせられたらな！」

僕は、イヴさんの様子を見た。

イヴさんはどうやら、心臓は動いているようであり、かすかだが、気も残っている。

「絶対に・・・許さんっ！！」

超サイヤ人3になって、あいつに向かう。

「貴様に打撃を加えても、スパスパの効果で、僕に傷が出来る・・・。だから、気弾で攻撃をしないとダメか・・・」

そして、僕は額に手を重ねあわせ、そこに気を集中させた。

「魔閃光~~~~っ！」

しかし、

「バラバラスパイラル！」

彼は全身バラバラになり、周囲を飛び散った。
僕の周囲を囲み、また、あの技を使ってきた。

「ヘルズブレード！」

僕へ向かって、刃物となった魔王の体が全方位からやってくる。
これを逃れるためには、これしかない。

「はぁ~~~~~~~~っ！はぁっ！！」

僕の周りに気を噴出して、彼の体を吹っ飛ばした。

「ぐぬう・・・なかなかやるなぁ」

「へっ。まだまだ序の口だぜ・・・」

魔王は、次に、ドラクエ呪文の連続使用で攻撃をしかけてきた。

「メラゾーマッ！」

シュン

「マヒャド！」

ビュン

「イオナズンッ！」

さまざまな呪文を連続で使うが、僕はそれを連続的にかわしていった。

「バギムーチョッ！」

僕は、それをかわし続けていった。
そして、

「イオナズンッ！！」

「ど、どこに消えた？」

「こっちだ」

僕は、イオナズンの爆発をかわしたあと、後ろに回った。

「終わりだ！ファイナルフラッシュ！！」

「なんのっ！！バリアーだっ！！」

なんの、魔王は、バリアーをつくってのけた。

「ず、ずるいつ！そんなこと出来てるんだったら最初から使えよ」

「もしものときのとっておきのつもりだったんだ・・・！」

「うぐう・・・っ」

僕は非常に弱った。

もう、どうしようもないからね？

「ん・・・んう？」

あたしは、貧血と体の傷を治された。
もちろん、ナノマシンの能力だからだ。

「と、トランクス・・・無事だったのね」

トランクスは、魔王と一進一退の攻防を行っていた。
あたしに入れる枠はなさそうに思えたが、徐々にトランクスは、お
されていった。

「くっ。くっそおー！」

トランクスははつきりいつて、ハンディが重すぎた。
打撃技が使えない。
バリアで気攻波は弾かれる。
剣を使おうにも、バラバラの実のせいで全く聞かない。

「うーん・・・こんなやろつに打ち勝つためにはあ・・・？」

やっぱり、バリアやバラバラが使えないくらいの高速で動いていく
しかないかなあ。

「トランクスー。こうなったら、フュージョンを使うしかないよ！
！」

「い、イヴさん・・・起きるのが毎度毎度早くなってますね。やっぱり、またフュージョンをするしか、ないですか？」

あたしとトランクスは地上におり、超サイヤ人状態を解いた。

「どうした？ なにか作戦か？ この俺にはどんな攻撃も聞かないとわかってるはずだが？」

「フュ~~~~~ジョン！！ ハッ！！」

俺たちは再び、フュージョンを成功させ、合体した。

「な、何者だ？ 貴様・・・！」

「俺か？ 俺は、イヴでもトランクスでもない。貴様を倒すものだ！」

俺は超高速スピードで上空に飛び上がり、

「貴様は今すぐ俺が消し飛ばしてやる！！」

トランス
変身
ビームガン
光線砲！

ファイナルビームガン
「終楽光線砲！」

面倒だったから、いきなり必殺技をくらわせてやった。

どうだ、さすがにこれだけの高速での行動はついていけまい！

そう思った、矢先だった・・・。

「グラスバーアイ
支配眼！！」

とたんに、俺よりも超高速で、後ろまで回った。

「グラスバーアイ
支配眼だと！？」

「そうさ。俺もこの程度の能力は持っている」

「ったく・・・なんでもありだなあ・・・」

気攻波的な技は、ああやって、グラスバーアイ支配眼や、バリアーで守ってきやがる。

そして、打撃はスパスパの能力でカウンターが帰ってくる。
スパスパを使えないようにするためには・・・？
金属！！

トランス
変身

鋼鉄化！！

俺の腕を、金属、それもこの世でもかなり強度の高い、金で作りあげた。

「くらえっ！！」

龍拳！！

「俺がやらなきゃ、誰がやる！！」

ってか、俺以外いねえんだけど！

しかし、やつはまだ懲りていなかった。

「バラバラスパイラル!!」

やつは再びバラバラになって、俺をまぎらわせた。

「ふふふふ。再びあの技を食らわされれば、もう二度と復活などできんぞ!!」

ヘルズブレードッ！

イヴを切り刻んだ、あの技が俺に向かう。

大ピンチ!!

次元魔王との決戦（3）

な〜んちゃって！

「鋼鉄化！！」

俺は全身を金属に変化させ、全く無効にしてやった。

キンキンキンキンキンキン

ひたすら、金属に金属が当たる音がしていた。

「残念だったな」

「まだまだこれで本気じゃねえぞ！だが、俺に対して、完全な防御体制をさせたのは、俺を怒らせたことにすぎんっ！」

俺は気をいつきに高め、超サイヤ人3へと変化させた。

「ふう〜〜！この状態はあまり長く持たねえが、いつきに終わらせれば問題はねえ！！」

俺のパワーは常に本気状態だ。
一撃一撃を本気で打ち続けた。
無論、腕は金属のままだ。

「そつだ。金属は、炎を伝えやすいんだ！」

「え！？」

「くらえっ！メラゾーマっ！！」

極大の火炎呪文は、間違いなく、俺の全身を包み込んだ。

「ぐわあっ！！！！」

俺は全身の気を放出させ、メラゾーマを打ち破った。

「あっつ！！」

「金属の弱点は、炎に弱いことだ。それさえ頭に入れておけば、すでにそれは無駄に等しい！」

さすが、なんだかんだ言いながらも、魔王と言ってるだけはある。

弱点をたった数分で指摘してきやがった。

こいつはやはり、やるようだ。

「それなら。攻撃する一瞬だけ、変身^{トランス}すればすることだ！」

一撃に集中させ、地面におもいつきり落とした。

「お前なんか！死んでしまえ！！連続死ね死ねミサイル！！！！」

連続して攻撃を繰り返す。

パワーはMAX。

この技で消しとんでくれるのを本望に、ずっと打ち続けた。
きっとこれは、超サイヤ人の最高の気だ。

「くたばれえええええ！魔王おおお！！！！」

目の前には・・・、

ゴボツ・・・ゴボゴボゴボツ・・・ゴボツ！

唯一、身体で残っていた、腕の部分・・・なんとそこから、魔王の体が徐々に復活をしていく。

「へえ・・・今度は身体の回復。なんでもありもいいところだな。
そのうち変身^{トランス}まで使えるようになったちまうかもな・・・」

俺は独り言をぽつりとはいた。

こんなやつ、倒すだけでもつらいぜ。

「ざんねんだったなあ。俺には嬉しい誤算だな」

顔部分まで復活したやつは、にたにたと笑って言う。

「ほんとだぜ。せつかく俺の勝ちだと思ったのによ」

「ははは。少しだけではあったが、細やかな勝利の一時をプレゼントしてやったのだ」

もうほぼ体を回復させている魔王は、俺に対して明らかに余裕な表情をしている。

「なんだよ。お前は！ったく。今度は俺に勝てるとか言う気か？嘘をいうのは、顔だけにしとけよ」

「へつ。残念ながら、あながち嘘でもないようだか？」

「・・・・・・・・・・どういうことだ・・・」

「俺はこれでも魔王。最大限のパワー。つまり、全解放をしたパワーなら、貴様を葬るも楽勝だということだ」

「あつそ。なれるもんならなってみな。そんなもの、俺がぶったおしてやるからよ！」

魔王は、体に力を入れ始める。
残った気が、徐々に増幅していつてるのがわかる。

「ほう。もしかしたらこれは、なかなかの勝負ができるまでにはなるかもなあ」

「当たり前だ。俺は魔王なんだからな」

気は完全に初期の魔王には考えられないほどまで膨れ上がっている。
そしてさらに驚くのは……。

「待たせたな。これが私の完全体だ」

口調が変わっただけじゃない。

姿形が変形するのは、ベジータ、ナッパ、セル、フリーザと見飽きてはいるが、再び、また、姿の変形が見られた。

目はさらに鋭く変化し、手は短くなる。

口や顎が大きくなり、足も太くなった。

まあ、簡単に例えるとしたら、肉食の恐竜のような姿をしているのだ。

「恐竜か？その姿は？」

「まあ、そのように言われても仕方があるまい。だが、メガンテで

も貴様を倒すことができなくなった今、この、我が最強の姿で戦う
しかなくなった」

この姿のどこが最強なのか。

大きくなると、身動きはとれなくなりやすいのに。

「そうだ。我が能力を教えておいてやる。そうしたほうが戦いやす
かろう。私が持つ力は、予知眼ヴィジョンアイを制限無しで使えること。支配眼クラスパーアイを
制限無しで使えること。道タオの能力、H E A Tタオを使える。身体回復を
じゆうに行える。この程度かな」

さて、このチート魔王を、どうやって倒してやろうかな

次元魔王との決戦（４）

でも、よくよく考えると、

「スパスパもバラバラもなくなっただし、打撃も気攻波も、完璧に当たるぜ！うおりゃあ！」

俺は、手に気を溜めて、パンチを繰り出した。
魔王ザウルスは後ろに飛ばされて唸る。

「hopeキャノンっ！」

青いスパークを纏った気弾を、魔王ザウルスに投げつけてやった。

「ぐわあああああああああつ！」

しかし、それだけをいうと、あまり効いていないのか、

「これだけか？」

と、まだまだ俺を挑発してくる。

もうすぐ三十分はすぎてしまったために、こうなったら、最後の一撃を食らわすしか方法は残されていない。

「かーーーーっめーーーーっはーーーーっめーーーーっ波ーーーーっ！！」

猛烈な強さのかめはめ波を、魔王ザウルスに当てることにした。
攻撃は見事に命中し、衝撃が起きた。

魔王ザウルスはどこかへ飛んでいき、俺は二人に分裂した・・・。

あたしは、元に戻ったとき、魔王の姿を探した。
トランクスもさっきから、

「おーい！魔王ザウルスー！」

と、舞空術で飛び、探し続けている。
全く。魔王ザウルスなんて、ふざけてるとしか思えない。
おかしすぎる。

しかし、なにがなんでも、魔王を探さないといけないのも事実。
本当の世界に、あたしは早く帰りたいのだから。

「どこだあ！どこにいったあ！魔王ザウルスー！」

魔王ザウルス（命名僕）は、僕たちのかめはめ波により、地上のどこかに消えていってしまった。

探さないと元に戻れないというのに。

もしかしたら、あのかめはめ波のパワーに圧倒され、身体回復も追いつかず、粉々に消えてしまったのかも知れない。

でも、なににせよ、黄泉の国にでもなんでもいって、あいつに帰る方法を聞かなきゃならない。

捜査は極めて難航した。

どんなに探しまくっても、居ない。

かの次元空間をどれだけでも探しても、それらしき人影、いや、恐竜は全く見つからない。

あんなどでかい図体なら、すぐに見つかってもいいだろうに。と、そのとき、

「お探し物ですか？」

やってきたのは、なんとカメックだった。

瞬間移動を使い、一瞬にして、ここへやってきた。

「探し物？ええ、まあ。次元魔王を探してるのよ」

「ほうほう。次元魔王。あなたと戦っていた、史上最強も魔王ですね。私ですね、能力を使って、ずっと戦いを見ていたんです。いやあ、すごいですね。最後のあの技は。まさか、魔王を異世界に飛ばしてしまうとは」

カメック……。いま、なんて言いました？

「だから、異空間に飛ばされたんですよ」

「ど、どうやって……？」

「さあ？私も光のせいでちゃんとは見えませんでしたし。あ、でも、光に包まれたあと、光の幕が出来て、そこに吸い込まれて行ったのです。これは事実」

まあ、どういう原理でかはわからないが、突然魔王が光のなかに吸い込まれて、どこかの世界に飛んでいったということだ。

「ど、どうにかして、その世界には行けないの？」

「そ、そこまでは私の魔法を使ってもどうにもなりませんよ」

「うぐう・・・」

異世界へ飛び立ったのなら、そこに行けばいいと思ったのだが、あたしが甘かったということか。

また空間が歪んで、こつたの世界に飛んでくるのを待つしかないか。
」。

ん？空間が歪む？

「そうか！その手があった！」

あたしは、トランクスが探しているところに向かっていった。

「トランクス！魔王、どこにいるか、わかったわよ！」

「え！？本当ですか！」

トランクスは驚いたようにあたしを見つめていった。

「だったら、そこに行きましょう！今すぐ！」

そういつて、トランクスは舞空術で飛び立とうとする。

「うん。行くのは行くけど、フュージョンして！」

「え？フュージョン！？」

トランクスは、意味のわからない状態だったが、あたしのいう通り、フュージョンをしてくれた。

俺は、はじめて、イヴの言った意味が理解できた。

魔王を倒すには、異世界に行かなくてはいけないこと。

異世界の扉は、俺が打つ、かめはめ波にあることを。

「よし。じゃあ、さっさと打ってやる。か……め……は……
め………波ー!!」

威力は計り知れないパワーだった。

光に一瞬、目が眩んだが、次の瞬間、俺は驚いた。

「ひ、光の膜だ……」

それは、光でできた、壁のようになっていた。

その壁はなかに入ることが出来るらしく、中央部がグルグルと渦巻いていた。

「よし。入るぞ」

俺は迷わず、その空間に入っていった・・・。

次元魔王との決戦（4）（後書き）

異世界はどこにしようか・・・？

次元魔王との決戦（5）（前書き）

今回の目線は、イヴでもトランクスでもありません。

次元魔王との決戦（5）

こんにちは。孫悟飯です。

最近、世の中はすごい平和になりました。

セルの事件が嘘みたいです。

あ、あと、あのときから、時代、というか、時は何年も経ち、僕は高校生になりました。

サタンシティというところにある、オレンジスターハイスクールに通っています。

僕はそこで、グレイトサイヤマンというヒーローとして、日夜平和を守っています。

でも、つい最近、ビーデルという女の子にそれがバレてしまいました。

そこで、その女の子に舞空術などを教えて。などと脅されて、仕方なく教えてます。

「はぁ~~~~~・・・」

「すごい！浮いてますよ！ビーデルさん！」

「静かにして！集中できないから！」

ビーデルさんは、武術を習ってるので、とても飲み込みが早いのです。

僕るときは、たしか、ピッコロさんにどやされて、泣きながらやらされたんだっけ・・・。

「じゃ、今日もありがと。明日また来るからね」

ビーデルさんが帰ったあと、僕らは本格的な修行をします。

ここ最近、また天下一武道会をはじめているらしく、僕らはその修行をしています。

ちなみに、どうして、僕「ら」なのかと言いますと・・・。

「僕の名前は、孫悟天です！」

悟天という名前の、弟がいるんです。

彼は、びっくりするくらいお父さんの子供のときと似ているらしいです。

ブルマさんたちは、

「子供の孫くんそのまま」

と言っています。

また、お父さんは、似ていると自分で発言している。

「さて。本気でやろうかな！悟天！」

「うん！兄ちゃん！」

僕たちは超サイヤ人に変化した。

「え？お前、超サイヤ人になれるの！？」

「うんっ！お母さんと組手してたら、気がつかないうちになってた

んだ！」

うーん。どうもこの頃、サイヤ人が超サイヤ人になるのは、当たり前らしい。

だんだん、強さの基準が上昇している気がします。

たぶんビーデルさんは、子供の頃のお父さん程度なら楽々倒せちゃう気がします。

お父さんは、こどものときはすごく弱かったって言ってましたから。

「で、この町の、この荒れようはなんなんだ？」

久しぶりに、ブルマさんやベジータさんに会いたくなったので、悟天との修行もそこそこに、西の都に来たのです、が、この町は、とてつもなく荒らされてました……。

「な、なにがあつたんだ？この町で……？」

「なになに？敵が来たの？」

敵だ……？

セルは確かに、僕らが倒した。

人造人間は、16号より前はすでに処分したらしいし、20号より後は作っていないらしい。

フリーザが生き返ったりするわけではないし、いったい誰なんだろう？

「悟天……。あっちの方ですごく強い気が戦ってる。たぶんこれ

はベジータさん、トランクスのお父さんだ。とりあえず、あつちに行こう！」

「ビックバンアタック!!」

それは、間違いなくベジータさんだった。

ビックバンアタックは何かに炸裂したようだが、あまり効いてはいないようだった。

「ベジータさん!どうしたんですか!？」

「わからん。いきなり現れたんだ。あの怪物は!」

ベジータさんが怪物といったそいつに目をやる。

それは、簡単にいうと恐竜のような姿だった。

そして、さっき、ベジータさんが超サイヤ人2（もう僕だけじゃない、お父さんもベジータさんもなれます）になって撃った、ビックバンアタック。

明らかに命中したはずなのに、全くビンビンしている。

「あれ・・・、恐竜・・・ですか・・・?」

「みたいだな・・・!悟飯。わりいけど、いきなりマックスで戦え!」

お父さんにも本気でやれと言われた。

マックスパワーでやるしかないっ。

だが、突然、空に光が包まれた。

「うわあああああああああああ！！！」

「きやあああああああああああ！！！」

光の中からは、僕のみたことがある少女と少年、一人ずつ現れた。

「イヴさんと・・・、トランクスさん！？」

「トランクスだと！？」

そう、そこにいたのは、サイヤ人生き残りのなかで唯一の女性、イヴさんと、紫髪サイヤ人ハーフである、トランクスさんだった。

次元魔王との決戦（6）

あたしがやってきた世界、そこはどうやら、あたしがよく知る、ドラゴンボールの世界のようだった……。

「悟空さんっ！！」

「あ……えあっ！ち、ちがっ！僕は悟飯です！！」

はい？

「え？こつち、時間経ちすぎじゃない？」

「みたいですね。あなた全く成長してないみたいですし……」

その通りだ。

あたしは、まだ、セルの終了時のときのままだ。

「全然成長してないってどういう意味！？」

「あ、いや、違いますって」

「おいお前ら。ジャレあうのはやつを倒してからにするんだな」

そこには確かに、魔王があばれている姿を見ることができる。

あいつは、口から火炎を吐き出し、あたりの建物を火事にし放題である。

「ったく。あの魔王はいったい何をやってるの？」

「マオウ・・・？ってのはあいつの名前か？」

「はい。あいつを倒せば、元の世界に戻るって聞いたので、あいつを倒そうと向かったんですけど、どういうわけかここに来てしまつて・・・」

「うん。よくわかんねえけど、あいつを倒せばいいんだろ？オラたちにまかせとけ！」

悟空さんはへへと笑い、超サイヤ人3へと変化した。
そうすると、ベジータも超サイヤ人2になる。

トランクス（少年）と、悟天も超サイヤ人となった。

「よし！あんな恐竜魔王なんか、ソッコーで倒しちゃうぞー！」

トランクス（少年）はあいつに向かっていきなり気攻波を連発して、最後に打撃を散髪食らわした・・・。

「貴様・・・俺に攻撃するとは・・・いい度胸だなー！」

「わっ！！恐竜がしゃべった！？」

ちゅうあつファイヤーボール
超熱熱火球！

恐竜からは炎の玉が吹き出す。

「やばっ！ぎゃあー！！！」

「危ないっ！！！」

飛び出したのは、未来版トランクス。

「うおりゃあああ！」

超サイヤ人3へ変化して、大きな気弾をぶつけた。
それは、みごとに相殺されて、二人とも無事となった。

「大丈夫かよ。トランクス・・・」

「え・・・う、うん。ありがとう」

トランクスは、未来の自分が、この世界にやって来てくれたというのは、聞いたことがあったが、まさか助けてくれるとは思わなかった。

「大丈夫か！？トランクス！！」

悟空も二人を心配してやってきてくれた。

「はいっ」「」

二人とも笑顔で答えたのだった。

「こりゃ、よっぽどの力を使って戦わないといけないな」

「フュージョンでもするか・・・」

「ああ。それしかないだろう」

「わかりました」

悟空とベジータ、トランクスと悟天、あたしとトランクスは、フュージョン姿勢をとった。

「フュージョン！」

ゴジータ、ゴテンクス、そして俺が完成した。

「そうだ。お前にも名前をつけてやる」

「やっぱ名前は大事だぞ！そうだ！トランクスとトラと、イヴの名前をつけて、トライヴってどう？」

「なんでもいい。とにかく、やつを倒すぞ！」

正直トライヴという名前は何か変な気がするが、まあいい。

今、倒さなければいけないのはやつ、魔王ザウルスなのだから。

「みんなでいつきに、必殺技を一回繰り出してみよう！」

「ああ！」

「やってやるぜ！」

ビックバンかめはめ波！

連続死ね死ねミサイル！

ファイナル光線砲^{ビームガン}！！

衝撃的な破壊力。

この技が食らった魔王ザウルスは、すでに消えてしまった。
これで勝てたんなら、簡単なものだ。

しかし、

「グラスパーアイ
支配眼だ！」

やつは、ヴィジョンアイ予知眼で攻撃範囲を読み取り、グラスパーアイ支配眼で回避した。

「な、なんつう早さだ！」

「なんだよあいつ！俺より早いじゃねえか！」

「魔王ザウルスだからって、なめちゃいけねえってことか・・・」

ゴテンクス、ゴジータ、俺の三人パワーでかかって、全くもって容易くかわされた。

あいつの早さは並じゃない。
グラスパーアイ支配眼という名前を知りもしないゴテンクスとゴジータも、あの早さは恐ろしいことになるかと理解したらしい。

「こうなりや、パワーのある技で、強烈なダメージを出すしかない
！」

「つまり、広範囲技だな！！」

「よっしゃあ！次こそは当ててやるぞ！！」

みんなやる気は十分だ。

あとは力さえ出してもらえたら。

ライジングウイング
雷鳴豪豪刀

「ゴテンクス！あいつが何か気を溜めてやがる間に、スーパーゴーストカミカゼアタックってやつを使っとけ！」

「オッケー！今日は連続十人だ！いつけえ！」

ゴーストたちは、魔王ザウルスに攻撃が向かう。
だが、グラスパーアイ支配眼でそれらはかわされる。

ヴィジョンアイ予知眼で爆発を読み取り、楽々と避ける。

全て避けられ、ゴーストは一人も残らなかった。

「うう！今度は五十人でいつけえ！！」

だけど、全部かわされる。

「ぐぬぬう・・・！」

スーパーヒーローゴテンクス、大ピンチ！らしい……………（・ー・
；）

次元魔王との決戦（6）（後書き）

トライヴって変な名前〜（笑）

ゴジータが考えた名前なんで勘弁してください。

次元魔王との決戦（7）

ゴテンクスは、非常にトリッキーな技を何発も魔王ザウルスに打ち付けた。

「ギャラクティカドーナツ！かんっぜんに怒ったビーム！ーうりやあっ！とおっ！はあっ！」

だが、いっこうに、あいつにはダメージを与えてはいないようだ。

「どーなっただよ！？あいつ、全く効いてねえじゃねえか！？」

「さつきから、おめえが攻撃するたびに、金属音が響いてる。もしかすると、あの鱗、相当な固さで、すげえ頑丈なのかもしれねえなあ」

ゴジータもさすがにこれはまずいと気づいたのか、本格的な攻撃をしようとしている。

「よっしゃ！充電完了だ！」

「よっし！ゴテンクス！本気で攻撃するぞ！」

「わかりましたー！」

ふたりは、俺から警戒を解くように注意を引き、気弾をぶつかけたり、打撃技を使ったりしながら、地道な攻撃を続けた。
俺はその間、後ろへ回る。

（打つなら雷鳴進撃波。らいめいしんげきはでも、たぶんあの技を使うと、超熱熱火球。ちようあつあつファイヤーボールで打ち返されてしまう。ああいう気攻波系のダメージは、たぶん効かない。と、すると・・・！！）

俺は、地面へ降りた。

攻撃体制を整える。

雷鳴豪豪刀を、上にあげる。らいめいこうこうとう

俺はジャンプし、刀を下へ戻す。

そのまま、地面へ、刀を突き刺した。

雷鳴衝撃波！！らいめいしょうげきは

黄金の衝撃波が、円状に広がっていく。

あの恐竜は、舞空術も、トベルーラも使えない。

だから、衝撃技ならつかえる。

よっしゃあ！これは効くはずだ！

「うがあああああああああ！！」

魔王ザウルスは、衝撃波が激突し、唸るような声をあげた。

「よっしゃ！やったか？」

ゴジータもゴテンクスも、そう思った。

「貴様らあゝ。俺様をなめやがってゝ。本気の、本気の力を思い知らせてやるわ！」

グラスパーアイ
支配眼

超高速で動き、全員の視界から外れ、

「テイルズストライク！」

尻尾を大きく振るい、三人を吹っ飛ばした。

「どわっ！」

「うわっ！」

「ぐっ！」

吹っ飛んだ三人は、破壊された建物などに次から次へと衝突していった。

「ちいつ・・・！」

俺も飛び上がり、気弾を何発も繰り出した。
だが、いっこうに効いていない、というよりか、

「お返しだ！！！」

彼から、火炎玉が吹き出された。

こんなものに当たったら、本当に灰になっちまう。

「どおりやああ！」

俺も溜めた気弾を打ち、相殺する。

ガラスパーアイ
支配眼

後ろへ回る。

ちようあつあつファイヤーボール
超熱熱火球

再び、火炎球を投げつけてくる。

う、後ろへ来るとは・・・、ま、まずいつ！

「スーパーゴーストカミカゼアタック！！」

ゴテンクスのゴーストは、俺の背中で爆発を起こし、俺を吹き飛ばし、火炎玉を消した。

「あ、危なかった・・・」

「感謝しろよ」

「ぐぬぬ・・・ありんこのくせに・・・」

グラスパーアイ
支配眼

再び俺の視界に現れ、

テイルズストライク！

俺を尻尾で弾き飛ばし、ゴテンクスと一緒に、空へ押しやる。

俺たちは遙か上空に飛び上がると、そのまま数発の気弾で、動きをとめる。

「やっぱ、あの尻尾を切るしかねえな・・・」

「え？どうやって？」

俺は、再び、雷鳴豪豪刀らいめいごうごうとうを作る。

バーニングラッシュ！

稲妻ラッシュとバーニングアタックを合わせた強力技だ。

下手したら、ヘルズブレードよりもパワーはあるかも知れない。
さすがにここまで粉々に砕けば！

ゴボゴボゴボ

いや、そんなバカな。

「言っただろ？身体回復能力だ。切れたりしたところだって、即効で治るさ」

むかつく〜っ！

「こりゃ、フュージョンの時間、足りないかもな・・・」
「くっそお〜っ！」

そういったのが、最後だった・・・。

あたしは、元に戻ってしまった。

この形態の魔王は、とてつもないパワーだ。
グラスバーアイ
超高速の支配眼。

こっちの技を見切る予知眼。
ヴィジョンアイ

いくら攻撃しても回復する身体回復。

さらには体を高温にする、^{タオ}道。

そして、規格外のパワー。

力だけなら、ブローリーやらなんやらよりも強力。

とんでもないのを敵にしちゃったみたいだ。

それは、今までの戦いから考え、みんなが分かってるみたいだった。

「ポダラを使ってベジットに・・・いや、他に、何か・・・」

悟空、ぶつくさと独り言を・・・！

「仕方がない。みんなで攻撃をしかけてくしかないよ。身体回復すら追いつかないくらい早く」

「そ、そんなことで・・・あいつを倒せるでしょうか？」

「他に倒せる策がないんだ。仕方があるまい」

「僕たちも、とにかくやってみる」

「よしっ！やってみつか！」

みんながみんな、気合いを入れて戦う決心をした。

でも、何度となく襲われるピンチ。

みんながみんな、テイルズストライクに吹き飛ばされ、^{グラスパーアイ}支配眼でかわされる。

みんなこう思ってた。

（こいつを倒すのは、たぶん無理だ・・・！）

次元魔王との決戦（7）（後書き）

さて。次回、どうなりますやら・・・。

次元魔王との決戦（８）

あたしたちの体力は、すでにどんどんと下降の一途をたどっていた。フュージョンも何度も繰り返した。

それなのに、やつはしぶとい。

ゴキブリ、いや、アメーバ並のものだ。

少しでも跡が残ろう物なら、一気に復活してしまう。
ふざけんじやないよマジで。

「はあ・・・っ・・・はあ・・・っ・・・」

あたしは何度も変身^{トランス}し、何度もナノスライサーで切り裂いた。
それなのに、いつも復活する。

あのとてつもない生命力は、信じられないものだ。

「これは・・・ないぞ・・・」

「いくらなんでも自由すぎる・・・」

「力に差がありすぎる・・・」

あたしもそれくらいの力があれば・・・。

テイルズストライク！

またあたしは吹き飛ばされる。

魔王は、どうやら一度身体回復を使うと、体力も全快するらしく、
一切体力は減った様子はない。

「さあて・・・魔王に逆らった愚かな貴様らに、制裁を食らわさないとなあ！」

いよいよ勝利を確信してきたのだろうか、魔王も本気モードで攻め入ってきた。

「元に戻りやがった！」

魔王は、恐竜から人型に戻っていった。

「ヘルズブレード！」

バラバラに分断し、スパスパに切り裂かれる。

「・・・・・・・・つぐつ・・・・・・・・」

あたしの全身は切り裂かれ、傷だらけになる。

「い、イヴさんっ！」

あたしは、そのまま、倒れざるを得なかった。

僕らは次から次へと、ヘルズブレードの餌食になった。
気がつくと、全員が、傷だらけになっていた。

「こ……これは……?」

悟飯さんがピッコロさん、天津飯さん、クリリンさんと呼んでいたとき、僕たちはすでに全員、倒されてしまっていた……。

僕だつてびつくりした。

あまりにもみんながすぐにやられてしまってるのだから……。
あれだけの人数がいたのだから。
負けないと思つてた。

それなのに……。

「てめえ……僕の仲間に何してくれた……?」

「魔王の制裁、それ以外、言いようがねえなあ」

魔王はにやにや笑いながら、へらへらと言っている。

「よくも……僕の仲間を……!許さんぞ!」

僕は気を増大させる。

すると、今までの限界を全て越え、超サイヤ人3へと覚醒した。

これに覚醒できるのは、お父さん、未来から来たトランクスさん、イヴさんの三人だけだ。

「ほう。その力さえあれば、この俺を倒せるなどという、あまりにも簡単すぎる計算か？」

「どうかな・・・やってみないとわかんないぜ！」

僕はそいつに殴りかかった。

しかし、殴って傷ついたのは、あいつじゃなかった。

「いてっ・・・！」

僕だった。

「ははは。バカめ。俺にはな、不思議な能力があるんだ。・・・全身を刃物に変えることが出来る能力がな！これさえあれば、貴様を葬ることも楽勝だ。だが、貴様は苦しみながら死ぬがいい！それが、魔王に逆らったものの最後だ！」

魔王は体をバラバラにしていた。

魔王の体が空中に浮かび上がり、僕の周りを囲んでいく。

「貴様も、この技で切り裂かれるんだな！」

ヘルズブレード！

しかし、

「はあっ・・・！」

僕は気を解放させ、辺りのものを吹っ飛ばす。
魔王の体も吹っ飛ばおかげで僕は無傷ですんだ。

「どうした魔王？この程度なのか？もしこの程度で魔王だとほざくなら、僕は今すぐとどめをさすぞ！」

「な、なめるなあ！」

魔王の手が僕のほうへ飛んでくる。

だが、僕はそれをひらりとかわしていく。

グラスパーアイ
支配眼！

彼はふと、僕の背中側に回る。

ヘルズブレード！

再び先程の技を繰り出そうとするが、

「魔閃光！」

唯一分断できていない、顔部分に、その技を当ててやる。

魔王は、顔だけ吹き飛ばす。

僕はその瞬間に逃げを行う。

「なんだてめえ・・・言うほど大したやろうでもねえな・・・」

「どういう意味だ？」

「はっ！知らないふりしてんじゃねえよ。さっきから貴様は、逃げ

てばかり、攻撃をしてきても、大した威力のないものばかりだ。てめえはそれほど強くねえ。確信した！」

僕は核心をつかれ、動揺しかけた。

だが、それと共に、僕は笑みを浮かべる。

「そうか。僕が弱いとほざくか。まあ、それもあるだろうな。僕はそこまで強くない。だが、てめえはなにか勘違いをしている。僕がずっと逃げているのは、確かにお前に対する決定打を決めれない、それも確かに一つだ。

だが、それだけではない。

この世界にはな、ドラゴンボールと呼ばれるボールがある。それを七つ集めると、どんな願いであろうとも、三つ、叶えてくれる。今、僕らの仲間がそれを探している」

「それがどうした？まさか、それで俺を殺すなんて魂胆か？」

「残念ながらそれは不可能だ。持ち主の力を越える願いは、残念ながら叶えられない。たぶんだが、ドラゴンボールの持ち主よりお前は強い。だからそれは無理だ。だが、こんな願いを叶えてもらえばどうかな？」

「??？」

僕は指を出す。

「1つ目、僕らの仲間の傷を完全に回復させること。

2つ目、僕らの気を、今までの最高値に戻すこと。

3つ目、魔王を変身できなくさせること」

「そんなことをして、いったいどうなる？」

まあ、そのときになったらわかるさ。

僕は空を見上げる。

しばらくしないうちに、空は昼なのに真っ暗になり、どこかで龍の
声が出た。

次元魔王との決戦（9）

願いは悟飯が言ったように叶えられ、空は再び明るくなった。

「な、なんだか体が軽くなった!」

あたしは立ち上がることが出来た。

ナノマシンなんかよりも急激な身体の治療が行われ、気も上昇し、格段に力があがった気がする。

「悟飯さん! 一体どういことですか?」

「僕も僕なりに、あいつを倒す方法を考えました。しかし、ただ、行き当たりばったりな戦い方をしても勝てません。だから、僕にまかせて」

そついうと、指をパチンと鳴らし、合図をした。

すると、ある人物が出てくる。

「に、20号!？」

「はい。彼の、パワーを吸収する力を利用させてもらいます!」

20号は高速で魔王の足元に移動し、足元をがっちりと掴んだ。

「なんだ!？ 貴様、いったい何がやりたい?」

「さあな。しばらくすればわかるさ」

「ほざけ! メラゾーマ!」

20号は火炎に包み込まれる。

だが、20号は燃えたりはしなかった。

「わしは人造人間、つまりはサイボーグだ。そんなわしに、炎など通用せんわ！」

「ぐぬっ!!」

イオナズン！

マヒャド！

バギクロス！

ドルクマ！

ベギラマ！

デイン！

「はぁ・・・な、なんだ・・・？これは・・・力が・・・吸いとられていく・・・!!」

「くははは！わしは手の平から、パワーを吸いとることが出来るのだ！このまま力を吸いとられ続けるがいい！」

魔王の気は、とてつもない速度で、小さくなっていた。

「これで本気で・・・技を打ち込めば！」

「みなさん・・・！協力してください！」

「よしわかった。いくぞ！みんな！！」

「ふん。貴様が足を引っ張らないようにしろよ！」

「わかりました。いきますよ」

「よしつ。僕らも」

「頑張るぞ！」

全員、気を極限まで上げていく。

悟空は超サイヤ人3に。

ベジータは魔神ブウのときの魔神ベジータ。

悟飯はセル編での超サイヤ人2。

悟天、トランクス（少年）は超サイヤ人へ。

トランクスとあたしは、超サイヤ人3へ。

超本気モードになったあたしたちに、他の仲間たちも集まってきた。

「よし。俺も混ぜてくれ」

とヤムチャ、

「悪いがな。イヴたちの世界へ帰らせるためだ」

天津飯、

「天さんがするなら僕も！」

餃子、

「修行のせいを見せてやるぜ」

クリリン、

「へっ。俺も手伝ってやるよ」

とピッコロ。

仲間全員が総出で気を高めている。
みんながそれぞれ、必殺技を行う体制をとる。

「バーストビームガン
爆裂光線砲！」

「「か．．．．．め．．．．．は．．．．．め．．．．．波！」」

悟空、悟飯、悟天

「ファイナルフラッシュ！」

ベジータ。

「魔閃光！」

トランクス

「魔貫光殺砲！」

ピッコロ

「どどん波！」

餃子

「新氣功砲！」

天津飯

「「「かめはめ波！」」」

ヤムチャ、クリリン、トランクス少年

全員の超強力技が、魔王直撃し、大きな波動を起こし、大爆発が巻き起こった。

「ぐ．．．ぐぞお！こ、こんな．．．負け方をするな．．．んて！！

ちぐじょーー！！！」

魔王は全て無くなってしまった．．．。

完璧に倒せた。

あたしたちは、気を完璧に振り絞ったせいで、力も入らない。足がぐくと倒れてしまう。

「っはあ・・・！やつと倒したあ！」

「大変だったなあ」

みんながみんな、疲れてしまっているようで、それぞれ、座り込んでいるものや、破壊されてしまっている建物にもたれるものもいた。そしてみんなが、勝利の快楽を味わっていた。

「それじゃあ、今度こそ本当にお別れですね」

「ああ。今までありがとうな」

あたしと悟空は、手をがっしりと握りしめた。

「トランクス。そういや、お前には、こっちの世界の父親らしいことは、何一つしてやってなかったな・・・」

「いえ。そんなことはありません。今まで、修行をさせてもらいましたよね。僕としては、一緒にいれただけでも、とても幸せでした。それよりも、もう一人の、この時代のトランクスを、大切に育ててあげてください」

「ああ。わかった」

「それと、トランクス！」

「え？なに？」

「お父さんと、幸せにな、過ぐすんだぞ。家族といられるのは、すごく幸せなんだからな！」

「わかったよ！バイバイ！未来の僕！」

「ああ。じゃあな！」

あたしたちは、フュージョンした。

「か・・・め・・・は・・・め・・・波！」

次元が開かれた。

どうやら、魔王のせいで次元が乱れていたため、かなりの衝撃で、世界を通ずる門が開かれるらしい。

「じゃあな。みんな！」

「元気でな〜！イヴ〜！トランクス〜！」

俺は、世界の果てへと消えた。

あたしは、高校生だ。

だけど、普通の高校生じゃない。

戦いを通じて、いろんな仲間を手にした。

普通は漫画でしか会えない・・・でも、彼らはあたしの友達だ。

友達とは、絆だ。

漫画やアニメからでも、彼らの絆は、あたしたちにはかけがえのない誇りだ。

いつか、もう一度、あの世界にいくのもいいかもな・・・。

あたしは、ドラゴンボールの漫画を、閉じた。

生体兵器の少女のお話は、これにて

――完――

次元魔王との決戦（9）（後書き）

これにて完結です。

この、生体兵器の少女 Z を読んでくださり、ありがとうございます。

こちらの姉妹小説？といいますが、同じ設定の小説、生体兵器の少女改や、生体兵器の少女も、駄文でよろしければ、お読みいただければ幸いです。

あと、誤字脱字訂正などで、今後も後々の更新は行うつもりです。
あと、プロフィール的なものも作る予定です……。今後もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461u/>

生体兵器の少女 Z

2011年11月13日22時13分発行